

平成二七年度 学位申請論文

キリシタン版軍記の文学的研究 別冊資料

龍谷大学大学院文学研究科研究生

L一五R五三八

中本
茜

【目次】

凡例		1
表 1	キリシタン版一覧表	2
表 2	〈天草本〉全章段および『平家物語』章段の抄出状況	8
表 3	〈拔書〉全章段および『太平記』章段の抄出状況	16
表 4	喜一検校と右馬之允の対話・問答一覧	28
表 5	〈天草本〉が神仏表現をそのまま採録する場合	50
表 6	〈天草本〉が神仏表現を省略する場合	55
表 7	〈天草本〉が神仏表現を別の表現に言い換えて採録する場合	65
表 8	〈天草本〉が〈天〉を増補する場合	71
表 9	〈天草本〉で神仏が人間の運命を左右する例	72
表 10	〈天草本〉の〈天〉の用例	72
表 11	喜一検校による評価に副詞「まことに」を付加した例	76
表 12	『平家物語』は係り結びだが、喜一検校による評価に副詞「まことに」を付加しなかった例	80
表 13	〈天草本〉が採録した「前兆」、經典の文句、天孫の記述	82
表 14	〈天草本〉が省略した「前兆」、經典の文句、天孫の記述	83
表 15	〈拔書〉が採録した「前兆」、經典の文句、天孫の記述	92
表 16	〈拔書〉が省略した「前兆」、經典の文句、天孫の記述	103
表 17	〈拔書〉が神仏表現をそのまま採録する場合	106
表 18	〈拔書〉が神仏表現を省略する場合	112
表 19	〈拔書〉が神仏表現を別の表現に言い換えて採録する場合	116

【凡例】

一、本論文でいう「キリシタン版軍記」とは、天草版『平家物語』とキリシタン版『太平記抜書』のこととし、それぞれ〈天草本〉〈抜書〉と表記した。

二、天草版『平家物語』のテキストには、『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』（亀井高孝・阪田雪子翻字、昭和五五年、吉川弘文館）を使用し、キリシタン版『太平記抜書』のテキストには、キリシタン文学双書『キリシタン版太平記抜書』一～三（平成一九年～二一年、教文館）を使用した。

三、考察の中で、キリシタン版軍記と比較する『平家物語』と『太平記』には、次の四書を用いた。

『平家物語』

① 斯道文庫蔵百二十句本…斯道文庫古典叢刊之二『百二十句本平家物語』（昭和六一年、汲古書院）。

② 平仮名百二十句本…国立国会図書館蔵本を底本とする新潮日本古典集成『平家物語』上中下（平成一三～一五年、新潮社）。

③ 寛一本…龍谷大学図書館蔵本を底本とする日本古典文学大系『平家物語』上下（昭和四八年、岩波書店）。『太平記』

④ 慶長八年古活字版本…鎌田共済会郷土博物館蔵本および東洋文庫蔵本を底本とする日本古典文学大系『太平記』一～三（昭和三五～三七年、岩波書店）。

四、引用に際し、旧字体は通行の字体に改めた。また天草版『平家物語』の本文中に使用されている「,」「.」「:」「」の記号は、それぞれ「,」「.」「:」「」とした。

五、天草版『平家物語』の巻四とキリシタン版『太平記抜書』の巻二には、第一〇章が二つ存在するため、それぞれを「第一〇章(a)」「第一〇章(b)」と表記した。

【表1】キリシタン版一覽表

※表作成には、『国史大辞典』（昭和五九年、吉川弘文館）の「キリシタン版」の項、『キリシタンと出版』（平成二五年、八木書店）の附録「イエズス会刊行キリシタン版一覽」、天理図書館善本叢書と書之部『きりしたん版集二』（昭和五三年、八木書店）の大塚光信氏による解題等を参考とした。

※書名の上に「※」が付いているものは合綴本である。

(a) 宗 教 書				区分
書名	刊行年・刊行地	言語（表記）	主な所蔵先	主な影印・翻字・翻訳本など
①『サントスの御作業の内抜書』	天正一九年（一五九一） 加津佐刊	日本語 （ローマ字 文語体）	【国外】 ・オックスフォード大学 ボードレイ図書館 （イギリス） ・マルチアナ図書館 （イタリア）	・『サントスの御作業』 （昭和五一年、勉誠社） ・『サントスの御作業 翻字・研究篇』 （昭和五四年、勉誠社） ・『サントスのご作業の 内抜書』 （平成一八年、雄松堂）
②『どちらいな・きりしたん』	天正一九年（一五九一） 加津佐刊か	日本語 （漢字平仮名 交じり 文語体）	【国外】 ・バチカン図書館 （バチカン）	・『キリシタン書 排耶書』 （昭和四五年、岩波書店） ・『どちらいな・きりしたん』 （昭和五三年、雄松堂）
③『ドチリイナ・キリシタン』	文禄元年（一五九二） 天草刊	日本語 （ローマ字 文語体）	【国内】 ・東洋文庫（東京都）	・『文禄元年天草版 吉利支丹教義の研究』 （昭和三年、東洋文庫）
④『ヒイデスの導師』	文禄元年（一五九二） 天草刊	日本語 （ローマ字 文語体）	【国外】 ・ライデン大学図書館 （オランダ）	・『キリシタン版ヒイデス の導師』 （昭和六〇年、清文堂） ・『ヒイデスの導師』 （平成七年、教文館）
⑤『ばうちずもの授けやう』	文禄二年（一五九三） 天草刊か	日本語 （漢字平仮名 交じり 文語体）	【国内】 ・天理図書館（奈良県）	・『きりしたん版集一』 （昭和五一年、八木書店）

(a) 宗教書

⑥『コンテムツスムンヂ』	慶長元年（一五九六） 天草刊か	日本語 （ローマ字 文語体）	【国外】 ・アンブロシア文庫 （イタリア） ・オックスフォード大学 ボードレイ図書館	・『コンテンツス・ムンヂ』 （昭和五三年、雄松堂） ・『コンテムツス・ムンヂ』 （昭和五四年、勉誠社） ・『コンテムツスムンヂ』 （平成一四年、教文館）
⑦『靈操』（『心霊修行』）	慶長元年（一五九六） 天草刊	ラテン語	【国外】 ・オッペルスドルフ家 （シレジア） ※現在不明	ナシ
⑧『精神生活綱要』 （『精神修養の提要』）	慶長元年（一五九六） 天草刊か	ラテン語	【国内】 ・天理図書館 【国外】 ・アウグステイノ修道院 （スペイン） ・中国国家図書館（中国）	・『精神修養の提要』 （昭和五一年、八木書店）
⑨『ナバルスの告解提要』	慶長二年（一五九七） 天草刊か	ラテン語	【国外】 ・サント・トマス大学図書館 （フィリピン）	ナシ
⑩『さるばとるむんぢ』	慶長三年（一五九八） 長崎刊か	日本語 （漢字平仮名 交じり 文語体）	【国外】 ・カサナテ図書館 （イタリア）	・『サルバートル・ムンヂ』 （昭和五三年、雄松堂）
⑪『ぎやど・ぺかどる』	慶長四年（一五九九） 長崎刊か	日本語 （漢字平仮名 交じり 文語体）	【国内】 ・イエズス会日本管区 （下巻のみ、東京都） ・天理図書館（上巻のみ） 【国外】 ・大英図書館（イギリス） ・パチカン図書館	・『ぎやど・ぺかどる』 （昭和五六年、勉誠社） ・『きりしたん版集一』 （昭和五一年、八木書店） ・『ぎやど・ぺかどる』 （平成一八年、雄松堂）
⑫『どちらな・きりしたん』	慶長五年（一六〇〇）	日本語	【国外】	・『どちらな・きりしたん』

(a) 宗 教 書

⑬『ドチリナ・キリシタン』	慶長五年（一六〇〇） 長崎刊か	長崎刊	日本語 （ローマ字 文語体）	・【国内】 徳川ミュージアム （茨城県）	（昭和五三年、雄松堂） ・『どちなきりしたん カサナテンセ本』 （昭和五四年、勉誠社）
⑭『おらしよの翻訳』	慶長五年（一六〇〇） 長崎刊	長崎刊	日本語 （漢字平仮名 交じり 文語体）	・【国内】 天理図書館	（昭和四四年、大阪毎日新聞社） ・『どちなきりしたん 総索引』 （昭和四六年、風間書房） ・『きりしたん版集一』 （昭和五一年、八木書店）
⑮『金言集』	慶長八年（一六〇三） 長崎刊か	長崎刊	ラテン語	・【国外】 中国国家図書館	・『Aphorismi confessoriorum』 （平成二二年、雄松堂） ・『キリシタン書 排耶書』 （昭和四五年、岩波書店） ・『Manuale ad sacramenta ecclesiae ministranda』 （平成一八年、雄松堂）
⑯『サカラメント提要』 （本編・日本語附録）	慶長一〇年（一六〇五） 長崎刊	ラテン語 日本語 （ローマ字 文語体）	・【国内】 （本編） ・上智大学キリシタン文庫 （東京都） ・東洋文庫 【国外】 （本編） ・大英図書館 ・トゥルーズ図書館 （フランス） （日本語附録） ・中国国家図書館		

(b) 辞典・字書			(a) 宗教書		
⑲『落葉集』	⑳『ひですの経』	㉑『天草版ラテン文典』	㉒『羅葡日対訳辞書』	⑮『こんてむつすむんぢ』 (『こんてむつすむん地』)	⑮『聖教精華』
慶長三年(一五九八)	慶長一六年(一六一一) 長崎刊	文禄三年(一五九四) 天草刊	文禄四年(一五九五) 天草刊	慶長一五年(一六一〇) 京都刊	慶長一五年(一六一〇) 長崎刊
日本語	日本語 (漢字平仮名 交じり 文語体)	ラテン語 ポルトガル語 日本語 (ローマ字)	ラテン語 ポルトガル語 日本語 (ローマ字)	日本語 (漢字平仮名 交じり 文語体)	ラテン語
【国外】	【国外】 ・ハーバード大学 ホートン図書館 (アメリカ)	【国外】 ・アンジェリカ図書館 (イタリア) ・エボラ公共図書館 (ポルトガル)	【国外】 ・中国国家図書館 ・パリ学士院文庫 (フランス) ・ライデン大学図書館 ・ロンドン大学 オリエント・アフリカ研究所 (イギリス)	【国内】 ・天理図書館 【国外】 ・ポルト市立図書館 (ポルトガル)	【国内】 ・大浦天主堂(長崎県) 【国外】 ・アウグステイノ修道院
・『キリシタン版落葉集』	・『ひですの経』 (平成二三年、八木書店)	・『Classica Japonica』 第五次語学篇Ⅱ (昭和四九年、天理図書館) ・『天草版ラテン文典』 (平成二四年、八木書店)	・『ラ葡日対訳辞書』 (昭和二五〜二七年、東洋文庫)	・『吉利支丹文学集上』 (昭和三二年、朝日新聞社) ・『きりしたん版集一』 (昭和五一年、八木書店)	・『スピリツアル修行の 研究影印・翻字篇』 (昭和五〇年、風間書房)
				・『聖教精華』 (昭和五三年、雄松堂) ・『聖教精華』 (平成二七年、勉誠出版)	・『聖教精華』

(c) 古典文学の翻訳・改題編書		(b) 辞典・字書		
	※②⑥天草版『平家物語』	②⑤『日本大文典』	②④『日葡辞書』	
	文禄二年（一五九三） 天草刊	慶長九〜一三年 （一六〇四〜一六〇八） 長崎刊	〔本編〕 慶長八年（一六〇三） 長崎刊 〔補遺〕 慶長九年（一六〇四） 長崎刊	長崎刊か
	日本語 （ローマ字 口語体 一部文語体）	ポルトガル語 日本語 （ローマ字）	ポルトガル語 日本語 （ローマ字）	（漢字平仮名 交じり）
	・【国外】 大英図書館	・【国外】 ・オックスフォード大学 ボードレイ図書館 ・クロフォード家	・【国外】 ・エボラ公共図書館 ・オックスフォード大学 ボードレイ図書館 ・フランス国立図書館	・イエズス会ローマ文書館 （イタリア） ・クロフォード家 （イギリス） ・大英図書館 ・フランス国立図書館 （フランス） ・ライデン大学図書館
	・『天草版平家物語』 （昭和五五年、新典社）	・『日本大文典』 （昭和五一年、勉誠社） ・『日本大文典』 （昭和三〇年、三省堂） ・『ハビヤン抄キリシタン版 平家物語』 （昭和五五年、吉川弘文館） ・『天草版平家物語対照本 及び総索引 本文篇』 （昭和六一年、明治書院）	・『邦訳日葡辞書』 （昭和五五年、岩波書店） ・『エヴォラ本日葡辞書』 （平成一一年、清文堂） ・『日葡辞書 キリシタン版 カラー影印版』 （平成二五年、勉誠出版）	（昭和五二年、勉誠社） ・『耶蘇会板落葉集総索引 字訓索引・字音索引』 （昭和五三年、笠間書院） ・『ライデン大学図書館蔵 落葉集影印と研究』 （昭和五九年、ひたく書房）

(c) 古典文学の翻訳・改編書				
※②⑦『エソポ物語』『イソポ物語』	文禄二年（一五九三） 天草刊	日本語 （ローマ字 口語体）	【国外】 ・大英図書館	・『文禄二年耶蘇會板 伊曾保物語』 （昭和三八年、京都大学国文学会） ・『天草版伊曾保物語』 （昭和五一年、勉誠社） ・『天草版伊曾保物語影印 及び全注釈 言葉の和らげ 影印及び翻刻翻訳』 （平成二三年、新典社）
※②⑧『金句集』	文禄二年（一五九三） 天草刊	日本語 （ローマ字 口語体）	【国外】 ・大英図書館	・『天草版金句集の研究』 （昭和一三年、東洋文庫） ・『金句集四種集成』 （昭和五二年、勉誠社）
②⑨「朗詠雑筆」（『倭漢朗詠集』）	慶長五年（一六〇〇） 長崎刊か	日本語 （漢字平仮名 交じり 文語体） 漢文	【国外】 ・サン・ロレンソ図書館 （スペイン）	・『慶長五年耶蘇會板 倭漢朗詠集』 （昭和三九年、京都大学国文学会）
③⑩キリシタン版『太平記拔書』	不明	日本語 （漢字平仮名 交じり 文語体）	【国内】 ・天理図書館	・『きりしたん版集二』 （昭和五三年、八木書店） ・『キリシタン版太平記拔書』 （平成一九〇二年、教文館）

【表2】〈天草本〉全章段および『平家物語』章段の抄出状況

※〈天草本〉と比較する『平家物語』には、平仮名百二十句本（新潮日本古典集成『平家物語』上中下、平成一三～一五年、新潮社）を用いた。

〈天草本〉の巻数と章段名		採録した『平家物語』章段	省略した『平家物語』章段
巻一第一章	平家の先祖の系図、また忠盛の上のほまれと、清盛の威勢栄華のこと。	一句「殿上の闇討」 二句「三台上祿」	×
×	×	×	三句「二代后」 四句「額打論」 ※五句「義王」六句「義王出家」は巻二第一章へ移動。
巻一第二章	重盛の次男関白殿へ狼藉をなされたこと…これ平家に対しての謀叛の根源となったこと。	七句「殿下乗合」	×
巻一第三章	成親卿位争ひゆゑに、平家に対し謀叛を企てられたことが現れ、その身をはじめ、くみしたほどの者搦め捕られ、そのうちに西光といふ者は首をうたれたこと。	八句「成親大将謀叛」	九句「北の政所誓願」 一〇句「神興振り」 一一句「明雲座主流罪」 一二句「明雲帰山」
巻一第四章	重盛父の清盛に成親卿を害せられぬやうに、教訓をせられたこと。	一三句「多田の蔵人返り忠」 一四句「小教訓」 一五句「平宰相、少将乞ひ請くる事」	×
巻一第五章	成親卿の子息少将についてのこと。	一五句「平宰相、少将乞ひ請くる事」	×
巻一第六章	重盛父清盛の法皇へ対し奉つての憤りの深いことを諫められ、その謀として、勢を集められたこと。	一六句「大教訓」	×
巻一第七章	成親卿と、その子少将流罪に行はれたこと。	一七句「成親流罪・少将流罪」	×

卷一第八章 成親の最後のこと…その北の方都にて尼になりかの後世をとむらはれたこと。ならびに少将かさねて鬼界が島へ流され、そこで康頼や、俊寛などと憂き目をしのがれたこと。	一八句「三人鬼界が島に流さるる事」 一九句「成親死去」	×
卷一第九章 康頼と、少将とかの島で熊野詣のまねをし、また卒塔婆をつくって流されたことを蘇武が雁書にひきあはせて語ること。	一八句「三人鬼界が島に流さるる事」	×
×	×	二〇句「徳大寺殿厳島参詣」 二二句「伝法灌頂」
卷一第一〇章 鬼界が島の流人を許さるるについて、あとに残らるる俊寛の悲しみ深いこと。	二二句「大赦」	×
×	×	二三句「御産の巻」 二四句「大塔修理」
卷一第十一章 少将、康頼都へ帰らるる道すがらのこと。	二五句「少将帰洛」	×
卷一第十二章 有王鬼界が島に渡って、俊寛にあひ…俊寛死去せらるれば茶毘をして、その遺骨を首にかけ、都へかへり上り、方々修行して、その後世をとむらうたこと。	二六句「有王島下り」	×
×	×	二七句「金渡し 医師問答」 ※目録には二八句「小督」があるが、「小督」の内容は五三句「葵の女御」にある。 二九句「法印問答」 三〇句「関白流罪」 三一句「厳島御幸」
卷一第十三章 妓王清盛に愛せられたこと…同じく仏といふ白拍子に	五句「義王」 六句「義王出家」	×

卷二第九章 文覚のすすめによつて頼朝の謀叛をおこさせられたことと、平家はまたこれを平げうとて、討手をくだされたこと。	四六句「文覚」 四七句「平家東国下向」 四八句「富士川」	×
卷二第一〇章 平家の兵ども鳥の羽音に驚いて、敗軍して面目を失ひ、京へのぼれば、頼朝は軍に勝つて鎌倉へ歸られたこと。	四八句「富士川」 四九句「五節の沙汰」	×
×	×	五〇句「奈良炎上」 五一句「高倉の院崩御」 五二句「紅葉の巻」 五三句「葵の女御」
卷三第一章 木曾殿の由来と、平家に対して謀叛をおこされ、平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと。	五四句「義仲謀叛」	五五句「入道死去」 五六句「祇園の女御」 五七句「邦綱死去」 五八句「須俣川」 五九句「城の太郎頼死」
卷三第二章 平家木曾を滅ぼさうとて、北国へ下らるれば、そのうちに木曾と、頼朝不和のことがあつたれども、つひに和睦せられたこと…また木曾殿が火燧が城におかれた斉明威儀師謀叛をおこし、平家の味方してその城をとらせたこと。	六〇句「城の四郎官途」 六一句「平家北国下向」 六二句「火打合戦」	×
卷三第三章 木曾も、平家もたがひに方々へ人数くばりをしたことと、同じく倶利伽羅が谷で合戦して、平家を残り少ないうちなし、また志保坂の合戦にも木曾うち勝ったこと。	六二句「火打合戦」 六三句「木曾の願書」	×
卷三第四章 篠原の合戦にも平家負けられたこと…ならびに実盛が討死してその鬚を洗はれたこと。	六四句「実盛」	×
卷三第五章	六五句「玄昉の沙汰」	×

木曾軍の評定をして比叡の山を語らるれば、すなはち比叡の山も木曾にくみし、平家をそむいたこと…ならびに平家西国の合戦には勝利を得られたこと。	六六句「義仲山門牒状」 六七句「平家の一門願書」 六八句「法皇鞍馬落ち」 六八句「法皇鞍馬落ち」	×
卷三第六章 木曾諸方から都へ入ると聞いて、平家は主上をも法皇をもとり奉って、西国へ落ちうとせらるる時、法皇いづちともなく失せさせられたことと…同じく平家の都落ちと、また忠度の歌の沙汰。	六八句「法皇鞍馬落ち」	×
卷三第七章 維盛の落ちらるれば、北の方をはじめ、子たちの維盛を慕はれたこと。	六九句「維盛都落ち」	×
卷三第八章 平家の一門は都を落ちらるるそのうちに池の大納言殿は都にとどまられたこと…同じく福原を立たるるとて、一門の人々なごりを惜しまれたこと。	七〇句「平家一門都落ち」	×
卷三第九章 法皇鞍馬の寺から比叡の山へ還御あつたことと、平家の西国へ落ちられてからのこと。	七一句「四の宮即位」 七二句「宇佐詣で」 七三句「緒環」 七三句「緒環」 七四句「柳が浦落ち」	×
卷三第一〇章 院宣によって豊後の緒方平家に対し謀叛をおこすによって、平家あつかはるれどもかなはず…つひに太宰の府にもえたまられいで、かちはだして落ちさまよはれたことと、八島の内裏づくりのこと。	七三句「緒環」 七四句「柳が浦落ち」	×
×	七五句「頼朝院宣申」	
卷三第十一章 木曾が猫間殿に会うての無難と、車に乗って牛にひきずられたこと。	七六句「木曾猫間の対面」	×
卷三第十二章 平家室山、水島二か所の合戦にうち勝たれたことと、兼康が木曾に対しての謀叛と、源氏の大將行家の合戦のこと。	七七句「水島合戦」 七八句「瀬尾最後」	×

卷三第一章 木曾都において狼藉をなすを法皇からして誠めさせられたれば、法皇のごさる法住寺殿まで押し寄せて、合戦をし、御所を焼いたこと。	七九句「法住寺合戦」 八〇句「義経熱田の陣」	×
卷四第一章 頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経を上いてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味をせうと使ひをたてたれども、平家同心せられなんだこと。	八〇句「義経熱田の陣」	×
卷四第二章 範頼、義経木曾が討手に上らること…同じく梶原には磨墨、佐々木には生食といふ馬をくだされたこと…ならびにかれら宇治川の先陣を争うたこと。	八一句「宇治川」	×
卷四第三章 義経兵どもに敵をば防がせて、その身は院の御所へ参つて、御所を守護せられたこと。	八二句「義経院参」	×
卷四第四章 木曾兼平にゆきやうて、三百余騎になつて、また合戦をし、つひに木曾も、兼平も討死せられたこと。	八三句「兼平」	×
卷四第五章 樋口の次郎、降参してのちに切らるること…同じく茅野が討死のこと。	八三句「兼平」	×
卷四第六章 源平大手、搦手の大将を分けられて、義経は三草の合戦にうち勝つて、また鴨越へかかられたこと。	八四句「六箇度のいくさ」 八五句「三草山」	×
卷四第七章 熊谷と、平山と一の谷へ押し寄せ、軍して一二のかけを争うたこと。	八六句「熊谷・平山一二の駆」	×
卷四第八章 大手生田の森の合戦のこと…同じく鴨越を落され、越中の前司が討死のこと。	八七句「梶原二度の駆」 八八句「鴨越」	×

卷四第九章	平家の一門の人々多う討たれたその中に、敦盛熊谷にあうて討死のこと。	八九句「一の谷」	×
卷四第一〇章(a)	通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこと。	九〇句「小宰相身投ぐる事」	×
卷四第一〇章(b)	都で平家の一門の首を渡いたことと、三位の中将夫婦の沙汰。	九一句「平家の一門首渡さるる事」	×
卷四第十一章	重衡都を渡されてのち、三種の神器を屋島へ所望せられたこと…同じくその北の方のこと。	九二句「屋島院宣」 九三句「重衡受戒」	×
卷四第十二章	重衡の東下りのこと、同じく千手の前が沙汰。	九四句「重衡東下り」	×
卷四第十三章	小松の三位の中将屋島を出て高野へ上らること…同じく滝口、横笛がこと。	九五句「横笛」 九六句「高野の巻」	×
卷四第十四章	三位の中将の受戒、重景石童丸がこと、同じく三位の中将身を投げられたこと。	九七句「維盛出家」 九八句「維盛入水」	×
卷四第十五章	池の大納言関東へ下られたこと…また三位の中将の北の方のこと。	九九句「池の大納言関東下り」 一〇〇句「藤戸」	×
卷四第十六章	義経と梶原逆櫓の論…同じく屋島へ渡って内裏を焼きはらひ、軍せらるるに、嗣信義経の身代りに立って死んだこと。	一〇一句「屋島」	×
卷四第十七章	那須の与一が扇を射たこと…また義経弓を取り返されたこと。	一〇二句「扇の的」	×

卷四第一八章 義盛教能をたばかって生け捕ったこと、義経と梶原と戦いに及ぶること…同じく平家の一門ことごとく滅びられたこと。	一〇三句「讒言梶原」 一〇四句「壇の浦」 一〇五句「早輅」	
卷四第一九章 平家の生け捕り都へ入って渡さること…同じく建礼門院のこと。	一〇六句「平家一門大路渡し」	×
卷四第二〇章 大臣殿お子副将に對面あること…同じく副将を害すること。	一〇九句「鏡の沙汰」 一一〇句「副将」 一一一句「大臣殿最後」 一二二句「重衡の最後」	一〇七句「劍の卷上」 一〇八句「劍の卷下」
卷四第二一章 大臣殿の東下り、同じく帰洛の道で首をはねられ、京中を渡されたこと。	一二三句「大地震」	×
卷四第二二章 地震のこと、また建礼門院吉田の御坊に住みわびさせられたこと。	一一四句「腰越」 一一五句「時忠能登下り」	×
卷四第二三章 平大納言の配所におもむかること…ならびに建礼門院の大原へ御隠居のこと。	一一六句「堀川夜討」	×
卷四第二四章 昌尊が夜討ちのこと、また頼朝と、範頼不快のこと。	一一七句「義経都落ち」	×
卷四第二五章 義経の都を落ちられたこと…ならびに北条の上洛のこと。	一一八句「六代」	×
卷四第二六章 六代を北条召し捕ってのち、文覚わびことによつて頼朝赦免せられたこと。	一一九句「大原御幸」	×
卷四第二七章 法皇大原に御幸なされ、女院に御見参あつたこと。	一二〇句「断絶平家」	×
卷四第二八章 六代高野へ上らるることと、平家断絶、また文覚も流され、つひには六代も首をはねられたこと。		×

【表3】〈抜書〉全章段および『太平記』章段の抄出状況

※〈抜書〉と比較する『太平記』には、慶長八年古活字版本（日本古典文学大系『太平記』一、三、昭和三五年、岩波書店）を用いた。

〈抜書〉の巻数と章段名		慶長八年古活字版本『太平記』の巻数と章段名
卷一序		卷一序
卷一第一章	「後醍醐天皇御治世事付武家繁昌事」	卷一「後醍醐天皇御治世事付武家繁昌事」
卷一第二章	「閑所停止事」	卷一「閑所停止事」
卷一第三章	「立后事付三位殿御局事」	卷一「立后事付三位殿御局事」
卷一第四章	「儲王御事」	卷一「儲王御事」
卷一第五章	「中宮御産御祈事付俊基偽籠居事」	卷一「中宮御産御祈之事付俊基偽籠居事」
卷一第六章	「無礼講事付玄恵文談事」	卷一「無礼講事付玄恵文談事」
卷一第七章	「頼員廻忠事」	卷一「頼員回忠事」
卷一第八章	「資朝俊基閑東下向事付御告文事」	卷一「資朝俊基閑東下向事付御告文事」
卷一第九章	「南都北嶺行幸事」	卷二「南都北嶺行幸事」
卷一第一〇章	「僧徒六波羅召捕事付為明詠歌事」	卷二「僧徒六波羅召捕事付為明詠歌事」
卷一第一一章	「三人僧徒閑東下向事」	卷二「三人僧徒閑東下向事」
卷一第一二章	「俊基朝臣再閑東下向事」	卷二「俊基朝臣再閑東下向事」
卷一第一三章	「長崎新左衛門尉意見事付阿新殿事」	卷二「長崎新左衛門尉意見事付阿新殿事」
卷一第一四章	「俊基被誅事并助光事」	卷二「俊基被誅事并助光事」
卷一第一五章	「天下怪異事」	卷二「天下怪異事」
卷一第一六章	「師賢登山事付唐崎浜合戦事」	卷二「師賢登山事付唐崎浜合戦事」
卷一第一七章	「持明院殿六波羅御幸事」	卷二「持明院殿御幸六波羅事」
卷一第一八章	「主上臨幸依非実事山門変儀事」	卷二「主上臨幸依非実事山門変儀事付紀信事」
卷一第一九章	「主上御夢事付楠事」	卷三「主上御夢事付楠事」
卷一第二〇章	「笠置軍事付陶山小見山夜討事」	卷三「笠置軍事付陶山小見山夜討事」
卷一第二一章	「主上笠置御没落事」	卷三「主上御没落笠置事」
卷一第二二章	「赤坂城軍事」	卷三「赤坂城軍事」
×		卷三「桜山自害事」
卷二第一章	「笠置囚人死罪流刑事付藤房卿事」	卷四「笠置囚人死罪流刑事付藤房卿事」
卷二第二章	「八歳宮御歌事」	卷四「八歳宮御歌事」
卷二第三章	「一宮并二品親王御事」	卷四「一宮并妙法院二品親王御事」

卷二第四章	「俊明極参内事」	卷四	「俊明極参内事」
卷二第五章	「中宮御歎事」	卷四	「中宮御歎事」
卷二第六章	「先帝遷幸事」	卷四	「先帝遷幸事」
卷二第七章	「持明院殿御即位事」	卷四	「備後三郎高德事付吳越軍事」
卷二第八章	「宣房卿二君奉公事」	卷五	「持明院殿御即位事」
卷二第九章	「中堂新常燈消事」	卷五	「宣房卿二君奉公事」
卷二第一〇章(a)	「相摸入道弄田樂并闕犬事」	卷五	「中堂新常灯消事」
卷二第一〇章(b)	「時政参籠ゑしま事」	卷五	「相摸入道弄田樂并闕犬事」
卷二第十一章	「大塔宮熊野落事」	卷五	「時政参籠榎嶋事」
卷二第十二章	「民部卿三位局御夢想事」	卷五	「大塔宮熊野落事」
卷二第十三章	「赤松入道円心賜大塔宮令旨事」	卷六	「民部卿三位局御夢想事」
卷二第十四章	「赤坂城合戰事付人見本間拔懸事」	卷六	「楠出張天王寺事付隅田高橋并宇都宮事」
卷二第十五章	「吉野城軍事」	卷六	「正成天王寺未來記披見事」
卷二第十六章	「千劍破城軍事」	卷七	「赤松入道円心賜大塔宮令旨事」
卷二第十七章	「新田義貞賜綸旨事」	卷七	「關東大勢上洛事」
卷二第十八章	「先帝船上臨幸路次之事」	卷七	「赤坂合戰事付人見本間拔懸事」
卷二第十九章	「三月十二日合戰事」	卷七	「吉野城軍事」
卷二第二〇章	「禁裡仙洞御修法事付山崎合戰事」	卷七	「千劍破城軍事」
卷二第二十一章	「谷堂炎上事」	卷八	「新田義貞賜綸旨事」
卷二第二十二章	「四月三日合戰事付妻鹿孫三郎勇力事」	卷八	「赤松蜂起事」
卷二第二十三章	「主上自令修金輪法給事付千種殿京合戰事」	卷八	「河野謀叛事」
卷二第二十四章	「山徒寄京都事」	卷八	「先帝船上臨幸事」
卷二第二十五章	「禁裡仙洞御修法事付山崎合戰事」	卷八	「船上合戰事」
卷二第二十六章	「持明院殿行幸六波羅事」	卷八	「摩耶合戰事付酒部瀬河合戰事」
卷二第二十七章	「三月十二日合戰事」	卷八	「三月十二日合戰事」
卷二第二十八章	「禁裡仙洞御修法事付山崎合戰事」	卷八	「持明院殿行幸六波羅事」
卷二第二十九章	「山徒寄京都事」	卷八	「禁裡仙洞御修法事付山崎合戰事」
卷二第三十章	「四月三日合戰事付妻鹿孫三郎勇力事」	卷八	「山徒寄京都事」
卷二第三十一章	「主上自令修金輪法給事付千種殿京合戰事」	卷八	「主上自令修金輪法給事付千種殿京合戰事」
卷二第三十二章	「谷堂炎上事」	卷八	「谷堂炎上事」

		×	卷九	「足利殿御上洛事」
		×	卷九	「山崎攻事付久我暇合戰事」
	×		卷九	「足利殿打越大江山事」
卷二第二章	「足利殿着御篠村則国人馳参事」		卷九	「足利殿着御篠村則国人馳参事」
	×		卷九	「高氏被籠願書於篠村八幡宮事」
	×		卷九	「六波羅攻事」
卷二第三章	「主上上皇御沈落事」		卷九	「主上・々皇御沈落事」
	×		卷九	「越後守仲時已下自害事」
卷二第四章	「主上々皇為五宮被囚給ふ事付資名卿御出家事」		卷九	「主上・々皇為五宮被囚給事付資名卿出家事」
	×		卷九	「千葉屋城寄手敗北事」
	×		卷一〇	「千寿王殿被落大藏谷事」
	×		卷一〇	「新田義貞謀叛事付天狗催越後勢事」
	×		卷一〇	「三浦大多和合戰意見事」
	×		卷一〇	「鎌倉合戰事」
	×		卷一〇	「赤橋相摸守自害事付本間自害事」
	×		卷一〇	「稻村崎成干潟事」
	×		卷一〇	「鎌倉兵火事付長崎父子武勇事」
	×		卷一〇	「大仏貞直并金沢貞將討死事」
	×		卷一〇	「信忍自害事」
	×		卷一〇	「塩田父子自害事」
	×		卷一〇	「塩飽入道自害事」
卷二第五章	「安東入道自害事付漢王陵事」		卷一〇	「安東入道自害事付漢王陵事」
卷二第六章	「龜寿殿令落信濃事付左近大夫偽落奥州事」		卷一〇	「龜寿殿令落信濃事付左近大夫偽落奥州事」
卷二第七章	「長崎高重最期合戰事」		卷一〇	「長崎高重最期合戰事」
	×		卷一〇	「高時并一門以下於東勝寺自害事」
卷三第一章	「五大院右衛門宗繁賺相模太郎事」		卷一一	「五大院右衛門宗繁賺相模太郎事」
卷三第二章	「諸將被進早馬於船上事」		卷一一	「諸將被進早馬於船上事」
卷三第三章	「書写山行幸事付新田注進事」		卷一一	「書写山行幸事付新田注進事」
卷三第四章	「正成参兵庫事付還幸事」		卷一一	「正成参兵庫事付還幸事」
卷三第五章	「筑紫合戰事」		卷一一	「筑紫合戰事」
卷三第六章	「長門探題降参事」		卷一一	「長門探題降参事」

卷三第七章	「越前牛原地頭自害事」	卷一一	「越前牛原地頭自害事」
卷三第八章	「越中守護自害事」	卷一一	「越中守護自害事付怨靈事」
卷三第九章	「金剛山寄手等被誅事付佐介貞俊事」	卷一一	「金剛山寄手等被誅事付佐介貞俊事」
卷三第一〇章	「公家一統政道事」	卷一二	「公家一統政道事」
卷三第十一章	「聖廟御事」	卷一二	「大内裏造營事付聖廟御事」
卷三第十二章	「千種殿并文觀僧正奢侈事」	卷一二	「安鎮国家法事付諸大將恩賞事」
		卷一二	「千種殿并文觀僧正奢侈事付解脱上人事」
		卷一二	「廣有射怪鳥事」
		卷一二	「神泉苑事」
卷三第十三章	「龍馬進奏事」	卷一二	「兵部卿親王流刑事付驪姫事」
卷三第十四章	「藤房卿通世事」	卷一三	「龍馬進奏事」
		卷一三	「藤房卿通世事」
		卷一三	「北山殿謀叛事」
卷三第十五章	「干将莫耶事」	卷一三	「中前代蜂起事」
		卷一三	「兵部卿宮薨御事付干将莫耶事」
		卷一三	「足利殿東国下向事付時行滅亡事」
		卷一四	「新田足利確執奏狀事」
		卷一四	「節度使下向事」
		卷一四	「矢矧・鷺坂・手超河原鬪事」
		卷一四	「箱根竹下合戰事」
		卷一四	「官軍引退箱根事」
		卷一四	「諸国朝敵蜂起事」
卷三第十六章	「主上都落事付勅使河原自害事」	卷一四	「將軍御進発大渡・山崎等合戰事」
卷三第十七章	「内裏炎上事」	卷一四	「主上都落事付勅使河原自害事」
		卷一四	「長年帰洛事付内裏炎上事」
		卷一四	「將軍入洛事付親光討死事」
		卷一四	「坂本御皇居并御願書事」
卷三第十八章	「園城寺戒壇事」	卷一五	「園城寺戒壇事」
		卷一五	「奥州勢着坂本事」
卷三第十九章	「三井寺撞鐘事付俵藤太事」	卷一五	「三井寺合戰并当寺撞鐘事付俵藤太事」
		卷一五	「建武二年正月十六日合戰事」

卷三第二十六章	「自山門還幸事」	卷一七「自山門還幸事」
卷三第二十七章	「立儲君被著于義貞事」	卷一七「立儲君被著于義貞事付鬼切被進日吉事」
卷三第二十八章	「還幸供奉人々被禁殺事」	卷一七「義貞北国落事」
	×	卷一七「還幸供奉人々被禁殺事」
	×	卷一七「北国下向勢凍死事」
	×	卷一七「瓜生判官心替事付義鑑房藏義治事」
	×	卷一七「十六騎勢入金崎事」
卷三第二十九章	「金崎船遊事付白魚入船事」	卷一七「金崎船遊事付白魚入船事」
	×	卷一七「金崎城攻事付野中八郎事」
卷三第三〇章	「先帝潜幸芳野事」	卷一八「先帝潜幸芳野事」
	×	卷一八「高野与根来不和事」
	×	卷一八「瓜生挙旗事」
	×	卷一八「越前府軍并金崎後攻事」
	×	卷一八「瓜生判官老母事付程嬰杵臼事」
	×	卷一八「金崎城落事」
卷三第三十一章	「一宮御息所事」	卷一八「春宮還御事付一宮御息所事」
	×	卷一八「比叡山開闢事」
卷四第一章	「光嚴院殿重祚御事」	卷一九「光嚴院殿重祚御事」
卷四第二章	「本朝將軍補任兄弟無其例事」	卷一九「本朝將軍補任兄弟無其例事」
	×	卷一九「新田義貞落越前府城事」
卷四第三章	「金崎東宮并將軍宮御隱事」	卷一九「金崎東宮并將軍宮御隱事」
	×	卷一九「諸国宮方蜂起事」
卷四第四章	「相模次郎時行勅免事」	卷一九「相模次郎時行勅免事」
	×	卷一九「奥州国司顯家卿并新田德寿丸上洛事」
	×	卷一九「追奥勢跡道々合戰事」
卷四第五章	「青野原軍事付囊沙背水事」	卷一九「青野原軍事付囊沙背水事」
	×	卷二〇「黒丸城初度軍事付足羽度々軍事」
	×	卷二〇「越後勢越々前事」
	×	卷二〇「宸筆勅書被下於義貞事」
	×	卷二〇「義貞牒山門同返牒事」
	×	卷二〇「八幡炎上事」

卷四第六章	「義貞夢想事付諸葛孔明事」	×	卷二〇「義貞重黒丸合戦事付平泉寺調伏法事」
卷四第七章	「義貞自害事」	×	卷二〇「義貞馬属強事」
	×	卷二〇「義貞自害事」	
卷四第八章	「奥州下向勢逢難風事」	×	卷二〇「義貞首懸獄門事付勾当内侍事」
	×	卷二〇「奥州下向勢逢難風事」	
卷四第九章	「天下時勢糺事」	×	卷二〇「結城入道墮地獄事」
	×	卷二一「天下時勢糺事」	
卷四第一〇章	「先帝崩御事」	×	卷二一「法勝寺塔炎上事」
	×	卷二一「先帝崩御事」	
卷四第十一章	「塩冶判官讒死之内菖蒲前之事」	×	卷二一「任遣勅被成綸旨事付義助攻落黒丸城事」
	×	卷二一「塩冶判官讒死事」	
卷四第十二章	「畑六郎左衛門事」		卷二二「畑六郎左衛門事」
卷四第十三章	「義助被参芳野事并隆資卿物語事」		卷二二「義助被参芳野事并隆資卿物語事」
	×	卷二二「佐々木信胤成官方事」	
卷四第十四章	「義助予州下向事」		卷二二「義助予州下向事」
	×	卷二二「義助朝臣病死事付頼軍事」	
	×	卷二二「大館左馬助討死事付篠塚勇力事」	
卷四第十五章	「大森彦七事」		卷二三「大森彦七事」
	×	卷二三「就直義病悩上皇御願書事」	
卷四第十六章	「土岐頼遠参合御幸致狼藉事付雲客下車事」		卷二三「土岐頼遠参合御幸致狼藉事付雲客下車事」
	×	卷二四「朝儀年中行事事」	
	×	卷二四「天龍寺建立事」	
	×	卷二四「依山門嗽訴公卿僉議事」	
	×	卷二四「天龍寺供養事付大仏供養事」	
	×	卷二四「三宅荻野謀叛事付壬生地蔵事」	
卷四第十七章	「官方怨靈会六本杉事付医師評定事」		卷二五「持明院殿御即位事付仙洞妖怪事」
	×	卷二五「官方怨靈会六本杉事付医師評定事」	

卷四第一章「黄梁夢事」	×	卷二五「藤井寺合戰事」
卷四第十九章「正行参吉野事」	×	卷二五「自伊勢進宝劍事付黄梁夢事」
卷四第二〇章「吉野炎上事」	×	卷二五「住吉合戰事」
	×	卷二六「正行参吉野事」
	×	卷二六「四条繩手合戰事付上山討死事」
	×	卷二六「楠正行最期事」
	×	卷二六「芳野炎上事」
	×	卷二六「賀名生皇居事」
卷四第二十一章「上杉畠山讒高家事付廉頗藺相如事」	×	卷二六「執事兄弟奢侈事」
	×	卷二六「上杉畠山讒高家事付廉頗藺相如事」
卷四第二十二章「天下妖怪事付清水寺炎上事」	×	卷二六「妙吉侍者事付秦始皇帝事」
卷四第二十三章「田樂事付長講見物事」	×	卷二七「直冬西国下向事」
卷四第二十四章「雲景未来記之事」	×	卷二七「天下妖怪事付清水寺炎上事」
	×	卷二七「田樂事付長講見物事」
	×	卷二七「雲景未来記事」
	×	卷二七「左兵衛督欲誅師直事」
卷四第二十五章「左兵衛佐直冬鎮西没落事」	×	卷二七「御所困事」
卷四第二十六章「左馬頭義詮上洛事」	×	卷二七「右兵衛佐直冬鎮西没落事」
卷四第二十七章「直義朝臣隱遁事付玄恵法印末期事」	×	卷二七「左馬頭義詮上洛事」
卷四第二十八章「上杉畠山流罪事」	×	卷二七「直義朝臣隱遁事付玄恵法印末期事」
	×	卷二七「上杉畠山流罪死刑事」
	×	卷二七「大嘗会事」
	×	卷二八「義詮朝臣御政務事」
	×	卷二八「太宰少貳奉智直冬事」
	×	卷二八「三角入道謀叛事」
	×	卷二八「直冬朝臣蜂起事付將軍御進發事」
	×	卷二八「錦小路殿落南方事」
	×	卷二八「自持明院殿被成院宣事」
卷五第一章「恵源禅巷南方御合体事」	×	卷二八「恵源禅巷南方合体事付漢楚合戰事」
	×	卷二九「宮方京攻事」
	×	卷二九「將軍上洛事付阿保秋山河原軍事」

卷六第二章	「新將軍京落之事」	×	卷三七「清氏正儀寄京事」
卷六第三章	「持明院新帝自江州還幸事」	×	卷三七「南方官軍落都事」
卷六第四章	「可立大將事付漢楚立義帝事」	×	卷三七「持明院新帝自江州還幸事付相州渡四国事」
卷六第五章	「志賀寺上人事」	×	卷三七「尾張左衛門佐遁世事」
卷六第六章	「彗星客星事付湖水乾事」	×	卷三七「身子声聞、一角仙人、志賀寺上人事」
卷六第七章	「李將軍陣中禁女事」	×	卷三八「彗星客星事付湖水乾事」
		×	卷三八「諸国官方蜂起事付越中軍事」
		×	卷三八「九州探題下向事付李將軍陣中禁女事」
		×	卷三八「菊池大友軍事」
		×	卷三八「畠山兄弟修禪寺城楯籠事付遊佐入道事」
		×	卷三八「細川相摸守討死事付西長尾軍事」
卷六第八章	「太元軍事」	×	卷三八「和田楠与箕浦次郎左衛門軍事」
卷六第九章	「大内介降參事」	×	卷三八「太元軍事」
		×	卷三九「大内介降參事」
		×	卷三九「山名京兆被參御方事」
		×	卷三九「仁木京兆降參事」
		×	卷三九「芳賀兵衛入道軍事」
卷六第一〇章	「諸大名讒道朝事付道誉大原野花会事」	×	卷三九「神木入洛事付洛中変異事」
		×	卷三九「諸大名讒道朝事付道誉大原野花会事」
		×	卷三九「神木御帰座事」
		×	卷三九「高麗人来朝事」
		×	卷三九「自太元攻日本事」
卷六第十一章	「光嚴院禪定法皇行脚事」	×	卷三九「神功皇后攻新羅給事」
卷六第十二章	「法皇御葬礼事」	×	卷三九「光嚴院禪定法皇行脚事」
卷六第十三章	「中殿御会事」	×	卷三九「法皇御葬礼事」
卷六第十四章	「左馬頭基氏逝去事」	×	卷四〇「中殿御会事」
卷六第十五章	「南禅寺与三井寺確執事」	×	卷四〇「左馬頭基氏逝去事」
		×	卷四〇「南禅寺与三井寺確執事」

卷六第一十六章「最勝講之時及鬭諍事」	×	卷四〇「最勝講之時及鬭諍事」
卷六第十七章「將軍薨逝事」		卷四〇「將軍薨逝事」
		卷四〇「細河右馬頭自西国上洛事」

【表4】喜一検校と右馬之允の対話・問答一覧

問 答 数	〈天草本〉本文		問いの話題	問いかけの型
1	卷一第一章 平家の先祖の系図、また忠盛の上のほまれと、清盛の威勢栄華のこと。 VM. 検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してお語りあれ。 QI. やすいことでござる…おほかた語りまらせうず。まづ平家物語の書き初めにはおごりをきはめ、人をも人と思はぬやうなる者はやがて滅びたといふ証跡に…忠度その様体を知らせたう思はれたれども、言ふならば、殿上までも切りのぼりそうな者の面魂であつたによつて、別のこともないぞと答へられてござつた。		※『平家物語』の由来 Ⅱ 〈天草本〉の開始	① 特定の話を要求 (a) 物語の枠組み Ⅱ 平家物語の開始
2	VM. さてさてそれはいたづらなことを公家たちはせられたの？ QI. そのことでござる。あの公家たちがこのやうなことをせらるることは、今に始めぬことでござる…播磨よねはとくさか、むくの葉か人の綺羅を磨くはと言うて、はやされてござつた。		(1) 特定の人物（公家達）	② 前の話の感想
3	VM. そのやうに悪口狼藉をせられたれども、みな人がこらへてゐたのよ？ QI. そのことでござる…上古にはかやうのことがござつたれども、事がいできなんだが、末代にはなんとあらうぞと言うて、みな人も忠盛の面目を失はれたときは、気づかひをいたされたと、きこえてござる。		(1) 特定の人物（みな人）	③ 疑問や質問で次の話を導く

9	8	7	6	5	4
VM. して清盛の嫡子をばなんというたぞ。	QI. それならば語りませう。清盛家督を受けとられてより、右に申したごとく、威勢、位も肩をならぶる人もござなかった。…人のあがめ敬ふことは言語に及ばぬ儀でござった。 VM. いいや、このやうなことをば身どもらは七日七夜聞いてもあかぬぞよ。	QI. こなたさへくたびれさせられずは、私はなんぼうなりとも語りませう。 VM. なう喜一ついでにその清盛のことをも聞きたいよ。	QI. 年五十八で死なれてござる清盛は嫡男でござったによつて、そのあとをついでしだいしに官位にもあがり、つひには天下をも一人してほしいままにせらるるほどの威勢でござった。 VM. それはいかほどの齢を保たれてあつたぞ？	QI. してこればかりとおぼしめすか？ 忠盛といふ人は文武二道の人でござった。……有明の月もあかしの浦風に、波ばかりこそよるとみえしか。と、申しあげらるれば、帝王御感なされてござった。 VM. さてさて忠盛といふ人はおぞい人であつたの？	QI. なかなか、なほ先を語りませう。……忠盛が科ではないぞとおほせられ、もつてのほか御感なされたれば、罪科などの沙汰はゆめにもござなかった。 VM. してそれはなんと果ててあつたぞ？
(1) 特定の人物(清盛の嫡子)	※問いかけなし	(1) 特定の人物(清盛)	(1) 特定の人物(それ〓忠盛)	(1) 特定の人物(忠盛)	※殿上闊討事件の結末
③ 疑問や質問で次の話を導く	④ 『平家物語』と関係しない会話	① 特定の話を要求 (a) 物語の枠組み〓平家の隆盛	③ 疑問や質問で次の話を導く	② 前の話の感想	③ 疑問や質問で次の話を導く

	12	11	10	
	QI. なかなか教訓を召されてござる。……夜の間にかはる体楽しみつきて、悲しみ来たと、ある人の書きおかれたも、今日の前に知らるる体でござる。 VM. して重盛はこのことについて清盛へ異見をば召されんだか？ 卷一第四章 重盛父の清盛に成親卿を害せられぬやうに、教訓をせられたこと。	QI. そのことござる…平家の悪行はこればかりでもござない、そのうへ無理な位争ひをして、あまたの人々をこえて次男宗盛右大将といふ官にあがられた。……さりとも重盛は思ひはなされまじいものと、言はれたれども…たれして言はうともわくかたがなうておちやつてござる。 VM. さて平家の悪行はかからぬことぢやの？ 卷一第三章 成親卿位争ひゆゑに、平家に対し謀叛を企てられたことが現れ、その身をはじめ、くみしたほどの者搦め捕られ、そのうちに西光といふ者は首をうたれたこと。	QI. かしこまつてござる……帝王もこれをきこしめされ、公家たちも伝へ聞いて、この重盛をば別して感ぜられてござった。 VM. とてもことに平家に対しておこされた謀叛の起りをまちつとお語りあれ。 卷一第二章 重盛の次男関白殿へ狼藉をなされたこと…これ平家に対しての謀叛の根源となったこと。	QI. 重盛と申した、また次男は宗盛、三男をば知盛と申した…この人々の威勢いづれをいづれとも申さうずるやうもござなかつた。
	(1) 特定の人物（重盛）	(2) 平家一門	(2) 平家一門 (3) 平家に対する謀叛	
	③ 疑問や質問で次の話を導く	② 前の話の感想	① 特定の話を要求 (a) 物語の枠組み⇨平家の衰滅	

16	15	14	13
VM. とてもものに成親卿の果てられた様体と、少将の鬼界が島へまた流されたことをもお語りあれ。 卷一第八章 成親の最後のこと…その北の方都にて尼になりかの後世をとむらはれたこと。ならばに少将かさねて鬼界が島へ流され、そこで康頼や、俊寛やなどと憂き目をしのがれたこと。	QI. そのおことぢや…同じ年の六月二日に成親卿をば公卿の座へいだし奉つてものをまゐらせたれども……成親卿のござる所をわれに知らせまいとてこそ申すらうとて、そののちは恋しけれども、問ひもせられなんだと申す。 VM. 成親卿の果てをお語りあれ。 卷一第七章 成親卿と、その子少将流罪に行はれたこと。	QI. さらば夜がふけまらせうずれども、語りまらせう。清盛はこのやうに人々をあまたいましめおいても、なほ心ゆかずや思はれつらう…すでに赤地の錦の直垂に、黒糸威の腹巻の白金物打つたをき……昔にも末代にもこのやうな人はまれなことでござる。 VM. 喜一まちつとおつづけあれ。 卷一第六章 重盛父清盛の法皇へ対し奉つての憤りの深いことを諫められ、その謀として、勢を集められたこと。	QI. 少将はその夜しも院の御所に上臥してまだ出られなんだに、成親卿の侍どもいそいで御所へ馳せ参つて……けさのごとくに同車して帰られたれば、宿所には女房たち死んだ人の生きかへつた心地して、みなさしつどうて喜び泣きども、せられてござった。 VM. してその子息少将は何となられてあつたぞ？ 卷一第五章 成親卿の子息少将についてのこと。
(1) 特定の人物(成親・少将)	(1) 特定の人物(成親)	※話題なし	(1) 特定の人物(少将)
① 特定の話を要求 (b) 登場人物の最後や後日譚 (c) 有名な事件に関するもの Ⅱ「康頼祝言」 ※ただし冒頭と末尾)	① 特定の話を要求 (b) 登場人物の最後や後日譚)	⑤ 話の続きを催促	③ 疑問や質問で次の話を導く

19	18	17	
QI. そのおことぢや…この人々は鬼界が島を出て、宰相の知行の肥前の国鹿瀬の庄につかれたれば……うとましかった昔を思ひつづけて、宝物集といふ物語を書きたてられたと、きこえてござる。 VM. さてこれはまことにあはれなことであつたなう？ して少将や、康頼はそのまま上られてあつたか？ 卷一第一章 少将、康頼都へ帰らるる道すがらのこと。	QI. 后に立たせられた清盛の娘中宮御懷妊あつて、もつてのほかなやませられたによつて、帝王をはじめ、諸人みな氣づかひをいたいた。……少将は情けの深い人ぢやほどに、よいやうに申しなさるることもあらうずとたのみをかけて、その瀬に身をも投げられなんだ心中は、まことに愚かなこととてござつた。 VM. その鬼界が島の流人どもを清盛の許された様をお語りあれ。 卷一第一〇章 鬼界が島の流人を許さるるについて、あとに残らるる俊寛の悲しみ深いこと。	QI. かしこまつた。少将と、康頼はもとより熊野信心の人であつたによつて……胡国鬼界が島の境をへだて世々は変はれども、風情は同じ風情であつた。まことにふぎなはかりこととてござる。 VM. その島であつたことどもをもお語りあれ。 卷一第九章 康頼と、少将とかの島で熊野詣のまねをし、また卒塔婆をつくつて流されたことを蘇武が雁書にひきあはせて語ること。	QI. 心得まらした。さうござつて俊寛僧都と、康頼と、この少将相具して三人薩摩の鬼界が島へ流されてござつた。……つひにかくそむきはてける世の中を、とく捨てざりしことぞ悔しき。と、詠うでござる。
(1) 特定の人物(少将・康頼)	(1) 特定の人物 (鬼界が島の流人・清盛)	(4) 『平家物語』の章段名 または特定の事件名 (康頼祝言、卒都婆流)	
② 前の話の感想 ③ 疑問や質問で次の話を導く	① 特定の話を要求 (c) 有名な事件に関するもの 「足摺」	① 特定の話を要求 (c) 有名な事件に関するもの 「康頼祝言」「卒都婆流」	

22	21	20
卷二第二章 高倉の宮の御謀叛あらはれて、三井寺へ落ちさせられたこと。また長兵衛といふ宮の侍あとに残って合戦をし、生け捕られたこと。 VM. 高倉の宮の御謀叛の様体をも聞きたい、お語りあれ。 QI. まづはさて退屈も召されぬお人ぢや。さらば語りまらせう…高倉の宮の御謀叛の由を披露つかまつたれば…：あくれば十六日高倉の宮は御謀叛をおこさせられて、失せさせられたといふほどこそあれ、都のうちは騒動することはおびたしかった。	卷二第一章 妓王清盛に愛せられたこと…同じく仏といふ白拍子に思ひかへられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと。 VM. さてまことにたれにも、かれにも清盛は難儀をかけた人ぢやの？ またその妓王がことをも聞きたい、お語りあれ。 QI. 長いことなれども、申さうず。清盛はこのやうに天下を掌に握られたによつて、世間のそしりをもはばかりず…：四人一所に籠つて、朝夕仏の前に花、香をそなへて、余念もなう後生を願うてつひに無事に終つたと、申す。	卷二第二章 有王鬼界が島に渡つて、俊寛にあひ…俊寛死去せられるば茶毘をして、その遺骨を首にかけ、都へかへり上り、方々修行して、その後世をとむらうたこと。 VM. して俊寛はなんと果てられたぞ？ QI. そのおことぢや…鬼界が島へ三人流された流人、二人は召しかへされて、都へ上つたに…俊寛一人うとましい島の島守りになつて果てられた。…：このやうに人の思ひ歎きの積る平家の末はなんとあらうか？ おそろしいことぢや。
(1) 特定の人物（高倉の宮） (3) 平家に対する謀叛	(1) 特定の人物（清盛・妓王） (4) 『平家物語』の章段名 または特定の事件名 （「祇王」）	(1) 特定の人物（俊寛）
① 特定の話を要求 (a) 物語の枠組みⅡ平家の衰滅	① 特定の話を要求 (c) 有名な事件に関するもの Ⅱ「祇王」 ② 前の話の感想	③ 疑問や質問で次の話を導く

	25	24	23
	VM. して宮はその分で三井寺にござったか？ QI. そのおことござる。宮は比叡の山と、奈良を以てこそさりと もと思はせられたれ…三井寺ばかりではいかにしてもかなふま いとおぼしめされて…：されども痛手でなかつたれば、あたま をひつつつんで、弓を打ち切つて杖について、南都の方へ落ち ゆいたと、きこえまらした。	VM. して三井寺からは京へ寄することもなかつたか？ また京から 三井寺をも攻めなんだか？ QI. そのおことぢや。三井寺には貝鉦を鳴らいて大衆どもがおこつ て僉議したは…：六波羅には軍兵どもが馳せ集つてゐたによつ て、騒ぐこともなかつた。 卷二第五章 宮三井寺を落ちさせられて宇治橋において矢切りの 但馬や、浄明坊が合戦のこと。	VM. 三位入道の謀叛の由来をお語りあれ。 QI. かしこまった…さても年来日ごろもあればこそあつたに…三位 入道ことし何たる心がついて謀叛をばおこされたぞと言ふに… …今度三井寺に寄せうずるに、余は知らず、かまへてまづ競め をば生け捕りにせい、鋸で首を引かうと言はれてござる。 卷二第四章 三井寺には長僉議をして、夜をあかいて夜討ちをし そこなうて、道からもどつたこと。
	(1) 特定の人物（高倉の宮）	(1) 特定の人物 (三井寺∥源頼政・大衆)	(1) 特定の人物（三位入道） (3) 平家に対する謀叛
	③ 疑問や質問で次の話を導く	③ 疑問や質問で次の話を導く	① 特定の話を要求 (a) 物語の枠組み∥平家の衰滅

28	27	×	26
VM. 頼朝の謀叛をおこさせられた由来をもお語りあれ。 卷二第九章 文覚のすすめによつて頼朝の謀叛をおこさせられたことと、平家はまたこれを平げうとて、討手をくだされたこと。	VM. してその三位入道は総別は何たる人であつたぞ？ QI. この三位の入道と申すは、兵庫の頭といふ人の子でござつたが……さてあらうずる人がよしなことを思ひ企てて、わが身も、子孫も滅びられたことは、まことにあさましい次第でござつた。	飛驒の守といふ平家の兵は功者であつて、さだめて宮をば南都へ先立てまらせうずと推量して……この由を女院へ申されたれば……女院もお手を合はさせられて、喜ばせられ、そのおん母のお心のうちはとびたたせらるるほどに、喜ばせられて、やがて出家になしまゐらせられた、と申す。 卷二第八章 新三位入道の由来と、同じくその鶴を射られた高名のこと。	道、そのほかこの一族討死のこと。 VM. 宇治川を渡いたことと、源三位入道の討死を召されたところをも聞きたい。 QI. それをば明日と存ずれども、さらばただ今申さうず。源三位入道は長絹の直垂に科皮威の鎧をきて、けふを最後と思はれたれば、わざと甲をばきられなんだ。……平家の人々はこれまではお大事かなと呼ばはつて、長刀で敵の方をまねいて、三井寺へ向けて帰つた。 卷二第七章 飛驒の守といふ平家の兵官を追ひかけて討ち奉つたことと、そののち宮のお子をも平家失ひ奉らうとせられたこと。
(1) 特定の人物（頼朝） (3) 平家に対する謀叛	(1) 特定の人物（三位入道）	※問いなし	(1) 特定の人物（源三位入道） (5) 合戦の様子
① 特定の話を要求 (a) 物語の枠組みⅡ平家の衰滅	③ 疑問や質問で次の話を導く	⑥ 問い自体なし	① 特定の話を要求 (c) 有名な事件に関するもの Ⅱ 足利又太郎の馬筏 ※源頼政の敗北と死に関係 (b) 登場人物の最後や後日譚

	31	30	29	
	QI. まづその木曾殿はそのころ信濃の国におちやつてござる。……ただ今都へ攻めのぼらうとするところに、波のたつやら、風の吹くやらも知らないで、このやうにせらるることは、まことに言ふかひないことどもでござる。 VM. その木曾殿は何とやうに謀叛をおこされてあつたぞ？ その由来をもここに続けてお語りあれ。	QI. さてさて果てしもないことをおほせらるる…さらばまた語りませう。 VM. ゆふべの物語があまり本意ないほどに、今はまた木曾殿の成り立ち、その謀叛のやうをもお語りあれ。 卷三第一章 木曾殿の由来と、平家に対して謀叛をおこされ、平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと。	QI. さらば果たしまらせう。先陣はさうさうするうちに富士川のあるあたりにつけば……近江へ発向して、所々方々の城を攻め落いて美濃、尾張へ越されまらしたれども、つひにはかばかしいことはなかつたと、きこえまらしてござる。 VM. なう喜一、その先をもまつとお語りあれ。 卷二第一〇章 平家の兵ども鳥の羽音に驚いて、敗軍して面目を失ひ、京へのぼれば、頼朝は軍に勝つて鎌倉へ帰られたこと。	QI. かしこまった。頼朝は去んぬる平治元年十二月に父義朝の謀叛によつて、十四の年伊豆の国蛭が小島へ流されて……都をば三万余騎で出られたれども、路次の兵どもがついたによつて、七万余りときこえまらした。
	(1) 特定の人物（木曾殿） (3) 平家に対する謀叛	(1) 特定の人物（木曾殿） (3) 平家に対する謀叛	※話題なし	
	① 特定の話を要求 (a) 物語の枠組みⅡ平家の衰滅	① 特定の話を要求 (a) 物語の枠組みⅡ平家の衰滅	⑤ 話の続きを催促	

	34	33	32
卷三第二章 平家木曾を滅ぼさうとて、北国へ下らるれば、そのうちに木曾と、頼朝不和のことがあったれども、つひに和睦せられたこと…また木曾殿が火燧が城におかれた斎明威儀師謀叛をおこし、平家の味方してその城をとらせたこと。 VM. 平家の北国へ下られたことをも続けてお語りあれ。 QI. さても飽く期もない人でこそござれ…さりながら語りまらせう。所々方々の者が平家をそむいて、源氏に心を通ずるによつて……都にはこれを聞いて、喜ばることはかぎりもござなかつた。 卷三第三章 木曾も、平家もたがひに方々へ人数くばりをしたことと、同じく倶利伽羅が谷で合戦して、平家を残り少なにうちなし、また志保坂の合戦にも木曾うち勝ったこと。 VM. して合戦はどこであつたぞ？ QI. そのおことぢや。平家は加賀のくにの篠原といふ所で勢ぞろへをして……平家しばしこそささへたれ…志保坂の手をも追ひ落されて、加賀の国の篠原へ引き退かれまらした。 卷三第四章 篠原の合戦にも平家負けられたこと…ならびに実盛が討死してその鬚を洗はれたこと。 VM. 篠原での合戦には双方いかう死んだなう？ QI. あう なかなか、源平ともにいかう討たれたと、きこえまらした。同じ二十三日の卯の刻に源氏篠原へ押し寄せて……宗盛さばらばと言うて、錦の直垂を許されたときこえまらしたと、申せば、みなこれを感じて涙を流されまらした。 卷三第五章 木曾軍の評定をして比叡の山を語らるれば、すなはち比叡の山も木曾にくみし、平家をそむいたこと…ならびに平家西国の戦には勝利を得られたこと。	(5)合戦の様子 ③ 疑問や質問で次の話を導く	(5)合戦の様子 ③ 疑問や質問で次の話を導く	(2)平家一門 ① 特定の話を要求 (c)有名な事件に関するもの Ⅱ「平家北国下向」

	37	36	35
	QI. なかなか、維盛も日ごろは思ひ設けられたことなれども、さしあたっては悲しう思はれてござった。……この声どもが耳の底にとまって、西海の旅の空までも吹く風の声、たつ波の音につけても、ただ今聞くやうに思はれたと、きこえてござる。 VM. その時もちろん維盛も都を落ちられてあつたか？ 卷三第七章 維盛の落ちらるれば、北の方をはじめ、子たちの維盛を慕はれたこと。	QI. まことに天道からはなされられたと、見えてござる。そのころある夜夜半ばかりに六波羅のあたりが大地を打ち返いたやうに騒いで……その身すでに朝敵となられたうへは、子細には及ばねども、これほどの作者を読人知らずと書かれたことは、まことにその身にとつては口惜しいこととござる。 VM. さても平家はいかう歩が悪かったの？ 卷三第六章 木曾諸方から都へ入ると聞いて、平家は主上をも法皇をもとり奉つて、西国へ落ちうとせらるる時、法皇いづちともなく失せさせられたことと…同じく平家の都落ちと、また忠度の歌の沙汰。	QI. そのおことぢや。平家は北国へ下られた時は、十万余騎ときこえたが、上らるる時は、わづかに三万ばかりになつて……東国、北国の源氏はいかにもしづまらいで、気づかひをせられてござった。 VM. 平家はその分にして京へ上られてあつたか？
	(1) 特定の人物（維盛）	(2) 平家一門	(2) 平家一門
	③ 疑問や質問で次の話を導く	② 前の話の感想	③ 疑問や質問で次の話を導く

40	39	38
卷三第八章 平家の一門は都を落ちらるるそのうちに池の大納言殿は都にとどまられたこと…同じく福原を立たるるとて、一門の人々なごりを惜しまれたこと。 VM. さて平家の一門のうちに都にとどまられたはなかったか？ QI. そのおことぢや…みな六波羅をはじめて面々の館に火をかけて、焼きたてて落ちらるるうちに、池の大納言殿と申す人は…都をば山、川、海にへだてられて、雲居のよそに見ないて、はるばる来たと思はるるにつけても、ただつきせぬものは涙でござった。 卷三第九章 法皇鞍馬の寺から比叡の山へ還御あつたことと、平家の西国へ落ちられてからのこと。 VM. して法皇のお行方はのちにも知れなんだか？ QI. いや、それは知れまらした。七月の二十四日の夜半ばかりに法皇は資時といふ人ばかりをお供で御所を出させられて鞍馬へ入らせられたに…経正の歌には。わけてこし野辺の露とも消えずして、思はぬ里の月を見るかな。と、思ひ思ひに詠うでなぐさうでゐられてござる。 卷三第一〇章 院宣によって豊後の緒方平家に対し謀叛をおこすによつて、平家あつかはるれどもかなはず…つひに太宰の府にもえたまられいで、かちはだして落ちさまよはれたことと、八島の内裏づくりのこと。 VM. してそれはそのやうに自由にして西国には何としてゐられたぞ？ 京からのとがめはなかったか？ QI. そのおことぢや。さうさうせらるるうちに豊後の国に代官の心になつてゐられた頼経モリノサネといふ人のところへ、京からお使ひがたつて…寒い塩風にもまるれば、姿形も漸々に衰へて、命をな	(1) 特定の人物（法皇） ③ 疑問や質問で次の話を導く	(2) 平家一門 ③ 疑問や質問で次の話を導く
(2) 平家一門 (それ〓平家一門) ③ 疑問や質問で次の話を導く		

	43	42	41	
	VM. 木曾が京で狼藉をしたは何たることぞ？ QI. さればそのことでござる。京中には源氏の勢が満ち満ちて、在々所々では入り取りを多うし……まことに木曾が悪行は平家のおごった時のしわざにはるかにましたと世上の取り沙汰でござった。	VM. してその間に平家は何とせられたぞ？ QI. そのおことぢや。平家は讃岐の屋島にゐられたれども、そつと歩をしなければいてあそこ二十四が国ほどきり従へてはびこらるるところで……平家は室山、水島二か所の合戦にうち勝たれてこそ、いよいよ勢はついてあつたと、申す。 卷三第三章 木曾都において狼藉をなすを法皇からして誠めさせられたれば、法皇のごさる法住寺殿まで押し寄せて、合戦をし、御所を焼いたこと。	VM. して木曾は都へ上つて驥などはよかつたか？ また時宜法をも知つた者でおちやつたか？ QI. そのおことぢや…木曾は都を守護してゐたが、顔はにがにがしい男であつたれども……まことに笑はうずることは多かつたれども、恐れてさすがさうとはえ言はなんだ。 卷三第二章 平家室山、水島二か所の合戦にうち勝たれたことと、兼康が木曾に対しての謀叛と、源氏の大將行家の合戦のこと。	がらへられうずるやうもないほどにござった。 卷三第一章 木曾が猫間殿に会うての無様と、車に乗って牛にひきずられたこと。
	(1) 特定の人物（木曾）	(2) 平家一門	(1) 特定の人物（木曾）	
	③ 疑問や質問で次の話を導く	③ 疑問や質問で次の話を導く	③ 疑問や質問で次の話を導く	

46	45	44
卷四第一章 頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経を上げてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味をせうと使ひをたてたれども、平家同心せられなんだこと。 VM. 頼朝は木曾がこのやうな狼藉を聞いてしづめうともせられなんだか？ QI. なかなか頼朝もこの狼藉を聞いてしづめうずるために、弟の範頼と、義経をさしのぼせられたが…平家は西国にゐられ、頼朝は関東にあれば、木曾は京にゐていろいろのことをする…それによって諸国の道がみな乱れて面々の知行なども確かにも来ず、京中の人もただ少水の魚に異ならぬものでござった。 卷四第二章 範頼、義経木曾が討手に上らるること…同じく梶原には磨墨、佐々木には生食といふ馬をくだされたこと…ならびにかれら宇治川の先陣を争うたこと。 QI. かしこまった。寿永三年正月一日のことでごさるに…院の御所は大膳の大夫が宿所西の洞院であつたれば、御所の体もしかるべからんところで、礼儀を行はれうずることではなければ、よろづ政もなう、もの寂しい体でござった。…宇治川の先陣佐々木の四郎、二陣梶原源太と書かれてござった。 卷四第三章 義経兵どもに敵をば防がせて、その身は院の御所へ参つて、御所を守護せられたこと。 VM. なほ末をも続けてお語りあれ。 QI. さういたいて木曾は宇治、瀬田も敗れたと聞けば、最後のいとま申さうずるとて、百騎ばかりで院の御所へ馳せ参る…院の	QI. かしこまった。寿永三年正月一日のことでごさるに…院の御所は大膳の大夫が宿所西の洞院であつたれば、御所の体もしかるべからんところで、礼儀を行はれうずることではなければ、よろづ政もなう、もの寂しい体でござった。…宇治川の先陣佐々木の四郎、二陣梶原源太と書かれてござった。 VM. おくたびれあらうずれども、こよひもなほ先をお語りあれ。 ※話題なし ⑤ 話の続きを催促	QI. なかなか頼朝もこの狼藉を聞いてしづめうずるために、弟の範頼と、義経をさしのぼせられたが…平家は西国にゐられ、頼朝は関東にあれば、木曾は京にゐていろいろのことをする…それによって諸国の道がみな乱れて面々の知行なども確かにも来ず、京中の人もただ少水の魚に異ならぬものでござった。 卷四第二章 範頼、義経木曾が討手に上らるること…同じく梶原には磨墨、佐々木には生食といふ馬をくだされたこと…ならびにかれら宇治川の先陣を争うたこと。 QI. かしこまった。寿永三年正月一日のことでごさるに…院の御所は大膳の大夫が宿所西の洞院であつたれば、御所の体もしかるべからんところで、礼儀を行はれうずることではなければ、よろづ政もなう、もの寂しい体でござった。…宇治川の先陣佐々木の四郎、二陣梶原源太と書かれてござった。 卷四第三章 義経兵どもに敵をば防がせて、その身は院の御所へ参つて、御所を守護せられたこと。 VM. 頼朝は木曾がこのやうな狼藉を聞いてしづめうともせられなんだか？ (1) 特定の人物（頼朝） ③ 疑問や質問で次の話を導く
※話題なし ⑤ 話の続きを催促	※話題なし ⑤ 話の続きを催促	(1) 特定の人物（頼朝） ③ 疑問や質問で次の話を導く

50	49	48	47	
VM. ちつともそなたにただ口はおかせまいぞ…なほ先へお語りあれ。	QI. 平家は正月中旬のころ讃岐の屋島から津の国の難波へ伝うて、ひがしは生田の森を大手の木戸口と定め…西は一の谷を城郭にこしらへられてござった。……義経鎌倉殿と中をお違ひあつて、奥州で討たれさせられた時、義久と申して、討死した者でござる。	QI. それは十郎藏人を討たうずると言うて、河内の長野の城へ越えたが、そこでは討ちもらいて……同じく二十五日に樋口の次郎は六条河原でつひに切られたと、申す。	QI. 木曾はもしものがあらば、院をとり奉って、西国の方へ御幸をなし奉って、平家と一つにならうとて……兼平が討たれて、そののちこそ栗津の軍は止うでござれ。	御所を四面にうち囲うで守護し奉れば、人々も心静かに、君も御安堵のおん心地をさせられた。
卷四第七章 熊谷と、平山と一の谷へ押し寄せ、軍して一二のかけを争うたこと。	VM. 木曾ははや滅びたが、平家は何となられたぞ？	VM. して兼平が兄の樋口の次郎は何となったぞ？	VM. して木曾は何となったぞ？	卷四第四章 木曾兼平にゆきやうて、三百余騎になつて、また合戦をし、つひに木曾も、兼平も討死せられたこと。
※話題なし	(1) 特定の人物（木曾） (2) 平家一門	(1) 特定の人物（樋口の次郎）	(1) 特定の人物（木曾）	
⑤ 話の続きを催促	③ 疑問や質問で次の話を導く	③ 疑問や質問で次の話を導く	③ 疑問や質問で次の話を導く	

53	52	51	
QI. 平家は軍敗るれば、先帝をはじめ奉り人々船にとり乗って、海に浮かび……貞女両夫にまみえずといふことも思ひ知られてあはれに…… VM. その軍が敗れてからはなつとあつたぞ？	QI. 心得まらした…一の谷の軍敗れてのち、通盛、忠度をはじめ、歴々の一門の人々討たれられ、重衡は生け捕られた。……最後の時召された御装束以下一つも残さず、とりそへて状を書いて修理の大夫殿へ奉つたれば、返状も…… 卷四第一〇章(a) 通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこと。 VM. おくたびれあらずは、まつとお語りあれ。	QI. 大手生田の森には範頼その勢五千余騎で卯の刻の矢合せと定められたれば、まだ寄せられなんだ。……平家方にきこゆる越中の前司をば猪俣かうこそ討てと、高らかに名のつて、その日の高名の一の筆につけられたと、申す。 卷四第九章 平家の一門の人々多う討たれたその中に、敦盛熊谷にあうて討死のこと。 VM. して生田の森の方には何とあつたぞ？	QI. さてさていかい平家上戸でござる。義経はまたその山におぢやるうちに、熊谷はその時まで搦手にあつたが……土肥の次郎も七千余騎で押し寄せて、関をどつとつくれれば、熊谷、平山も引き退いて、馬の息を休めたと、きこえまらした。 卷四第八章 大手生田の森の合戦のこと…同じく鶴越を落され、越中の前司が討死のこと。
(5)合戦の様子	※話題なし	(5)合戦の様子	
③ 疑問や質問で次の話を導く	⑤ 話の続きを催促	③ 疑問や質問で次の話を導く	

57	56	55	54
VM. はあ節でもおもしろいが、ところによってきこえかぬる…ただ物語りにめされい。	VM. とてもものに重衡の東下りのことをもお語りあれ。 QI. ここはとつとおもしろいところでござるほどに、本々に節をつけて語りませう。鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝しきりに申されければ、三位の中将重衡をば三月十三日に関東へこそ下されれ…三位の中将のおん返事に。ふるさとも恋しくもなし旅の空、都もつひのすみかならねば。	VM. 重衡は何とおなりあつたぞ？ QI. 重衡は六条を東へ渡されてござった。入道清盛公にも、二位殿にも思ひ子でござつたれば…重衡南都へ渡され、お切られあつたときこえたれば、様を変へ、かたのごとく仏事を営み、後生を弔はれたと申す。 卷四第二二章 重衡の東下りのこと、同じく千手の前が沙汰。	VM. この茶を飲むで息をついで、まちつとお語りあれ。 QI. はあ、これはかたじけない…冥加もないお茶でこそござれ…極と見えまらしてござる。寿永三年二月十二日去んぬる七日に一の谷で討たれた平家の首ども京へ入れば…さあればこれから都へ上つて妻子を見てのち、妄念を離れて自害せうにはしくまじいと定められたと、きこえまらした。 卷四第二一章 重衡都を渡されてのち、三種の神器を屋島へ所望せられたこと…同じくその北の方のこと。
※口語体での語りの要求	(4) 『平家物語』の章段名 または特定の事件名 （「重衡東下」）	(1) 特定の人物（重衡）	※話題なし
④ 『平家物語』と関係しない会話	① 特定の話を要求 (c) 有名な事件に関するもの Ⅱ 「重衡東下」	③ 疑問や質問で次の話を導く	⑤ 話の続きを催促

60	59	58	
VM. その池の大納言は何とおなりあったぞ？	VM. まちつとお語りあれ。 QI. 三位の中将は雪山に鳴く鳥のやうに、けふよあすよものを思ふことよとあつて、涙にむせばせらるる体まことにいとほしいことぢや。……池の大納言のやうに、二心があつて、都の方へお上りあったかと思うたれば、さはなうてこそとおほせられて、涙を流しあはせられたと、申す。 卷四第一章 池の大納言関東へ下られたこと…また三位の中将の北の方のこと。	VM. さても重衡はいとほしいことであつたなう…また小松の三位の中将のことをもお語りあれ。 QI. 小松の三位の中将はわが身は屋島にありながら、心は都に通ひ、故郷に残しおかせられた北の方、幼い人々のことをあけても、暮れても思はれたれば……瓦に松生ひ、垣に苔むいて、星霜久しうおぼえたところでごさる。 卷四第一章 三位の中将の受戒、重景石童丸がこと、同じく三位の中将身を投げられたこと。	QI. ともかうも御意に従へほととぎすと申すことがござる、心得まらした。さうさうして日数が重なれば、やうやう三月も半ば過ぎ……重衡南都へ渡されて切らるると、きこえたれば、様を変へ信濃の、善光寺に行ひすまいて、かの後世菩提を弔うたと、きこえまらした。 卷四第一章 小松の三位の中将屋島を出て高野へ上らるること…同じく滝口、横笛がこと。
(1) 特定の人物(池の大納言)	※話題なし。	(1) 特定の人物 (重衡・小松の三位中将)	
③ 疑問や質問で次の話を導く	⑤ 話の続きを催促	① 特定の話を要求 (b) 登場人物の死や後日譚 ② 前の話の感想	

		61	62	63	
QI. そのころ池の大納言殿に閑東から下らせられいとあつたれば……藤戸といふ所でまた合戦があつて、佐々木の三郎といふ者が手柄をして、そこでも平家はうち負けて、みな屋島へ渡られたと、申す。 巻四第十六章 義経と梶原逆櫓の論…同じく屋島へ渡つて内裏を焼きはらひ、軍せらるるに、嗣信義経の身代りに立つて死んだこと。 VM. 屋島はのちには何となつたぞ？	QI. 元暦二年正月十日に義経院の御所へ参つて、大藏卿をもつて申されたは……この君のおために命を捨てうこと、たれか惜しからうぞと感涙を流し、兵どもみな鎧の袖をしぼつたと申す。 巻四第十七章 那須の与一が扇を射たこと…また義経弓を取り返されたこと。 VM. 先をも略してなりともお語りあれ。	QI. 心得まらした。その日ははや暮れ方になれば、勝負は決すまじい、明日の軍と定めて、源氏引き退かうとするところに……これこそ源氏の大將の弓よ、強いぞ、弱いぞとあざけられうが口惜しければ、命に代へて、とつたぞとおほせらるれば、みなこのことばを感じられたと申す。 巻四第十八章 義盛教能をたばかつて生け捕つたこと、義経と梶原と戦いに及ぶること…同じく平家の一門ことごとく滅びられたこと。 VM. その阿波の民部が子の教能は何となつたぞ？	QI. そのおことぢや…義経義盛を召して、教能は伊豫の国へ越えたが……生け捕りの人々は大蔵殿をはじめ、女房たちには国母建礼門院をはじめ奉つておよそ四十三人と、きこえてござる。	(1) 特定の人物（教能） ③ 疑問や質問で次の話を導く	※話題なし。 ⑤ 話の続きを催促
		(5) 合戦の様子			
		③ 疑問や質問で次の話を導く			

66	65	64	×
卷四第二二章 地震のこと、また建礼門院吉田の御坊に住みわびさせられたこと。 VM. そのころ大地震があったといふが何としたことぞ？ QI. されば同じ七月九日の午の刻ばかりに大地震がおびたしう動くことがやや久しかったれば……つきぬお物思ひに秋のあはれささへうちそへてしのびかねさせられたと申す。	卷四第二二章 大臣殿の東下り、同じく帰洛の道で首をはねられ、京中を渡されたこと。 VM. 大臣殿の最後をも聞きたいの。 QI. 元暦二年五月七日の卯の刻に義経大臣殿の父子を具し奉り、関東へ下られた。……重衡もそののち南都へ引き渡されて、つひに切られてござる。	卷四第二〇章 大臣殿お子副将に対面あること…同じく副将を害すること。 VM. さてさて義経はいかい手柄を召されたの？ QI. そのおことぢや。平家滅びてのち、国々も静まって、人の通ひもわづらひなければ、義経ほどの人こそなけれ…頼朝は何事をもさせられず……介錯の女房さへ身を投げたはありがたいことぢや。	卷四第十九章 平家の生け捕り都へ入って渡さること…同じく建礼門院のこと。 VM. (QI.) 同じ四月三日西国から早馬院の御所へ参る……重衡つゆの命消えやらぬときこえたれば、ま一度見もし、見えばやとたがひに思はれたれども、かなはねば、ただ泣くばかりで明し暮らさせられたと申す。
(4) 『平家物語』の章段名 または特定の事件名 （「大地震」）	(1) 特定の人物（大臣殿）	(1) 特定の人物（義経）	※問いなし
③ 疑問や質問で次の話を導く	① 特定の話を要求 （b）登場人物の最後や後日譚）	② 前の話の感想	⑥ 問い自体なし

70	69	68	67
QI. 都の守護に上せられた北条のもとへ鎌倉殿言ひのぼせらるるは VM. 六代のことをもお語りあれ。 卷四第二十六章 六代を北条召し捕つてのち、文覚わびことによつて頼朝赦免せられたこと。	QI. 義経は院の御所へ参つて、大蔵卿をもつて申されたは…義経こそ鎌倉から討たれうずるでござる…さて行家は和泉の国に忍うでゐられたを北条とやかくやして討ちとつて首をば鎌倉へ下されたと申す。 VM. さてつひには兄弟のお中何となつたぞ？ 卷四第二十五章 義経の都を落ちられたこと…ならびに北条の上洛のこと。	QI. 頼朝土佐昌尊を召して、義経はさだめて謀叛の心もあらうず…身内の菊池は年来の敵でござる、賜はつて首をはねうと申せば、申すまでもなうやがて賜はつたれば、六条河原で切つて、緒方はかひがひしう頼まれたと申す。 VM. 堀河夜討ちはいつの時分であつたぞ？ 卷四第二十四章 昌尊が夜討ちのこと、また頼朝と、範頼不快のこと。	QI. さればそのおことちや…見参はないのみならず、あまつさへ義経を頼朝から討たれうずるときこえてござれば…女院あはれにおぼしめされて、お障子に書きすませられたと申す。 VM. して義経はそれからのち頼朝の見参はなかつたか？ 卷四第二十三章 平大納言の配所におもむかるること…ならびに建礼門院の大原へ御隠居のこと。
(1) 特定の人物（六代） (4) 『平家物語』の章段名 または特定の事件名（「六代」）	(1) 特定の人物（頼朝・義経兄弟）	(4) 『平家物語』の章段名 または特定の事件名（「堀川夜討」）	(1) 特定の人物（義経）
① 特定の話を要求（b）登場人物の最後や後日譚）	③ 疑問や質問で次の話を導く	③ 疑問や質問で次の話を導く	③ 疑問や質問で次の話を導く

73	72	71	
QI. そのおことぢや。私が長いことを語りまらしたよりも、退屈もなう聞かせられたを奇特と存ずる。平家の由来は大略この分でごさるほどに、どこでもこの物語においては、こなたもみごとあどをうたせられうほどに、重宝でござる。 VM. さてさて長々しいことを退屈もなうお語りあつたの。	QI. さればされば聞きも聞かせられ、語りも語りまらしたことぢや…とてもものに平家断絶のところをも語りはたしまらせうず。さるほどに六代御前は…髪はそつたりとも心はよもそらじとあつて、鎌倉へ召し下され、つひに失はれたと申す。 VM. して大略平家もあそここなれども、大方聞き通いたかと存ずる。 卷四第二十八章 六代高野へ上らるること、平家断絶、また文覚も流され、つひには六代も首をはねられたこと。	QI. 文治二年の春のころ法皇は女院の大原の閑居のお住まひをござらうぜられたうおぼしめされたれども…女院つひに建久のころ御逝去あつたと申す。 VM. さてもあはれなことであつたなう…その女院のおことをもまちつとお語りあれ。 卷四第二十七章 法皇大原に御幸なされ、女院に御見参あつたこと。	…平家の子孫さだめて多からうず、たづね出いてお失ひあれとおほせらるれば…謀叛おこさば、さだめて方人をせう聖ぢや…ただし頼朝が一期の間はいかでか傾けうぞ？ 子どもの末は知らずとおほせられたことは、まことにおそろしい儀ぢや。
※問いかけなし	※問いかけなし	(1) 特定の人物（女院）	
④ 『平家物語』と関係しない会話	④ 『平家物語』と関係しない会話	① 特定の話を要求 （b）登場人物の最後や後日譚） ② 前の話の感想	

① 神 仏 へ の 祈 願 を 描 いた も の 6 例

祀い例 を描4 をの 神様も たるた	
【巻三第三章】 これは何の社ぞ？ 何たる神をあがめたぞ と問はれたれば… これは八幡を祝ひまらして、	金堂の弥勒へ 今生の祈禱のためか、 または後生のためにか 寄進させられて 出させらるるところに 【巻三第五章】 当家もまた、比叡の山のために 怨を結ばねば、 山王に祈誓をして 三千の衆徒を語らひとらうずる 【巻四第一〇章(a)】 いとどあはれやまさりつらう… 南無西方極樂世界の 弥陀如来
【六三句 木曾願書】 是ハ何ノ社ソ イカナル神ヲ崇メ奉タルソ ト尋ラレケレハ 是レハ八幡ヲ移シマイラセテ	(中略) 今ハ御心細フヤ 思召レケン泣々 金堂ノ弥勒ニ 奉ラセ玉ヒケリ 龍花ノ時御暁 値遇ノ御為カト覚ヘテ 哀ナリシ御事也 【六七句 平家一門願書】 当家モ亦山門ノ為ニ 怨ヲ結ハスサレハ 山王大師ニ祈精シテ 三千ノ衆徒語合ヒ取ン 【九〇句 小宰相身投】 最哀ヤ増リケン 南無西方極樂世界ノ 弥陀如来
【六三句 木曾の願書】 「これはなにの社ぞ、 いかなる神を崇めたてまつりたるぞ」 とたづねられければ、 「これは、八幡を遷しまゐらせて、	(中略) いまは御心細うや おぼしめされけん、泣く泣く 金堂の弥勒に 奉らせ給ひけり。 「龍花の御あかつき、 値遇の御ためか」とおぼえて、 あはれなりし御ことなり。 【六七句 平家の一門願書】 当家もまた山門のために 怨をむすばず。 山王大師に祈誓して 三千の衆徒かたらひとらん 【九〇句 小宰相身投ぐる事】 いとどあはれやまさりけん、 となへ給ひて、 「南無、西方極樂世界の 阿弥陀如来、
【巻七 願書】 「あれはいづれの宮と申ぞ。 いかなる神を崇奉るぞ」。 「八幡でまし／＼候。	(中略) いまをかぎりとかや おぼしめされけん、 金堂の弥勒に まいらせおはします。 龍花の暁、 値遇の御ためかとおぼえて、 あはれなりし事共也。 【巻七 平家山門連署】 山門又当家のために 不忠を存ぜず。 山王大師に祈誓して、 三千の衆徒をかたらはばや 【巻九 小宰相身投】 折からあはれやまさりけん、 しのびごゑに念仏百返ばかり となへ給ひて、 「なむ西方極樂世界教主、 弥陀如来、 本願あやまたず浄土へ みちびき給ひつゝ、 あかで別しむせのなからへ、 必ひとつはちすに むかへたまへ」と

	③ 神 仏 へ の 信 仰 を 描 いた も の 3 例	② 神 仏 を 祀 る 様 を 描 いた も の 4 例
	【巻三第九章】 重衡 そこあまり都のことを恋しう思うて。 住みなれし古き都の恋しさは、 神も昔を忘れたまはず。 と、泣く泣く詠まれたれば 【巻四第二章】 斎藤五、斎藤六は ただ聖を生身の仏のやうに 思うて、三度伏し拝み 【巻四第二章】 そのゆゑは五障三従の 苦しみをのがれ、 釈迦の遺弟につらなり	【巻四第二章】 畠山まづ軍神に血祭せう と云うて 【巻四第一章】 さらば能遠を討つて 軍神にまつれと云うて、 能遠が城へ押し寄せたれば ところの者ども二十人ばかり 討ち取つて、 喜びの鬨をつくり、 軍神にまつられた。 【巻三第九章】 重衡 そこあまり都のことを恋しう思うて。 住みなれし古き都の恋しさは、 神も昔を忘れたまはず。 と、泣く泣く詠まれたれば 【巻四第二章】 斎藤五、斎藤六は ただ聖を生身の仏のやうに 思うて、三度伏し拝み 【巻四第二章】 そのゆゑは五障三従の 苦しみをのがれ、 釈迦の遺弟につらなり
	【第八一句 宇治川】 畠山先ツ軍サ神ニ血祭セン トテ 【一〇一句 屋島】 サラハ義遠討テ 軍神ニ祭レヤトテ 櫻場力城ヘソ寄せタリケル 所ノ者トモ廿余人カ 頸ヲ切り 悦ノ時ヲ作り 軍神ニソ祭レケル ※欠巻 【一一八句 六代】 斎藤五 斎藤六ハ 聖ヲ只生身ノ仏ノ様ニ 思テ三度伏シ拝ミ 【一一九句 小原御幸】 其故ハ五障三従ノ 苦ミヲ遁レ 釈迦ノ遺弟ニ連リ	【八一一句 宇治川】 畠山、「まづ軍神の血祭りせん」 とて 【一〇一句 屋島】 「さらば能遠討つて 軍神にまつれや」とて、 桜間が城へぞ寄せたりける。 所の者ども二十余人が 首を斬り、 よろこびの鬨をつくり、 軍神にぞまつられる。 【七一一句 四の宮即位】 そのなかに、本三位の中将重衡、 住みなれしふるき都の恋しさは 神もむかしをわすれ給はじ と泣く泣く申されければ 【一一八句 六代】 斎藤五、斎藤六、 聖をただ生身の仏の様に 思ひて、三度伏し拝み 【一一九句 大原御幸】 そのゆゑは、五障三従の 苦しみをのがれ、 釈迦の遺弟につらなり
	【巻九 宇治川先陣】 畠山「けふのいくさ神いはん」 とて 【巻二一 勝浦付大坂越】 「いざ、さらば けちらしてとをらん」とて (中略) 能遠が城にをしよせて見れば ふせき矢あける兵共廿余人が 頸きりかけて、 いくさ神にまつり 【巻八 名虎】 本三位中将重衡卿、 すみなれしふるき宮この恋しさは 神もむかしにおもひしるらむ 人々はをきいてみな 涙をながされけり。 【巻一二 六代】 斎藤五・斎藤六はをき、 聖を生身の仏の如く おもひて、手を合て 【灌頂巻 六道之沙汰】 忽に釈迦の遺弟につらなり、 忝なく弥陀の本願に乗じて、 五障三従のくるしみをのがれ	

とい 仏な例 神し の係 際関の 実はも		例 外 4 例	
【巻四第二章】 治承の合戦の時、 足利の又太郎が 渡いたは 神か、仏かものがましい… 畠山が瀬ぶみつかまつらう	【巻一第七章】 少将は慰まるることもなし、 夜昼ただ 父成親卿のことのみを歎かれた	【巻三第八章】 池の大納言は 仁和寺に 引き籠つておぢやつた。 これは	① 故池の尼御前の頼朝を 助けられたによつて、 ② 頼朝からも誓文をもつて、 池殿にも意趣はない と言つて、
【八一句 宇治川】 治承ノ合戦ノ時 足利又太郎カ 渡シケルハ 神カ仏カ物ガマシ 重忠瀬蹈仕ラン	【一七句 成親流罪】 少将ハ 一向仏ノ御名ヲ唱テ 父ノ事ヲ祈ラレケル	【七〇句 平家一門都落】 池大納言ハ 八条ノ女院ノ 仁和寺ノ常盤殿ニ 渡セ玉ケルニソ 参リ籠ラセ玉ヒケル 凡兵衛佐 大納言殿ヲハ	① 故池ノ尼御前ノ渡セ玉フ トコソ思ヒマイラセ候ヘ ② 全ク頼朝ニ於テハ意趣ヲ思 奉ラス 八幡大菩薩モ御照覧候ヘ ト度々誓言ヲ以テ 申サレケリ
【八一句 宇治川】 一年治承の合戦に、 足利の又太郎忠綱は 十八歳にて 渡しけるは、 鬼神にてはよもあらじ。 重忠瀬ぶみつかまつらん	【一七句 成親流罪・少将流罪】 少将は 一向仏の御名をとなへて、 父のことをぞ祈られける。	【七〇句 平家一門都落ち】 池の大納言は、 八条の女院の 仁和寺の常盤殿に わたらせ給ひけるにぞ、 参り籠らせ給ひける。 およそ、兵衛佐、 「大納言殿をば、	① 故池の尼御前のわたらせ給ふ ところ思ひまゐらせ候へ。 ② 頼朝においては、意趣は思ひ たてまつらず。 八幡大菩薩も御照覧候へ」 と度々誓言をもつて 申されけり。
【巻九 宇治川先陣】 治承の合戦に、 足利又太郎忠綱は、 鬼神でわたしけるか、 重忠瀬ぶみ仕らん	【巻二 阿古屋之松】 少将なぐさみ給ふ事もなし。 よるひるたゞ 仏の御名をのみ唱て、 父の事をぞ歎れける。	【巻七 一門都落】 抑池殿の とゞまり給ふ事をいかにといふに、 兵衛佐 つねは頼盛に情をかけて、 「御かたをば、 まゝたくをろかに おもひまいらせ候はず。 ① 故池殿のわたらせ給ふ ところ存候へ。	八幡大菩薩も御照覧候へ」 なゞど、度々誓状をもつて 申されける上、

例 外 4 例

主上の召された玉の御輿をかき据ゑてござるところへ、	玉ノ御輿ヲ 昇居ヘテ 男山ヲ伏シ拝ミ平大納言時忠 南無婦命頂礼正八幡大菩薩 然ルヘクンハ 君ヲ初メマイラセテ我等ヲ 今一度都ヘ帰シ入レサセ玉ヘト 泣々申レケルコソ悲ケレ 肥後守貞能ハ	玉の御輿をかき据ゑて、 男山を伏し拝み、平大納言時忠、 「南無婦命頂礼、正八幡大菩薩、 しかるべくんば 君をはじめまゐらせて、われらを いま一度都へ返し入れさせ給へ」と 泣く泣く申されけるこそ悲しけれ。 肥後守貞能は	玉の御輿をかきすへて、 男山をふし拝み、平大納言時忠卿 「南無婦命頂礼八幡大菩薩、 君をはじめまいらせて、我等 都へ帰し入させ給へ」と、 祈られけるこそかなしけれ。(中略) 肥後守貞能は
【巻四第一四章】 さて熊野へ参りつかせられて、 貞能といふ者が 後生善所と 祈らせらるるにも、	【九八句 維盛入水】 維盛先ツ証誠殿ノ御前ニ参リ (中略) 本地阿弥陀如来ニテ 在ケレハ撰取不捨ノ本願 誤タス西方浄土ヘ迎ヘ玉ヘト 書詢申サレケリ中ニモ 故郷ニ留置シ 妻子安穩ト祈レケルコソ 悲ケレ浮世ヲ厭イ 真ノ道ニ入玉ヘトモ 妄執ハナヲ尽スト覺テ 弥哀ハ勝リケリ (中略) 念仏ヲ留メ 瀧口入道ニ宣ケルハ 哀レ人ノ身ニ持マシキ 者ハ妻子ニテ有ケルソ	【九八句 維盛入水】 維盛、まづ証誠殿の御前に参り (中略) 「本地阿弥陀如来にて おはしければ、撰取不捨の本願 あやまず、西方浄土へ迎へ給へ」と かきくとき申されける。なかにも 「故郷にとどめおきし 妻子安穩」と祈られけるこそ かなしけれ。「憂き世を厭ひ、 まことの道に入り給へども、 妄執はなほ尽きず」とおぼえて、 いよいよあはれはまさりけり。(中略) 念仏をとどめ、 瀧口入道にのたまひけるは、 「あはれ、人の身に持つまじき ものは妻子にてありけるぞ。」	【巻一〇 熊野参詣】 証誠殿の御まへにつゐ給ひつゝ (中略) 「本地阿弥陀如来にて まします。撰取不捨の本願 あやまず、浄土へみちびき給へ」と 申されける。なかにも 「ふるさとにとどめおきし 妻子安穩」といのちられるこそ かなしけれ。うき世をいとひ まことの道に入り給へども、 妄執は猶つきずとおぼえて 哀なりし事共也 (後略)。 【巻一〇 維盛入水】 (前略) 念仏をとどめて、 合掌をみだり、 聖にむかひての給ひけるは、 「あはれ人の身に妻子といふ 物をばもつまじかりける物かな。 此世にて物をおもはするのみ ならず、後世菩提のさまたげ

例 外	4 例
滝口種々様々に教化申せば	只今モナヲ思出ルソトヨ 思フコトヲ心ニ認レハ 罪深カラシナレハ 懺悔スル也ト宣モ敢ス ハラ／＼トソ泣レケル 瀧口入道申ケルハ
滝口入道、申しけるは	ただ今もなほ思ひ出づるぞとよ。 思ふこと心にとどむれば、 罪深からんなれば、 懺悔するなり」と、のたまひもあへず、 はらはらとぞ泣かれける。
聖も（中略）申けるは	となりけるくちおしさよ。 只今もおもひいづるぞや。 かやうの事を心中にのこせば、 罪ふかからんなるあひだ、 懺悔する也」とぞのたまひける。

【表6】〈天草本〉が神仏表現を省略する場合（28例）

内容	天草本	斯道文庫蔵百二十句本	平仮名百二十句本	寛一本
定 想の をも 在た 例2	【巻四第一二章】 岸をうつ波も茫々とあつた… 足柄山をもうち過ぎ	【九四句 重衡東下】 岸擣ツ波モ茫々タリ 恋セハ瘦ヌヘシ 恋セヌモ有ケルト 明神ノ歌ハシメ玉ヒケン 足柄山モウチ過キ	【九四句 重衡東下】 岸うつ波も茫々たり。 「恋ひせば瘦せぬべし、 恋ひせずもありけり」と、 明神のうたひはじめ給ひけん 足柄山もうち過ぎ	【巻一〇 海道下】 岸うつ浪も茫々たり。 「恋せばやせぬべし、 恋せずもありけり」と、 明神のうたひはじめ給ひける 足柄の山をもうちこえて
① 神 仏て の描	【巻四第一三章】 和歌吹上の浜	【九五句 横笛】 和歌吹上ケノ濱 衣通姫ノ神ト現レ ヲワシマス玉津嶋明神 日前権現ノ御前ノ興ヲ過キ	【九五句 横笛】 和歌、吹上の浜、 衣通姫の神とあらはれ おはします玉津島の明神、 日前権現の御前の沖を過ぎ	【巻一〇 横笛】 和歌・吹上・ 衣通姫の神とあらはれ 給へる玉津嶋の明神、 日前・国懸の御前をすぎて
のた 道い 例9 神描 ・を 教想の 仏思も	【巻一第六章】 おん有様 さらに現とも覚えず、	【一六句 大教訓】 御有様ヲ見奉ルニ 終ニ幻トモ覚ヘ候ハス 有聲吾朝ハ粟散辺地トハ 申シナカラ天照太神ノ御子孫 国ノ主トメ天津兒屋根尊ノ 御末朝政ヲ司リ玉ヒテ	【一六句 大教訓】 御ありさまを見たてまつるに、 さらに現ともおぼえ候はず。 さすが、わが朝は、粟散辺地とは 申しながら、天照大神の御子孫、 国の主として、天の兒屋根の命の 御末、朝の政をつかさどり給ひて	【巻二 教訓状】 御ありさま、 更にうつゝ共覚え候はず。 さすが我朝は辺地粟散の境と 申ながら、天照大神の御子孫、 国のあるじとして、天兒屋根尊の 御末、朝の政をつかさどり給ひし

② 仏教・神道の思想を描いたもの 9 例

太政大臣の官にいたる人のみだりがはしう法皇を傾けさせられうずることは天道の御内証にもそむき参らせられうず…	ヨリ以来 太政大臣ノ官ニ至ル程ノ人ノ	よりこのかた、 太政大臣の官にいたるほどの人のみだりがはしく君をかたづけまゐらせ給はんこと、天照大神、正八幡宮の神慮にもそむきなんず 「日本はこれ神国なり。 神は非礼をうけ給はず。 しかれば君の	みだりがはしく法皇を傾け奉らせ給はん事、 天照大神・正八幡宮の神慮にも背候なんず。 日本は神国也。 神は非礼を享給はず。 然ば君の
そのうへ君の	然レハ君ノ	神ハ非礼ハ受玉ハス	神ハ非礼を享給はず。
【巻一 第二章】 あまたの乞匄人を見たれども、このやうな者をばまだ見たことがない…	【二六句 有王島下】 多ノ乞害人ヲミツレトモカ、ル者コソ 未タミネ	【二六句 有王島下】 おほくの乞匄人を見しかども、か様の者は いまだ見ず。 諸阿修羅等、居在 ^レ 大海辺とて、修羅、三悪、四趣は深山大海の辺にあると、仏説き給へることなれば、 知らず、餓鬼道にたづね来たるか	【巻三 有王】 多くの乞匄人みしか共、かゝる者をば いまだみず。 「諸阿修羅等居在 ^レ 大海辺」とて、修羅の三悪四趣は深山大海のほとりにありと、仏の解をき給ひたれば、 しらず、われ餓鬼道に尋来るか
もし餓鬼道にたづねて来たか	地獄餓鬼畜生三惡趣ハ深山大海ノ 辺ニ有リト仏ノ説置玉ヘル 事ナレハ 知ラス我レ餓鬼道ニ尋来カ	【六八句 法皇鞍馬落】 諸国七道悉乱レヌ 何レノ浦カ 穩カナルヘ□ 三界無安猶如火宅ト 如来ノ金言十乗ノ妙文ナレハ ナシカハ少モ違ヘキ 同廿四日小夜深ルホトニ	【巻七 主上都落】 諸国七道悉そむきぬ。 いづれの浦か おだしかるべき。 三界無安猶如火宅とて、 如来の金言一乗の妙文なれば、 なじかはすこしもたがふべき。 同七月廿四日のさ夜ふけがたに
【巻三 第六章】 諸国七道がみな乱れたれば、 どこの浦、山の奥にも 身を隠れられうずる所がなかった。	【六八句 法皇鞍馬落】 諸国七道悉乱レヌ 何レノ浦カ 穩カナルヘ□ 三界無安猶如火宅ト 如来ノ金言十乗ノ妙文ナレハ ナシカハ少モ違ヘキ 同廿四日小夜深ルホトニ	【六八句 法皇鞍馬落】 諸国七道ことごとく乱れぬ。 いづれの浦か おだやかなるべき。 「三界無安猶如火宅」と、 如来の金言、一乗の妙文なれば、 なじかは少しもちがふべき。 同じき二十四日、小夜ふくるほどに	【巻一〇 千手前】 千手酌をさしおいて、 「羅綺の重衣たる、 情ない事を奇婦に妬」
それによつて夜ふけてから	【九四句 重衡東下】 千手酌ヲ閣テ 綺羅之為重衣 妬無情於機婦ト云	【九四句 重衡東下】 千手、酌をさしおいて、 羅綺の重衣たるは 情なきことを機婦にねたまる	【九四句 重衡東下】 千手、酌をさしおいて、 羅綺の重衣たるは 情なきことを機婦にねたまる
【巻四 第一二章】 千手酌をさしおいて、	【九四句 重衡東下】 千手酌ヲ閣テ 綺羅之為重衣 妬無情於機婦ト云	【九四句 重衡東下】 千手、酌をさしおいて、 羅綺の重衣たるは 情なきことを機婦にねたまる	【九四句 重衡東下】 千手、酌をさしおいて、 羅綺の重衣たるは 情なきことを機婦にねたまる

② 仏教・神道の思想を描いたもの 9 例

	今様を 歌へば	【巻四第一章】 世にある人を 頼めとおほせらるるは… 当時は源氏の 郎等どもこそござれ…	【巻四第二章】 楽しみ栄え世にあるとも、 千年の齢を延べうか？ 楽しみは必ず 悲しみのもとゐなれば、 生はまた死の因でござる
朗詠シタリケレハ 中将是ヲ聞玉ヒテ 此ノ朗詠セン人ハ北野天神 一日ニ三度翔リ 守ント誓願マシクケリ 去レトモ重衡	千手又酌ヲ闇テ 雖十惡猶引接ス 欣極樂人皆 可唱弥陀名号ト云 今様ヲ 歌澄シタリケレハ	【九七句 維盛出家】 世ニ有ン人ヲ 憑メト仰候ハ 當時ハ源氏ノ 郎等トモコソ候ナレ 君ノ神ニモ仏ケニモ 成セ玉ヒテ後 樂ミ榮ヘ世ニ有トモ 千年ノ齢ヲ延フヘキカ	【一一一句 大臣殿之最後】 樂ハ必 悲ノ基ナレハ 生ハ又死ノ因也 サレハ仏ハ我心自空 罪福無至観心無心 法無住法ト説カレタリ 善モ惡モ只空也ト
といふ朗詠したりければ、 中将これを聞き給ひて、 「この朗詠せん人は、北野の天神 『一日に三度翔り 守らん』と誓願ましましけり。 されども重衡	千手また酌をさしおいて、 十惡といへどもなほ引摂す 極樂をねがふ人はみな 弥陀の名号となふべしといふ 今様を 歌ひすましたりければ	【九七句 維盛出家】 『世にあらん人を たのめ』と仰せ候。 当時は源氏の 郎等どもこそ候ふなれ。 君の、神にも、仏にも ならせ給ひてのち、 楽しみ、栄え、世にあるとも、 千歳の齢を延ぶべきか。	【一一一句 大臣殿最後】 楽しみは必ず 悲しみのもとゐなれば、 生はまた死の因なり。 されば、仏は『我心自空、 罪福無主、観心無心、 法無住法』と説かれたり。 『善も、惡も、ただ空なり』と
といふ朗詠を一面反したりければ、 三位中将の給ひけるは、 「この朗詠せん人は、北野の天神 一日に三度かけ^テて まばらんとちかはせ給ふ也。 されども重衡は	千手前やがて、 「十惡といへども引摂す」 といふ朗詠をして、 「極樂ねがはん人はみな、 弥陀の名号となふべし」といふ 今様を四五反 うたひすましたりければ	【巻一〇 維盛出家】 「このごろは世にある人こそ おほけれ」と仰かうぶり候は、 当時のごとくは源氏の 郎等どもこそ候なれ。 君の神にも仏にも ならせ給ひ候なん後、 たのしみさかへ候とも、 千年の齢をふるべきか。	【巻一一 大臣殿被斬】 樂尽て悲来る。 天人尚五衰の日にあへり」とこそ うけ給はれ。 されば仏も「我心自空、 罪福無主、観心無心、 法不住〔法〕とて」、 善も惡も空なりと

② 想の思の道神・教の仏を描いた例	③ 例するもの左右を命を運命の人間を神
	【巻一第六章】 黒系威の腹巻の白金物打ったをき、 銀の蛭巻した小長刀の 【巻一第九章】 その卒塔婆を浦に持つて出て、 せめて一本なりとも都あたりへゆられゆけかし とて
観シツルガ正シク仏ノ御心ニハ相叶コトニテ候ナルソ イカナレハ弥陀如来ハ五劫カ間思惟メ発シ難キ願ヲ発シマシク我等ヲ引接シ玉フニ (中略) 努々余念ヲユサセ玉フナトテ	【一六句 大教訓】 白金物打タル黒系威ノ腹巻胸ムナイタ(注、金偏十孔 責テ先年安芸守タリシ時 厳嶋大明神ヨリ靈夢ヲ蒙テ幻ニ玉ハラレタル秘藏ノ手銚ノ銀ニテ蛭巻シタル小薙刀 【一八句 鬼海島】 是ヲ浦ニ持テ出テ南無帰命頂礼梵天帝釈 堅牢地神王城之鎮守諸大明神殊ニハ熊野権現金剛童子厳嶋大明神願者此ノ卒都婆一本ナリ共都ノ中へ伝へテタハセ玉ヘトテ
観じつるが、まさしく仏の御心には、あひかなふことにて候ふなるぞ。 いかなれば、弥陀如来は、五劫があひだ思惟して、おこしがたき願をおこしましましわれらを引接し給ふに (中略) ゆめゆめ、余念をおこさせたまふな」とて	【一六句 大教訓】 白金物うちたる黒系威の腹巻、胸板せめて着給ふ。 先年安芸守たりしとき、 厳嶋の大明神より、靈夢をかうふりてうつつに賜はられたる秘藏の手銚の、銀にて蛭巻したる小長刀 【一八句 三人鬼界が島に流さるる事】 これを浦に持ちて出で、 「南無帰命頂礼、梵天、帝釈、 堅牢地神、王城の鎮守諸大明神、ことには熊野の権現、金剛童子、厳嶋大明神、 願はくはこの卒都婆を一本なりとも都のうちへ伝へてたばせ給へ」とて
観ずるが、まさしく仏の御心にあひかなふ事にて候なり。 いかなれば弥陀如来は、五劫が間思惟して、発がたき願を發しますますに (中略) ゆめ／＼余念をおぼしめすべからず」とて	【巻二 教訓状】 黒系威の腹巻の白がな物うゝたるむな板せめて、先年安芸守たりし時、神拝の次に、 靈夢を蒙て、厳嶋の大明神よりうつつに給はられたりし銀のひる巻したる小長刀 【巻二 卒都婆流】 是を浦にもゝて出て、 「南無帰命頂礼、梵天帝尺、四大天王、 けんらふ地神、鎮守諸大明神、殊には熊野権現、厳嶋大明神、 せめては一本成共都へ伝てたべ」とて

③ 人間の運命を左右する神仏を描いたもの 9 例

千本ながら 海に入れたれば、	奥津白浪ノ寄テハ返ス 度ビコトニ卒都婆ヲ 海ニゾ浮ヘケル（中略） 其思心ヤ便ノ風トモ 成タリケン 又神明仏陀モヤ 贈セ玉ヒケン 千本ノ卒都婆ノ内ニ一本ハ	奥津白波の寄せてはかへる たびごとに、卒都婆を 海にぞ浮かべける。（中略） その思ふ心やたよりの風とも なりたりけん、 また神明仏陀もや 送らせ給ひけん、 千本の卒都婆のうち一本は	安芸の厳島の 渚に打ち上げたところ 【卷二第八章】 これを射損ずるものならば、 世にあらうずる身とおぼえぬ と、心の底に思ひさだめて （中略）射たれば、手ごたへがして	【卷三第五章】 一門の公卿同心して 願書を書いて（中略） 三千の衆徒に力をあはせいと頼まれたれども、 年来日ごろの振舞ひが そでなかったによつて、 祈れども、かなはず、 語らへども、靡かず	【卷四第二十六章】
安芸の厳島の 渚に打ち上げたところ 【四〇句 鵠】 是ヲ射損スル物ナラハ 世ニアルヘキ身トモ覺ヘス 南無帰命頂礼正八幡大菩薩 ト心ノ底ニ祈念メ （中略）射ル手答ヘメ	【六七句 平家一門願書】 一門ノ公卿同心ノ 願書ヲ書テ（中略） 山王大師憐ヲ垂玉ヘ 三千ノ大衆力ヲ合セヨ トナリサレトモ 年来日比ノ振舞 神慮ヲ背キ 違ニ人ノ望ニケレハ 祈レトモ叶ハス 語合ヘトモ靡カス	【四〇句 鵠】 「これを射損ずるものならば、 世にあるべき身とおぼえず。 南無帰命頂礼、八幡大菩薩」と心の底に祈念して （中略）射る。手ごたへして	【六七句 平家一門願書】 一門の公卿、同心の 願書を書いて（中略） 「山王大師、憐みを垂れ給へ。 三千の大衆、力をあはせよ」となり。されども、 年ごろ、日ごろのふるまひ、 神慮をそむき、 人ののぞみにも違ひければ、 祈れどもかなはず、 かたらへどもなびかず。	【一一八句 六代】	【一一八句 六代】
安芸の厳島の 渚にうちあげたり。 【卷四 鵠】 これをみそんずる物ならば、 世にあるべしとおもはざりけり。 さりながら矢とてつがひ、 南無八幡大菩薩 と、心のうちに祈念して （中略）ゐる。手ごたへして	【卷七 平家山門連署】 一門の公卿十人、同心連署の 願書をかいて（中略） 山王大師あはれみをたれ給ひ、 三千の衆徒力を合せよ と也。されども 年ごろ日ごろのふるまひ、 神慮にもたがい、 人望にもそむきにければ、 いのれ共かなはず、 かたらへ共なびかざりけり。	安芸国厳島の 大明神の御まへの 渚にうちあげたり。 【卷四 鵠】 これをみそんずる物ならば、 世にあるべしとおもはざりけり。 さりながら矢とてつがひ、 南無八幡大菩薩 と、心のうちに祈念して （中略）ゐる。手ごたへして	【卷七 平家山門連署】 一門の公卿十人、同心連署の 願書をかいて（中略） 山王大師あはれみをたれ給ひ、 三千の衆徒力を合せよ と也。されども 年ごろ日ごろのふるまひ、 神慮にもたがい、 人望にもそむきにければ、 いのれ共かなはず、 かたらへ共なびかざりけり。	【卷一二 六代】	【卷一二 六代】

③ 人間の運命を左右する神仏を描いたもの 9 例				
命あらばまたこそと慰めたことばのおとなしさを、いつ忘れうともおぼえず、	命アラハ又コソト慰メツル 詞ノ老サヲ イツ忘ツトモ覚エス 年来長谷ノ観音ヲ 憑奉シ定業ハ 仏モ叶ハセ玉ハンニヤ 去ハタ去ヤ切レンスラン	「またこそ」と慰めつることばのおとなしさを、いつ忘れうともおぼえず。年ごろ、長谷の観音を頼みたてまつりしに、定業は仏もかなはせ給はぬにや。されば、「夕さりや斬られん」	年ごろは長谷の観音をこそふかうたのみ奉りつるに、終にとられぬ事のかなしさよ。只今もやうしなひつらん」	夕さりや切られう 歎き沈んでござったが、起き上がらせられ、 暫時の命も延びうずるか 【巻四第二十八章】 髪はそつたりとも 心はよもそらじとあつて、 鎌倉へ召し下され、 つひに失はれたと申す。
VM. さてさて長々しいことを退屈もなうお語りあつたの。	祈ル祈リハコハソカシ 鎌倉ノ御免ハシラネトモ 暫時ノ命ヲ延ンニコソトテ 【一二〇句 断絶平家】 髪ハ剃タリトモ 心ハ与磨剃ラシトテ 宮人資兼ニ仰セテ 鎌倉ヘ召下サル 此度ハ駿河国ノ住人 岡部三郎大夫承テ 鎌倉ノ六浦坂ニテ 切ラレケリ 十二歳ヨリメ廿六マテ 持ケルハ 長谷ノ観音ノ御利生トコソ 覚ヘタレ 其レヨリメソ平家ノ子孫ハ 絶ヘ終ニケルリ	「この三年、長谷の観音に祈るいのりは、ここぞかし。鎌倉の御許しは知らねども、暫時の命を延べんにこそ」とて 【一二〇句 断絶平家】 髪は剃りたりとも、 心はよも剃らじ」とて、 宮人資兼に仰せて、 鎌倉へ召し下さる。 このたびは、駿河の国の住人、 岡部の三郎大夫、うけたまはつて、 鎌倉の六浦坂にて 斬られけり。 十二歳より三十二まで 保ちけるは、 長谷の観音の御利生とこそおぼえたれ。 それよりしてぞ、平家の子孫は 絶えにけり。	たのもしうぞおもはれける。 【巻一二 六代被斬】 かしらをばそつたりとも、 心をばよもそらじ」とて 鎌倉殿より頻に申されければ、 安判官資兼に仰て召捕りて 関東へぞ下されける。 駿河国住人 岡邊権守泰綱に仰て、 田越河にて 切られてさげり。 十二の歳より卅にあまるまで たもちけるは、 ひとへに長谷の観音の御利生とぞ聞えし。 それよりしてこそ平家の子孫は ながくたえにけれ。	

④ 神仏以外の省略理由が考えられるもの 6 例

【巻一第六章】 太政大臣の官にいたる人の 甲冑を鎧ふこと、 礼儀をそむくではござないか？ なかんづくに御出家のおん身でござる	これまことに内にはすでに 破戒無慙の罪を招くのみならず	【巻一第九章】 日ごとに二人ともに 熊野詣のまねをして、 都へ帰るやうにと祈られた。	康頼入道 あまりのせん方なさに	父の清盛に見せられたれば、
【一六句 大教訓】 太政大臣ノ官ニ至ル程ノ人ノ 甲冑ヲ鎧ヒマシマサハコト、 礼義ヲ背ニ非ズヤ 就レ中出家ノ御身ナリ 夫三世諸仏解脱同相ノ 法衣ヲ脱捨テ忽ニ 甲冑ヲ着玉ハンコト	内ニハ 破戒無慙ノ罪ヲ招キ	【一八句 鬼海島】 毎日 熊野詣ノ学ヲメ 帰落ノコトヲソ祈ラレケル 南無権現金剛童子願ハ 哀ミヲ垂サセヨハシマシ 我等ヲ再ヒ都ヘ 帰シ入テ恋シキ者共ヲ 今一度見セ玉ヘトソ祈リケル (中略)	判官入道 余リニ都ノ恋シキ俣ニ	入道ニ見セ奉リ玉ヒケレハ 相国モ岩木ナラネハ 哀ゲニソ宣ケル 柿本人丸ハ嶋隠行舟ヲ 思ヒ山辺赤人ハ
【一六句 大教訓】 太政大臣の官にいたるほどの人の 甲冑をよろひましまさんこと、 礼儀をそむくにあらずや。 なかんづく出家の御身なり。 それ三世の諸仏解脱幢相の 法衣を脱ぎすてて、たちまちに 甲冑を着給はんこと、	内には 破戒無慙の罪をまねき	【一八句 三人鬼界が島に流さるる事】 毎日 熊野詣のまねをして、 帰落のことをぞ祈られる。 「南無権現金剛童子、ねがはくは あはれみをたれさせおはしまし、 われらをふたたび都へ かへし入れて、恋しき者を 今ひとたび見せ給へ」とぞ祈りける。 (中略)	判官入道、 あまりに都の恋しきままに	入道に見せたてまつり給ひければ、 相国も岩木にあらねば、 あはれげにぞのたまひける。 柿本人丸は、「島がくれゆく舟」を 思ひ、山辺の赤人は、
【巻二 教訓状】 太政大臣の官に至る人の 甲冑をよろふ事、 礼義を背にあらずや。 就レ中出家の御身也。 夫三世の諸仏、解脱幢相の 法衣をぬぎ捨て、忽に 甲冑をよろひ、 弓箭を帯しましまさん事、 内には既に 破戒無慙の罪をまねくのみならずや	【巻二 康頼祝言】 日ごとに 熊野まうでのまねをして、 帰落の事をぞ祈ける。 「南無権現金剛童子、ねがはくは 憐みをたれさせおはしまして、 古郷へ かへし入させ給へ。妻子どもをば 今一度みせ給へ」とぞ祈ける (後略)。	【巻二 卒都婆流】 (前略) 康頼入道、 古郷の恋しきまゝに、 父の入道相国にみせ奉り給ふ。	父の入道相国にみせ奉り給ふ。	柿本人丸は嶋がくれゆく船を 思ひ、山邊の赤人は

④ 神仏以外の省略理由が考えられるもの 6例

清盛も岩木でなければ、 さすがあはれに思われた	【巻一第一章】 子にすぎた宝はないと言うて、 涙を流し、 袖をしぼらぬはござなかつた と、申す。	【巻四第二章】 この世は生者必滅の国なれば、 生るるものは必ず死に、 あふものは定まつて 別るるならひぢや…
芦辺ノ田鷺ヲ詠玉フ 住吉明神ハ片曾木ノ思ヲ ナシ三輪明神ハ 相立ル門ヲ鎖 素盞鳥尊 三十一文字ヲ 初置玉ヒシヨリ 以来諸ノ神明 仏陀モ此詠吟ヲ以テ 百千万端ノ思ヲ延フ	【二五句 少将帰洛】 子ニ過タル宝ナシトテ 皆袖ヲソ絞ケル 歳去歳来レトモ 忘レガタキハ撫育ノ 昔ノ恩夢ノ如ク 幻ノ如シ尽メモ尽シカタキハ 恋慕ノ今ノ涙ナリ 三世十方仏陀ノ聖衆モ 憐ミ亡魂尊霊モ イカハカリ勸シト思ヒ給ヒケン 今シハラクモ	【一一一句 大臣殿之最後】 此世ハ生者必滅ノ国ナレハ 生ル者ハ必ず死ス 会者ハ定テ 離ル、習アリ 釈尊未梅檀ノ烟ヲ
「あしべの鶴」をながめ給ふ。 住吉の明神は、「かたそぎの思ひ」を なし、三輪の明神は、 「杉たてる門」をとぎす。 素盞鳥尊は、 三十一文字を はじめおき給ひしより このかた、もろもろの神明、 仏陀も、この詠吟をもつて、 百千万端の思ひを述べ給ふ。	【二五句 少将帰洛】 「子にすぎたる宝なし」とて、 涙をながし、 袖をぬらさぬはなかりけり。 年去り年来たれども、 わすれがたきは撫育の むかしと思ひ、夢のことく まぼろしのごとし。尽きがたきは 恋慕のいまの涙なり。 三世十方の仏陀の聖衆も あはれみ給ひ、亡魂尊霊も いかにうれしとおぼしけん。 「いましばかり」	【一一一句 大臣殿之最後】 この世は生者必滅の国なれば、 生るる者は必ず死す。 会う者は定まつて 離るる習ひなり。 釈尊いまだ梅檀の煙を
あしべのたづをながめ給ふ。 住吉の明神はかたそぎの思を なし、三輪の明神は 杉たてる門をさす。 昔素盞鳥尊、 三十一文字のやまとうたを はじめをき給ひしより このかた、もろもろの神明 仏陀も彼詠吟をもつて 百千万端の思ひをのべ給ふ。 入道も石木ならねば、 さすが哀げにぞの給ひける。	【巻三 少将都帰】 子に過たる宝なしとて、 泪をながし 袖をしぼらぬはなかりけり。 年去年来れ共、 忘がたきは撫育の 昔の恩夢の如く 幻のごとし。尽きがたきは 恋慕のいまの涙也。 三世十方の仏陀の聖衆も あはれみ給ひ、亡魂尊霊も いかにうれしとおぼしけむ。 「いましばかり」	【巻一一 大臣殿被斬】 生をうけさせ給てより このかた、たのしみさかへ（中略） 釈尊いまだ梅檀の煙を

④ 神仏以外の省略理由が考えられるもの 6 例

生をうけさせられてから このかた、楽しみ栄えて	【巻四第二十七章】 お障子を開いてごらうぜらるれば、 本尊をかけられ、	すべて諸経の要文ども色紙に 書いて所々におかれた…	一間な所を開いて御覧あれば 竹のお竿をかけられ、 麻の御衣、紙の衾、 昔の蘭麝のほひにひきかへた 香の煙心細う立ち上った。
免レ玉ワス 況凡夫ニ於テヲヤ 生ヲ受サセ玉ヒテヨリ 以来タ楽ミ榮ヘテ	【一一九句 小原御幸】 御障子ヲ開テ御覧スレハ 来迎ノ三尊東向ニヲワシマス 中尊ノ御手ニハ五色ノ糸ヲ 懸ラレタリ普賢ノ繪像 善道和尚ノ御影ナントモ	マシ／＼ケリ御前ノ机ニハ 八軸ノ妙文九帖ノ御袈裟ヲ 置レタリ 惣テ諸経ノ要文トモ色紙ニ 書テ所々ニ置レタリ 昔シ大江ノ貞光法師天台山ノ 麓清涼山ニ住シケル時 詠シタリシ笙歌遙聞孤雲上 聖衆来迎落日前ト書レタリ 彼ノ浄明居士カ方丈室中ニ 三万六千ノ床ヲ並ヘ十方ノ 諸仏ヲ請シ奉リケンモ カクヤトソ覺ヘタル	一間ナル障子ヲ開テ御覧スレハ 竹ノ御架ソ懸ケラレタルニ 麻ノ御衣紙ノ衾 昔ノ蘭麝ノ匂引替タル 香ノ煙ソ心細ソキ
まぬがれ給はず。 いはんや凡夫においてをや。 生を受けさせ給ひてより このかた、楽しみ栄えて	【一一九句 大原御幸】 御障子をひらきて御覧すれば、 来迎の三尊、東向きにおはします。 中尊の御手には五色の糸を かけられたり、普賢の繪像、 善導和尚ならびに、 先帝の御影なども	ましましけり。御前の机には、 八軸の妙文、九条の御袈裟を かけたり。 総じて、諸経の要文ども色紙 書きて、所々に置かれたり。	蘭麝の匂ひにひきかへて、 香の煙ぞ心細く立ちのぼる。 昔、大江の定基法師、天台山の ふもと、清涼山に住しけるととき、
まぬかれ給はず。 楽尽て悲来る。	【灌頂卷 大原御幸】 障子を引あけて御覧すれば、 一間には来迎（の）三尊おはします。 中尊の御手には五色の糸を かけられたり、左には普賢の繪像、 右には善導和尚并に 先帝の御影をかけ、	八軸の妙文・九帖の御書も をかれたり。	蘭麝の匂に引かへて、 香の煙ぞ立のぼる。

⑤ 同箇探 様所録 のでし 表言て2 現いい例 を換る 別えも のての	④ 神仏以外の省略理由が考えられるもの 6例
【巻三第八章】 今は積み重ねた悪のわざはひが 身に報うて 君にも捨てられまして、 波の上に浮ぶ落人となつて(中略) 行末とても頼みあるべうは なけれども	さるほどにうしろの山の
【七〇句 平家一門都落】 積悪ノ余殃 身ニ及フ 故ニ宿報尽テ 神明ニモ放タレ奉リ 君ニモ捨ラレマイラセテ 浪ノ上ニ漂フ落人ト成レリ(中略) 行スヘトテモ憑ミ有ヘウハ 無ケレトモ	去ホトニ後ノ山ノ
【七〇句 平家一門都落ち】 積悪ノ余殃、 身に及ぶ。 かるがゆゑに、宿報尽きて、 神明にも放たれたてまつり、 君にも捨てられまゐらせて、 波の上に浮かぶ落人となれり(中略) 行く末とても楽しみあるべうも なけれども	さるほどに、うしろの山の 少しひきのけて、女院の御製と おぼしくて(中略) 詠じたりし、笙歌はるかに聞こゆ、 孤雲の上聖衆来迎す、落日の前 と書れたり。 「かの浄名居士の、方丈の室の うちに、三万六千の榻を並べ、 十方の諸仏を請じたてまつり けんも、かくや」とぞ おぼえたる。
【巻七 福原落】 積悪ノ余殃 身に及ぶ ゆへに、 神明にもはなれ奉り、 君にも捨てられまいらせて、 帝都をいで旅泊にたゞよふ上は、 なんのたのみか あるべきなれ共	さる程に、うへの山より 【巻七 福原落】 積悪ノ余殃 身に及ぶ ゆへに、 神明にもはなれ奉り、 君にも捨てられまいらせて、 帝都をいで旅泊にたゞよふ上は、 なんのたのみか あるべきなれ共 彼浄名居士の方丈の室の 内に三万二千の床をならべ、 十方の諸仏を請じ奉り 給ひけむも、かくやとぞ おぼえける。 障子には諸経の要文共、色紙に かいて所々におされたり。 そのなかに大江の貞基法師が 清涼山にして詠じたりけむ 「笙歌遙聞孤雲上、 聖衆来迎落日前」ともかゝれたり。 すこし引のけて女院の御製と おぼしくて(中略) さてかたはらを御覧ずれば、 御寝所とおぼしくて、竹の 御さほにあさの御衣、紙の御衾 などかけられたり。(中略)

をいて例 現言し2 表で録 の所採の 様箇ても 同のえる ⑤別換い	【巻四第一章】 平家は宿報がつきて、 君にも捨てられまらして、 波の上に漂ふ落人と なつてござる	【一〇一句 屋島】 平家ハ宿報尽テ 神明ニモ放レ奉リ 君ニモ捨ラレ進セテ 浪ノ上ニ漂フ落人ト 成レリ	【一〇一句 屋島】 平家は宿報つきて 神明にも放たれたてまつり、 君にも捨てられまゐらせて、 浪の上にただよふ落人と なれり。	【巻一 逆櫓】 「平家は 神明にもはなれ奉り、 君にもすてられまいらせて、 帝都をいで、 浪のうへにたゞよふおちうとと なれり。」
---	--	---	--	---

【表7】〈天草本〉が神仏表現を別の表現に言い換えて採録する場合（19例）

内容	例 に4 現 表の なも 略た 簡え ・換 易い 平言 ①	例 に4 現 表の なも 略た 簡え ・換 易い 平言 ①	例 に4 現 表の なも 略た 簡え ・換 易い 平言 ①	例 に4 現 表の なも 略た 簡え ・換 易い 平言 ①
内容	内容	内容	内容	内容
【巻一第九章】 〈天草本〉 なんとぞして この島のうちに 熊野に似た所をたづね出いて、 熊野と名づけて拝まうずる と言うて	【巻一第九章】 松風神さびた住まひ、 熊野の権現のゐらるる 那智の山に似たによつて	【巻一第九章】 松風神孤タル栖居 飛瀧権現ノワシマス 那智ノ御山ニサモ似タリ	【巻一第九章】 松風神さびたる住ひ、 飛瀧権現のおはします那智の 御山にさも似たり。	【巻一第九章】 松風神さびたるすまひ、 飛瀧権現のおはします那智の お山にさにたりけり。
【巻一第八章】 大方人のしわざとはおぼえず… ただ天魔の所為と 見えたと申す。	【巻一第八章】 大方人のしわざとはおぼえず… ただ鬼神の所為と みへたりける	【巻一第八章】 大方人ノ仕態トハ覚ヘス 只鬼神ノ所為トソ ミヘタリケル	【巻一第八章】 おほかた人のしわざとはおぼえず。 ただ鬼神の所為とぞ 見えたりける。	【巻一第八章】 大方人のしわざとは見えず。 たゞ鬼神の所おとぞ みえたりける。
【巻四第二章】 されば頼朝に 天魔がつかずは、 よも忘れさせられまじい	【巻四第二章】 サレハ鎌倉殿ニ 受領神託玉ハスハ ヨモ忘レ玉ハシ	【巻四第二章】 サレハ鎌倉殿ニ 受領神託玉ハスハ ヨモ忘レ玉ハシ	【巻四第二章】 されば、鎌倉殿に 受領神、託し給はずは、 よも忘れ給はじ。	【巻四第二章】 鎌倉殿に 受領神つき給はずは、 よもわすれ給はじ
【巻一八句 鬼海島】 哀イカニモメ 此嶋ノ中へ 熊野三所権現ヲ勸請シ奉リ 帰洛ノ事ヲ祈ハヤ ト云ニ	【巻一八句 鬼海島】 哀イカニモメ 此嶋ノ中へ 熊野三所権現ヲ勸請シ奉リ 帰洛ノ事ヲ祈ハヤ ト云ニ	【巻一八句 鬼海島】 「あはれ、いかにもして、 この島のうちに 熊野の三所権現を勸請したてまつり、 帰洛のことを祈らばや」 といふに	【巻一八句 鬼海島】 「あはれ、いかにもして、 この島のうちに 熊野の三所権現を勸請し奉て、 帰洛の事をいのり申さばや」 と云に	【巻一八句 鬼海島】 「いかにもして 此嶋のうちに」 熊野の三所権現を勸請し奉て、 帰洛の事をいのり申さばや」 と云に
【巻一八句 鶴超】 大方人ノ仕態トハ覚ヘス 只鬼神ノ所為トソ ミヘタリケル	【巻一八句 鶴超】 大方人ノ仕態トハ覚ヘス 只鬼神ノ所為トソ ミヘタリケル	【巻一八句 鶴超】 おほかた人のしわざとはおぼえず。 ただ鬼神の所為とぞ 見えたりける。	【巻一八句 鶴超】 おほかた人のしわざとはおぼえず。 ただ鬼神の所為とぞ 見えたりける。	【巻一八句 鶴超】 おほかた人のしわざとはおぼえず。 ただ鬼神の所為とぞ みえたりける。
【巻一八句 六代】 サレハ鎌倉殿ニ 受領神託玉ハスハ ヨモ忘レ玉ハシ	【巻一八句 六代】 サレハ鎌倉殿ニ 受領神託玉ハスハ ヨモ忘レ玉ハシ	【巻一八句 六代】 されば、鎌倉殿に 受領神、託し給はずは、 よも忘れ給はじ。	【巻一八句 六代】 されば、鎌倉殿に 受領神、託し給はずは、 よも忘れ給はじ。	【巻一八句 六代】 鎌倉殿に 受領神つき給はずは、 よもわすれ給はじ
【巻一八句 康頼祝言】 「いかにもして 此嶋のうちに」 熊野の三所権現を勸請し奉て、 帰洛の事をいのり申さばや」 と云に	【巻一八句 康頼祝言】 「いかにもして 此嶋のうちに」 熊野の三所権現を勸請し奉て、 帰洛の事をいのり申さばや」 と云に	【巻一八句 康頼祝言】 「いかにもして 此嶋のうちに」 熊野の三所権現を勸請し奉て、 帰洛の事をいのり申さばや」 と云に	【巻一八句 康頼祝言】 「いかにもして 此嶋のうちに」 熊野の三所権現を勸請し奉て、 帰洛の事をいのり申さばや」 と云に	【巻一八句 康頼祝言】 「いかにもして 此嶋のうちに」 熊野の三所権現を勸請し奉て、 帰洛の事をいのり申さばや」 と云に

② 神仏表現以外の表現に言い換えたもの 10例

【巻一第四章】 重盛いかにと言はれたれば、 その時見つけ、 うれしげに思はれた気色 何ともたとへがたかった。	【一四句 小教訓】 大臣イカニヤト宣へハ 其時目ヲ見明テ 歎ゲニ思ハレタリシ気色ハ 地獄ニテ罪人カ地藏菩薩ヲ 見奉ルランモ此クヤ ト覺テ哀也	【一四句 小教訓】 大臣「いかにや」とのたまへば、 そのとき目を見あげて、 うれしげに思はれたりし気色、 「地獄にて罪人が地藏菩薩を 見たてまつるらんも、かくや」 とおぼえてあはれなり。	【巻二 小教訓】 「いかにや」との給へば、 其時みつけ奉り、 うれしげに思はれたるけしき、 地獄にて罪人どもが地藏菩薩を 見奉らむも、かくや とおぼえてあはれ也。
【巻二第一章】 今様を一つ歌うたが、 そのことわり時にあたつて似 やうであつたれば、	【三句 義王】 今ヤウ一ツソウタヒ^{アル}ル 月モカタフキ夜モ深ケテ 心ノ奥ヲ尋ヌルハ 仏モ本ハ凡夫也 吾等モ終ニハ仏ナリ 何レモ仏性ヲ具セル身ノ 隔タルノミコソ悲シケレ トナク、一^ツ反ウタヒタリケレハ 其座ニ並居玉ヘル	【五句 義王】 今様一つうたひける。 月もかたぶき夜もふけて 心のおくをたづぬれば 仏もむかしは凡夫なり われらもつひには仏なり いづれも仏性具せる身を へだつるのみこそかなしけれ と、泣く泣く三返うたひたりければ、 その座に並み給へる	【巻一 祇王】 今やうひとつぞうたふたる。 仏もむかしはぼんぶなり 我等も終には仏なり いづれも仏性具せる身を へだつるのみこそかなしけれ と、なぐ一^ツ返うたふたりければ、 其座にいくらもなみぬたまへたる
その座になみぬられた	【四句 義王出家】 名号ヲノミコソ唱ヘケレ 命ヲ失フ物ナラハ 声ヲ尋テ迎ヘ玉フナル 聖衆ノ来迎ニテマシマセハ ナトカ引接ナカルヘキ 相構テ念仏怠リ玉フナ	【六句 義王出家】 名号をとなへたてまつるべし。 声をたづねてむかへ給ふなる 聖衆の来迎にたまはせば、 などか引接なかるべき。 あひかまへて念仏おこたり給ふな	隙なく名号をとなへ奉るべし。 声を尋てむかへ給ふなる 聖主の来迎にたまはせば、 などかいんぜうなかるべき。 相かまへて念仏おこたり給ふな
【巻三第一〇章】 時忠卿出やうて、 いろいろにすかいて、	※欠巻	【七三句 緒環】 平大納言時忠の卿 (中略)のたまひけるは、 「わが君は天孫四十九世の正統、 人皇八十一代の帝にてわたらせ給ふ。 天照大神、正八幡宮もいかでか君をば	【巻八 太宰府落】 平大納言時忠卿 (中略)の給ひけるは、 「それ我君は天孫四十九世の正統、 仁王八十一代の御門なり。 天照大神・正八幡宮も我君をこそ

② 神仏表現以外の表現に言い換えたもの 10 例

頼朝や、木曾に 一味したならば、国をあづけう	【巻四第一章】 さても南都を亡ぼいたこと (中略) 全く重衡が 下知ではおられない…悪党が多う 籠つてゐたれば、何たるものの しわざか存ぜぬ などと種々様々のことを語ら れた。そのほか	出家は許されねば	【巻四第一章】 滝口 種々様々に教化申せば
※欠巻	【九三句 重衡受戒】 サテモ南都ヲ滅シ候事 (中略) 全く重衡カ 下知タルコトナシ悪党多ク 籠リ候シカハイカナル者ノ 仕態ニテカ候ケン 放火ノ時節風猛ク吹テ 多クノ伽藍ヲ滅シ奉ル 末ノ露本ノ零ト成コト ニテ候ナレハ重衡一人カ罪ニテ 無間ノ底ニ沈淪シ出離ノ期 有ラントコソ存候ツルニ 皆人ノ生身ノ如来ト 仰奉ル聖人ニ二度ヒ 見参ニ入候ヘハ今ハ無始ノ 罪障モ悉ク消滅シ候ヌ トコソ存候ヘ	出家ハ免サレ候ハネハ	【九八句 維盛入水】 瀧口入道 申ケルハ (中略) 三世ノ諸仏ハ一切衆生ヲ 子ノ如ニ思召メ (中略) 妻子ト云者カ 生死ノ縲ト成ニ依テ 仏大ニ誠玉フ是也
捨てまゐらせ給ふべき。 (中略) 頼朝、義仲に かたらはれて、 『しおほせたらば、国を預けん』	【九三句 重衡受戒】 さても、南都を滅ぼし候ふこと (中略) まつたく重衡 下知たることなし。悪党おほく 籠り候ひしかば、いかなる者の しわざにてか候ひけん、 放火の時節、風はげしく吹いて、 おほくの伽藍を滅ぼしたてまつる。 『すゑの露、もとの零となること にて候ふなれば、重衡一人が罪にて、 無間の底にしづみ、出離の期 あらじ』とこそ存知候ひつるに、 みな人の『生身の如来』と あふぎたてまつる上人に、ふたたび 見参に入り候へば、『今は無始の 罪障も、ことごとく消滅し候ひぬ』 とこそ存じ候へ。	出家はゆるされねば	【九八句 維盛入水】 瀧口入道、 申しけるは (中略) 三世の諸仏は、一切衆生を 子のごとくおぼしめして (中略) 妻子といふものが、 生死のきづなとなるによつて、 仏おほきにいましめ給ふ、これなり。
まもりまいらせ給ふらめ。 (中略) 頼朝・義仲等 に かたらはされて、 しおほせたらば国をあづけう	【巻一〇 戒文】 ※該当箇所なし		【巻一〇 維盛入水】 聖も (中略) 申しけるは、(中略) 三世の諸仏は一切衆生を 一子の如におぼしめして (中略) 妻子といふものが、 無始曠劫よりこのかた 生死に流転するきづなるがゆへに、 仏はおもういましめ給ふ也。

② 神仏表現以外の表現に言い換えたもの 10例

尼公	【巻四第二十七章】 風が少し静まり	【巻四第一七章】 思ひきつて 与一何ともせうやうもなうて、 しばし たったが…	【巻四第二十七章】 尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり
尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり
尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり
尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり
尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり
尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり
尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり
尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり
尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり
尼公	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり	【一一九句 小原御幸】 風が少し静まり

② 神仏表現以外の表現に言い換えたもの 10例

古いことども引き出いて それにたぐへ、	捨身の行を修しさせられうずるには、 何のおはばかりかござらう と申した。	大納言の局でござったが、 願ひにはたがひ、	思ひのほかに法皇の 御幸なされた口惜しさよ	これこそ大きに心得ませね.. 異国の玄奘三蔵、 本朝の日藏上人の上にこそ さやうのことをば うけたまはれ..
涙ヲ押ヘテ 事新シキ申事ニテハ 候ヘトモ 釈迦如来ハ中天竺ノ主 浄飯大王ノ太子サレトモ 伽毘羅城ヲ出テ壇特山ニ入り 高キ峰ニハ爪木ヲ拾ヒ 深谷ニハ水ヲ結ヒ 雪ヲ払氷ヲ砕クノミナラス 難行苦行功積ンテ 遂ニ正覺ヲ成シ玉フ（中略） 捨身ノ行ヲ修シマシマサンニハ 何ノ御憚力候ヘキ トソ申ケル	大納言局ナリ 一念ノ窓ノ前ニハ撰取ノ光明ヲ 期シ十念ノ柴ノ樞ニハ 聖衆ノ来迎ヲコソ待ツルニ 思ノ外ニ法皇ノ 御幸成タル口惜サヨ	是こそ大きに心得候ハネ 異国ノ玄奘三蔵ハ 覺ノ中ニ六道ヲ見 本朝ノ日藏上人ハ 蔵王権現ノ力ニテ六道ヲ 見タリト 承ル	「これこそ、大きに心得候はね。 『異国の玄奘三蔵は、 悟りの中に六道を見、 本朝の日藏上人は、 蔵王権現の力にて、六道を 見たり』と 承る。	「これこそ、大きに心得候はね。 『異国の玄奘三蔵は、 悟りの中に六道を見、 本朝の日藏上人は、 蔵王権現の力にて、六道を 見たり』と 承る。
涙をおさへて、 「ことあたらしき申しことにては さぶらへども、 釈迦如来は、中天竺の主、 浄飯大王の太子。されども 迦毘羅城を出でて、檀特山に入り、 高き峰には爪木を拾ひ、 深き谷には水を掬ひ、 雪をはらひ、氷を砕くのみならず、 難行、苦行の功を積み、 つひに正覺をなし給ふ。（中略） 捨身の行、修しましさんには、 なにの御はばかりかさぶらふべき」 とぞ申しける。	大納言の典侍の局なり。 「一念の窓の前には、撰取の光明を 期し、十念の柴の樞には、 聖衆の来迎をこそ待ちつるに、 思ひのほかに、法皇の 御幸なりたる口惜しさよ。	大納言の典侍の局なり。 「一念の窓の前には、撰取の光明を 期し、十念の柴の樞には、 聖衆の来迎をこそ待つるに、 思外に 御幸なりけるふしぎさよ」	女院御庵室にいらせ給ふ。 「一念の窓の前には撰取の光明を 期し、十念の柴の樞には、 聖衆の来迎をこそ待つるに、 思外に 御幸なりけるふしぎさよ」	女院御庵室にいらせ給ふ。 「一念の窓の前には撰取の光明を 期し、十念の柴の樞には、 聖衆の来迎をこそ待つるに、 思外に 御幸なりけるふしぎさよ」
申けるは、 「五戒十善の御果報 つきさせ給ふによ ^て て（中略） 悉達太子は十九にて 伽耶城をいで、檀特山のみもとにて、 木葉をつらねてはだえをかくし、 嶺にのぼりて薪をとり、 谷にくだりて水をむすび、 難行苦行の功によ ^て て、 遂に成等正覺し給ひき」 とぞ申ける。	【灌頂卷 六道之沙汰】 女院御庵室にいらせ給ふ。 「一念の窓の前には撰取の光明を 期し、十念の柴の樞には、 聖衆の来迎をこそ待つるに、 思外に 御幸なりけるふしぎさよ」	女院御庵室にいらせ給ふ。 「一念の窓の前には撰取の光明を 期し、十念の柴の樞には、 聖衆の来迎をこそ待つるに、 思外に 御幸なりけるふしぎさよ」	女院御庵室にいらせ給ふ。 「一念の窓の前には撰取の光明を 期し、十念の柴の樞には、 聖衆の来迎をこそ待つるに、 思外に 御幸なりけるふしぎさよ」	女院御庵室にいらせ給ふ。 「一念の窓の前には撰取の光明を 期し、十念の柴の樞には、 聖衆の来迎をこそ待つるに、 思外に 御幸なりけるふしぎさよ」

③(天)に言い換えたもの 5例

【巻第一章】 さて清盛	五十一のころ病におかされ、 存命も不定に見えたによつて、 その折りのためにか 出家入道して法名をば 浄海と名のられてござった。 天道からその所作を御納受なさるる しるしにか、 病もたちどころに平癒して、	人の従ひつくことはまことに吹く風の 草木を靡かすが如く	【巻第六章】 みだりがはしう法皇を 傾けさせられうずることは 天道の御内証にも そむき参らせられうず	民の為にはますます 撫育の哀憐をいたされば、 天命にかなはせられ、 天の御加護あらば、 君もおぼしめしなほすこと などござるまじいか？	【巻二第一〇章】 頼朝馬からとんでおりて甲をぬぎ、 手水鵜飼して都の方を 伏し拝うで、これは全く
【二句 参内上禄】 清盛	五十八ト申ニ病ニ侵サレ 忽チ出家入道シ法名 浄海トコソ名乗レケレ 其	故ニヤ 宿病立所ニ愈テ 天命ヲ全ウス 人ノ随ヒ付事吹風ノ 草木ヲ靡カスガ如シ	【一六句 大教訓】 猥ク君ヲ 傾ケマイラセ玉ハンコト 天照大神正八幡宮ノ神慮ニモ 背キナンズ	民ノ為ニハ益々 撫育ノ哀憐ヲ致サシメ玉ハ、 神明ノ加護ニモ預リ 仏陀ノ冥慮ニ背クヘカラス 神明仏陀ノ感応アラハ 君モ思召シ直ス事 ナドカ候ハサルヘキ	【四八句 富士川】 兵衛佐殿馬ヨリ下リ冑ヲ脱テ 手水嗽シテ王城之方ヲ 臥拜是ハ全ク
【二句 三台上禄】 かくて清盛、 仁安三年十一月十一日 歳五十一にて病に冒され、	たちまちに出家入道す。法名を 「浄海」とこそ名のられけれ。 その	しるしにや、 宿病たちどころに癒えて、 天命を全うす。 人のしたがりひつくこと、吹く風の 草木をなびかすがごとし。	【一六句 大教訓】 みだりがはしく君を かたぶけまゐらせ給はんこと、 天照大神、正八幡宮の神慮にも そむきなんず。	民のためにはますます 撫育の哀憐をいたさしめ給はば、 神明の加護にもあづかり、 仏陀の冥慮にそむくべからず。 神明仏陀の感応あらば、 君もおぼしめしなほすこと などか候はざるべき。	【四八句 富士川】 兵衛佐殿馬よりおり、兜をぬぎ、 手水うがひして、王城の方を ふし拝み、「これはまつたく
【巻一 禿髪】 かくて清盛公、 仁安三年十一月十一日、 年五十一にてやまひにかされ、 存命の 為に	忽に出家入道す。法名は 浄海とこそ名のられけれ。 其	しるしにや、 宿病たちどころにいへて、 天命を全うす。 人のしたがりひつく事、 吹風の草木をなびかすが如し。	【巻二 教訓状】 みだりがはしく法皇を 傾け奉らせ給はん事、 天照大神・正八幡宮の神慮にも 背候なんず。	民のためにはますます 撫育の哀憐をいたさせ給はば、 神明の加護にあづかり、 仏陀の冥慮にそむくべからず。 神明仏陀感応あらば、 君もおぼしめしなす事、 などか候はざるべき。	【巻五 五節之沙汰】 兵衛佐、馬よりおり、甲をぬぎ、 手水うがいをして、王城の方を ふしをがみ、「これはまゝたく

③(天)に言い換えたもの 5 換例		
頼朝が高名ではない… ひとへに天道の御計ひ ぢやと言うて、喜ばれた。 【巻三第一〇章】 豊後の国に代官の心になって ゐられた頼経といふ人のところへ、 京から お使ひがたつて 平家は 天道にも離され、 君にも捨てられまらして	頼朝力高名ニ非ス 偏ニ八幡大菩薩ノ御計 也トソ宣ヒケル ※欠巻	頼朝が高名にあらず。 ひとへに八幡大菩薩の御はからひ なり」とぞのたまひける。 【七三句 緒環】 子息頼経を豊後の国の代官に 下されけり。 刑部卿、頼経のもとに 脚力を下し給ひて、 「平家は宿報尽きて 神明にも放たれたてまつり、 君にも捨てられまゐらせて
平家は 神明にもはなれたてまつり、 君にも捨られまいらせて	頼朝がわたくしの高名にあらず。 八幡大菩薩の御はからひ なり」とぞの給ひける。 【巻八 緒環】 子息頼経朝臣を代官に をかれたり。 京より頼経のもとへ、 平家は	

【表8】〈天草本〉が〈天〉を増補する場合（2例）

用例数	1	2
〈天草本〉 【巻一第一〇章】 人の願ひをかなへさせられば、 天道これを御納受あつて、 御願もすなはち成就いたいて、 中宮やがて皇子御誕生なされて 家門の栄華もいよいよ 盛んにござらうずる	斯道文庫蔵百二十句本 【二二二句 大赦】 人ノ願ヲ叶サセ玉ハ、 御願モ必ス成就シ玉ヒ候ヘシ サランニ取テハ中宮王子誕生有テ 家門ノ栄花イヨク 開ケ候ヘシ 【六八句 法皇鞍馬落】	平仮名百二十句本 【二二二句 大赦】 人の願ひをかなへさせましまさば、 御願ひもすなはち成就して、 中宮御座平安に、皇子御誕生あつて、 家門の栄華はいよいよ さかんに候ふべし 【六八句 法皇鞍馬落ち】
覚一本 【巻三 赦文】 人の願ひをかなへさせ給はば、 御願もすなはち成就して、 中宮やがて皇子御誕生あゝて、 家門の栄花 弥さかむに候べし 【巻七 主上都落】	※該当箇所なし	※該当箇所なし

【表9】〈天草本〉で神仏が人間の運命を左右する例（2例）

用例数	〈天草本〉	斯道文庫蔵百二十句本	平仮名百二十句本	覚一本
1	【巻二第四章】 ここに宮入らせられたことは、 神仏の 御計いぢや。 比叡の山へも	【三五句 牒状】 爰ニ宮入御ノ事ハ 八幡大菩薩新羅大明神ノ 冥助ニ非スヤ 天神地類モ影向シ仏慮神力モ 降伏ヲ加ヘマシマサンコト ナジカハナカルヘキ 抑北嶺ハ円宗一味ノ	【三五句 牒状】 ここに、宮入御のことは、 正八幡大菩薩、新羅大明神の 冥助にあらずや。 天神地類も影向し、仏慮神力も 降伏をくはへましますこと なじかはなかるべき。 そもそも、北嶺は円宗一味の	【巻四 山門牒状】 宮こゝに入御の御事、 正八幡宮の衛護、新羅大明神の 冥助にあらずや。 天衆地類も影向をたれ、仏力神力も 降伏をくはへまします事 などかなかるべき。 抑北嶺は円宗一味の
2	【巻四第三章】 女院これはしかるべい、 仏のおすすめであらうず… 山里はものの寂しきことこそ	【一一五句 時忠能登下】 女院是ハ然ルヘキ 仏ノ御進ニテソ有ラン 山里ハ物ノ孤シキコトコソ	【一一五句 時忠能登下】 女院、「これは、しかるべき 仏の御すすめにてぞあらん。 山里は、もののさびしきことこそ	【灌頂巻 大原入】 「大原山のおく、寂光院と申 所こそ閑にさぶらへ」 と申ければ、 「山里は物のさびしき事こそ

【表10】〈天草本〉の〈天〉の用例（10例）

内容	〈天草本〉	斯道文庫蔵百二十句本	平仮名百二十句本	覚一本
例 と4 に在 衰存(天) 盛るの 家わて 平関し ①	【巻一第一章】 さて清盛 五十一のころ病におかされ、 存命も不定に見えたによつて、 その折りのためにか 出家入道して法名をば 浄海と名のられてござった。	【二句 参内上祿】 清盛 五十八ト申ニ病ニ侵サレ 忽チ出家入道シ法名 浄海トコソ名乗レケレ	【二句 三台上祿】 かくて清盛、 仁安三年十一月十一日 歳五十一にて病に冒され、 たちまちに出家入道す。法名を 「浄海」とこそ名のられけれ。	【巻一 禿髪】 かくて清盛公、 仁安三年十一月十一日、 年五十一にてやまひにかされ、 存命の 為に 忽に出家入道す。法名は 浄海とこそ名のられけれ。

① 平家盛衰に関わる存在としての(天) 4 例

天道からその所作を御納受なさるるしるしにか、 病もたちどころに平癒して、 人の従ひつくことはまことに吹く風の草木を靡かすが如く	【卷三第五章】 東国、北国の源氏はいかにもしづまらいで、気づかひをせられてござった。	【卷三第六章】 VM しても平家はいかう歩が悪かったの？ QI. まことに天道からはなされられたと、見えてござる。	【卷三第一〇章】 平家は 天道にも離され、 君にも捨てられまらして、 都を出て 波の上に落人となつて	【卷四第二一章】 悪行法に過ぎ、 天のせめのがれがたうて、 攻め奉れと 上命をかうむる上は、
其 故ニヤ 宿病立所ニ愈テ 天命ヲ全ウス 人ノ随ヒ付事吹風ノ 草木ヲ靡カ如シ	【六八句 法皇鞍馬落】	※該当部分なし	※欠巻	【一一一句 大臣殿之最後】 悪行法ニ過キ 天ノ責通レカタウメ 責奉レトノ 詔命ヲ蒙ル上ハ
その しるしにや、 宿病たちどころに癒えて、 天命を全うす。 人のしたがりひつくこと、吹く風の草木をなびかすがごとし。	【六八句 法皇鞍馬落ち】	※該当部分なし	【七三句 緒環】 平家は 宿報尽きて 神明にも放たれたてまつり、 君にも捨てられまゐらせて、 波の上にただよふ落人となれり。	【一一一句 大臣殿最後】 悪行法に過ぎ、 天の責のがれがたうして、 『攻めたてまつれ』との 詔命をかうぶるうへは、
其 しるしにや、 宿病たちどころにいへて、 天命を全す。 人のしたがりひつく事、吹風の草木をなびかすが如し。	【卷七 主上都落】	※該当部分なし	【卷八 緒環】 平家は 神明にもはなれたれまつり、 君にも捨られまいらせて、 帝都をいで、 浪の上にたゞよふおち人となれり。	【卷一一 大臣殿被斬】 朝敵となり給ひて追討すべき由 院宣を給はる間、 さのみ王地にはらまれて、

③ 道存 理在 やと 倫し 理て をの 象(天) 徴す る例	② 源氏 氏在 にと 2例 る(天)	
【巻一 第一章】 人の願ひをかなへさせられば、天道これを御納受あつて、御願もすなはち成就いたいて、中宮やがて皇子御誕生なされて	子細を申すに及ばず 【巻二 第一章】 頼朝馬からとんでおりて甲をぬぎ、手水鵜飼して都の方を伏し拝うで、これは全く頼朝が高名ではない…ひとへに天道の御計ひぢやと云うて、喜ばれた。 【巻四 第十六章】 これは義経に天の与ゆる文ぢや…頼朝に見せませうずる 【巻一 第六章】 みだりがはしう法皇を傾けさせられうずることは天道の御内証にもそむき参らせられうず…	
民の為にはますます撫育の哀憐をいたされば、天命にかなはせられ、天の御加護あらば、君もおぼしめしなほすことなどござるまじいか？ 【二二句 大赦】 人ノ願ヲ叶サセ玉ハ、御願モ必ス成就シ玉ヒ候ヘシサラニ取テハ中宮王子誕生有テ	子細ヲ申ニ所ナシ 【四八句 富士川】 兵衛佐殿馬ヨリ下リ胄ヲ脱テ手水嗽シテ王城之方ヲ臥拜是ハ全ク頼朝力高名ニ非ス偏ニ八幡大菩薩ノ御計也トソ宣ヒケル 【一〇一句 屋島】 是ハ義経ニ天ノ与ヘ玉ヘル也鎌倉殿ニ見セ奉ン 【一六句 大教訓】 猥ク君ヲ傾ケマイラセ玉ハンコト天照大神正八幡宮ノ神慮ニモ背キナンズ	
民のためにはますます撫育の哀憐をいたさしめ給はば、神明の加護にもあづかり、仏陀の冥慮にそむくべからず。神明仏陀の感応あらば、君もおぼしめしなほすことなどか候はざるべき。 【二二句 大赦】 人の願ひをかなへさせましまさば、御願ひもすなはち成就して、中宮御産平安に、皇子御誕生あつて、	子細申すところなし。 【四八句 富士川】 兵衛佐殿馬よりおり、兜をぬぎ、手水うがひして、王城の方をふし拝み、「これはまつたく頼朝が高名にあらず。ひとへに八幡大菩薩の御はからひなり」とぞのたまひける。 【一〇一句 屋島】 これは義経に天の与へ給へる文なり。鎌倉殿に見せたてまつらん 【一六句 大教訓】 みだりがはしく君をかたづけまゐらせ給はんこと、天照大神、正八幡宮の神慮にもそむきなんず。	
民のためにはますます撫育の哀憐をいたさせ給はば、神明の加護にあづかり、仏陀の冥慮にそむくべからず。神明仏陀感応あらば、君もおぼしめしなをす事、などか候はざるべき。 【巻三 赦文】 人の願ひをかなへさせ給はば、御願もすなはち成就して、中宮やがて皇子御誕生あつて、	詔命をそむくべきにあらねば、力不_レ及。 【巻五 五節之沙汰】 兵衛佐、馬よりおり、甲をぬぎ、手水うがいをして、王城の方をふしをがみ、「これはま_ゞたく頼朝がわたくしの高名にあらず。八幡大菩薩の御はからひなり」とぞの給ひける。 【巻一 勝浦付大坂越】 「是は義経に天のあたへ給ふ文なり。鎌倉殿へ見せ申さん」 【巻二 教訓状】 みだりがはしく法皇を傾け奉らせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背候なんず。	

	家門の榮華もいよいよ盛んにござらうずる	家門ノ榮花イヨク開ケ候ヘシ	家門の榮華はいよいよさかんに候ふべし	家門の榮花弥さかむに候べし
④ 例 ら1 文 物 書 引	【卷二第九章】 天の与ふるをとらざれば、 かへつてそのわざはひを受く、 時至つて行はざれば、 かへつてそのわざはひを受く といふ本文がござる。	【四六句 文学】 天ノ与フ不 _レ 執 還而受 _ニ 其殃 _一 時 _レ 到不 _レ 行 還而受 _ニ 其殃 _一 ト云本文アリ	【第四六句 文覚】 『天の与ふるを取らざれば、 かへつてそのわざはひを受く。 時至つておこなはざれば、 かへつてその咎を受く』 といふ本文あり。	【卷五 福原院宣】 「天のあたふるをとらざれば、 かへつて其とがをうく。 時いたしておこなはざれば、 かへつて其殃をうく といふ本文あり。

【表11】喜一検校による評価に副詞「まことに」を付加した例（15例）

※【表11】【表12】の凡例

・副詞「まことに」を付加した評価には傍線を付し、さらに「まことに」と係助詞は で囲った。また考察する上で注目したい箇所には波線を付した。

・考察に際して、例えば『平家物語』の「焉クトモナク洵レ行クコソ悲ケレ」（斯道文庫蔵百二十句本の一〇三句「讒言梶原」）を、〈天草本〉が「いづくともなう、揺られゆかせられたはまことにいたはい儀ぢや」（巻四第一八章）とするように、それぞれ評価の語が異なっている場合は、『平家物語』の評価そのものを「まことにくだ」という意味として捉えたとも考えられるため、考察の対象から外した。

また付加の内、〈天草本〉巻三第三章の木曾義仲への「まことに木曾が悪行は平家のおごつた時のしわざにはるかました」と、巻四第二章の生け捕りにされた重衡への「まことにあはれにござつた」については、その評価に直接関わる義仲による卿相雲客四九人の官職停止事件（平仮名百二十句本の八〇句「義経熱田の陣」、寛一本の巻八「法住寺合戦」）や、「冥途ニテ娑婆世界ノ罪人ヲ七日々々二十王ノ手ニ渡スランモ此クヤト覚ヘテ」（斯道文庫蔵百二十句本の九四句「重衡東下」という文を省略していることから、それらを受けて付加したとも考え得るため、同様に考察の対象から外した。

内容	「天草本」	斯道文庫蔵百二十句本	平仮名百二十句本	寛一本
【巻一第五章】 これを限りでまた 御覧ぜられぬこともや あらうずる	【巻一第五章】 これを限りでまた 御覧ぜられぬこともや あらうずる	【一五句 平宰相請受】 是ヤ限ニテ 有ンスラン 末代コソ心憂ケレ ト仰ケル フ	【一五句 平宰相、少将乞ひ請くる事】 「これがかぎりにて、 御覧ぜられぬこともや あらんずらん」	【巻二少将乞請】 これかぎりで又 御覧ぜぬ事もや あらむずらん
とて、おん涙を流させられたと申す。 【まことに】これは少将の上にとつては かたじけなひ儀でござつた。	とて、おん涙を流させられたと申す。 【まことに】これは少将の上にとつては かたじけなひ儀でござつた。	忝キ 【一九句 成親死去】 若君姫君モ（中略）父ノ 後世ヲ吊ヒ玉フ フ	【一九句 成親死去】 若君、姫君も（中略）父の 後世をとぶらひ給ふ ぞ あはれなる。	【巻二大納言死去】 おさなき人々も（中略）父の 後世をとぶらひ給ふ ぞ 哀なる。
【巻一第二章】 昔は（中略）四五百人ほどの 所従、眷属どもに用ひられて こそ過ぎられたに、 まのあたりにこのやうな	【巻一第二章】 昔は（中略）四五百人ほどの 所従、眷属どもに用ひられて こそ過ぎられたに、 まのあたりにこのやうな	【二六句 有王島下】 昔ハ（中略）多ノ 所従眷属ニ囲遶セラレテ コソヲワセシニ 今ハカハル	【二六句 有王島下り】 「むかしは（中略）四五百人の 所従眷属に囲遶せられてこそ おはせしに、 まのあたりにかかる	【巻三有王】 昔は（中略）四五百人の 所従眷属に囲遶せられてこそ おはせしか。 まのあたりかゝる

係り結びあり＋「まことに」を付加 11例

憂き目を見らるることは、 まことに不思議ぢや。	憂目ニ逢ハレテゲルコソ 痛シケレ (中略) 信施無懺ノ罪ニ依テ 今生ニ早ヤ果レケルトン 覺ヘタル	憂きめを見給ひけるこそ 不思議なれ。 (中略) 信施無懺の罪により、 はや、今生にて感ぜられにけり」と 見えたりける。	うきめを見給ひけるこそ ふしぎなれ。 (中略) 信施無懺の罪によつて、 今生に感ぜられけりとぞ みえたりける。
【巻二第一章】 妓王(中略)親の命を そむくまいとて、泣く泣くまた 出立つ心のうちは まことに無慚な。	【三句 義王】 義王(中略)ヲヤノ命ヲ 背カシト泣々又 出立ケル心ノ中コソ 無慚ナレ	【五句 義王】 義王(中略)親の命を そむかじと、泣く泣く 出でたちける心のうちこそ 無慚なれ。	【巻一 祇王】 祇王(中略)おやのめいを そむかじと、なくく又 出立ける心のうちこそ むざんなれ。
妹の妓女もこれを見て、 (中略)十九で様をかへて (中略)後生を願うたは、 まことにあはれなことぢや。	【四句 義王出家】 妹ノ義女モ (中略)十九ト申ニ様ヲカヘ (中略)後世ヲネガウ 哀レナル	【六句 義王出家】 妹の義女も (中略)十九にて様をかへ (中略)後世をねがふ あはれなる。	いもうとのぎによも (中略)十九にてさまをかへ、 (中略)後世をねがふ あはれなる。
【巻二第八章】 頼政は伊豆の国をくだされて (中略)さてあらうずる人が よいしないことを思ひ企てて、 わが身も、子孫も 滅びられたことは、 まことにあさましい次第で ござった。	【四〇句 鵜】 頼政ハ伊豆国ヲ賜テ (中略)サテ有ヘキ人ノ 由シナキコトヲ思ヒ企テ 我身モ子孫モ 滅ヒヌルコソ アサマシケレ	【四〇句 鵜】 頼政は、伊豆の国を賜はつて (中略)さてあるべき人の、 よしなき事を思ひくはだて、 わが身も子孫も ほろびぬるこそ あさましけれ。	【巻四 鵜】 其後伊豆国給はり (中略)さておはすべかりし人の、 よしなき謀叛おこいて、 宮をもうしなひまいらせ、 我身も ほろびぬるこそ うたてけれ。
【巻四第二章】 平家はただいつとなう氷に とぢられた心地して、 寒苦鳥に異ならぬ様体どもで、 古へ都において	【八一句 宇治川】 平家ハ只イツトナク氷ニ 閉ラレタル心地メ 寒苦鳥ニコトナラス 東岸西岸ノ柳交ニ遅速 南枝北枝梅開落已	【八一句 宇治川】 平家はただいつとなく氷に 閉ぢられたる心地して、 寒苦鳥にことならず。 東岸西岸の柳遅速をまじへ、 南枝北枝の梅開落すでに	【巻九 生ずきの沙汰】 平家の人々は、いつも氷に とぢこめられたる心地して、 寒苦鳥にことならず。 東岸西岸の柳遅速をまじへ、 南枝北枝梅開落已に

係り結びあり＋「まことに」を付加 11例

月花を見（中略） 遊びたはむれられたことどもを 思ひ出いて、語りなどして 長い日を暮しかねられた有様は まことにあはれにござつた と、きこえてござる。	異ニメ 花ノ朝月ノ夕（中略） 興有リシ事トモ 思出テ語り出シ 永キ日ヲ暮シカネ玉フコソ 悲ケレ
【巻四第三章】 往生院とは聞いたれども、 さだかに所を 知らなんだれば（中略） たづねかねたことは まことに無慚なことぢや。	【九五句 横笛】 往生院トハ聞タレトモ 定カナル処ヲ 知サリケレハ（中略） 尋カヌル 無慚ナル
【巻四第四章】 三位の中將は 雪山に鳴く鳥のやうに、 けふよあすよと ものを思ふことよとあつて、 涙にむせばせらるる体 まことにいとほしいことぢや。	【九七句 維盛出家】 維盛カ身ハ 雪山ニ鳴ラン鳥ノヤウニ 今日ヨ明日ヨト 物ヲ思フ事ヨトテ 涙ニ咽給フ 慈キ
【巻四第五章】 朝にvari、夕にvariする 世の中の不定なことは、 まことに口惜しい儀ぢや。	【一一七句 義経都落】 朝ニ替リ夕ニ変ル 世間ノ不定 口惜ケレ
【巻四第六章】 謀叛おこさば、さだめて方人を せう聖ぢや…ただし頼朝が 一期の間はいかでか傾けうぞ？ 子どもの末は知らずと おほせられたことは、 まことにおそろしい儀ぢや。	【一一八句 六代】 謀叛発サハ定テ方人 セン聖ナリ但頼朝カ 一期ノ間ハ争カ傾クヘキ 子共ノ末ハ知スト 宣ケル 怖シキ
【九五句 横笛】 「往生院」とは聞きたれども、 さだかなる所を 知らざりければ（中略） たづねかねる 無慚なる。	【九五句 横笛】 「往生院」とは聞きたれども、 さだかなる所を 知らざりければ（中略） たづねかねる 無慚なる。
【九七句 維盛出家】 「維盛が身は 雪山の鳥の鳴くらん様に 『今日よ、明日よ』と 物を思ふことよ」とて 涙にむせば給ふ いとほしき。	【一一七句 義経都落ち】 朝にかはり、夕にvariする 世の中の不定 口惜しけれ。
【巻一〇 横笛】 往生院とはきゝたれども、 さだかにいづれの房とも しらざれば（中略） たづねかねる むざんなる。	【巻一〇 横笛】 往生院とはきゝたれども、 さだかにいづれの房とも しらざれば（中略） たづねかねる むざんなる。
【巻一二 判官都落】 朝にかはり夕にvariする 世間の不定 哀なれ。	【巻一二 六代被斬】 「謀反おこさばやがてかたうど せうずる聖の御房也。但頼朝 一期の程は誰か傾べき。 子孫のすゑぞしらぬ」と の給ひける おそろしけれ。

係り結びなし + 「まことに」を付加 4 例

【巻一第四章】 さてもけさはかぎりとしらざりけるかなしきよ」とて、 伏しまろびて泣かれた。 (中略) またこととふ人も なうておちやらうずる。北の方の 心のうち	まことにあはれなことでござる。(中略) 夜の間にかはるる体	【巻一第七章】 熊野詣、天王寺詣、 などには(中略) つぎの船 二三十艘も漕ぎつづけてこそ あつたに、 今は尋常の屋形舟に 大幕をひいて(中略) けふを かぎりに都をいでて、 波路はるかにおもむかれた 心のうち おしはかられて、 まことにあはれな。	【巻一第八章】 菱につらぬかれて、 つひに果てられたと、申す… まことにむげにうたてい
【一五句 平宰相請受】 サテモケサヲカキリト 思ハサリケル悲サヨトテ 宛転テソ泣玉フ (中略) 又事間人モ ナクテワヲシケリ北方ノ 心ノ中 推シ量ラレテ 哀也(中略)	夜ノ間ニカワルアリサマ 盛者必衰ノ理ハ 目ノ前ニこそ顯レケレ 樂尽悲来ト 書タル江相公ノ筆ノ迹 思ヒシラレテ哀也	【一七句 成親流罪】 熊野詣天王寺詣ノ 有シニハ(中略) 次ノ船 二三十艘漕続サセ サコソ目出タウヲワセシニ 今ハ有気色昇居屋形ノ舟ニ 大幕引廻サセ(中略) 今日ヲ 限ニ都ノ内ヲ出玉イケン 心ノ中 悲シケレ	【一九句 成親死去】 又ニ貫キ奉テ 失ヒ玉ヒケルトソ聞ヘケル
【一五句 平宰相・少将乞ひ請くる事】 さても今朝をかぎりとしらざりけるかなしきよ」とて、 ふしまろびて泣き給ふ。 (中略) またこととふ人も なくてぞおはしける。北の方の 心のうち、 おしはかられて あはれなり。(中略)	夜の間にかはるるありさまは、 「生者必滅」のことはりは 目の前にこそあらはれけれ。 「樂しみ尽きて、悲しみ来る」と 江相公の筆のあと、 思ひ知られてあはれなり。	【一七句 成親流罪・少将流罪】 熊野詣、天王寺詣の ありしには(中略) 次の舟 二三十艘漕ぎつづかせ、 さこそめでたうおはせしに、 今はけしかるる屋形の舟に、 大幕ひきまはさせ(中略) 今日を かぎりに都のうちを出で給ふ、 心のうち かなしけれ。	【一九句 成親死去】 貫かれてぞ 失せ給ひける。
【巻二小教訓】 さてもけさはかぎりとしらざりけるかなしきよ」とて、 ふしまろびて泣かれける。 (中略) 又事とふ人も なくしておはしけん北方の 心のうち、 をしはかられて 哀也。(中略)	夜の間にかはるるありさま、 盛者必衰の理は 目前にこそ顯れけれ。 樂つぎて悲来ると がれたる江相公の筆のあと、 今こそ思ひられけれ。	【巻二大納言流罪】 熊野まうで、天王寺詣 などには(中略) 次の舟 二三十艘漕ぎつづけてこそ ありしに、 今はけしかるる屋形舟に 大幕ひかせ(中略) けふを かぎりに都を出で、 浪路はるかにおもむかれけむ 心のうち、 おしはかられて 哀也。	【巻二大納言死去】 ひしにつらぬかて うせ給ひぬ。 無下にうたてき

十を し」 な例 びと4 結こ りま加 係「付	ことどもでござる。 【巻三第六章】 朝敵となられたうへは、 子細には及ばねども、 これほどの作者を読人知らず と書かれたことは、 まことにその身にとつては 口惜しいこととござる。	【六八句 法皇鞍馬落】 朝敵ト成シ上ハ 子細ニ及ハストハ云ヒナカラ 口惜シカリシ事トモナリ	【六八句 法皇鞍馬落ち】 朝敵となりしうへは、 子細に及ばずとはいひながら、 口惜しかりしことどもなり。	【巻七 忠度都落】 朝敵となりにし上は、 子細にをよばずといひながら、 うらめしかりし事共也。
---	--	--	---	--

【表12】『平家物語』は係り結びだが、喜一検校による評価に副詞「まことに」を付加しなかった例（9例）

内容	例	天草本	斯道文庫蔵百二十句本	平仮名百二十句本	覚一本
2 る類 十すの り摘換 あ指転 びがの 結氏文 り川構 係中㊟	【巻一第二章】 奈良の法華寺といふ寺に 行ひすまいて、父母の後世を とむらはれたと、申す。 あはれや有王は俊寛僧都の 遺骨を	【二六句 有王島下】 奈良ノ法花寺ニ 行ヒ澄メ父母ノ後世 吊玉フ㊟ 哀レナル有王モ執行ノ 遺骨	【二六句 有王島下り】 奈良の法華寺に おこなひすまして、父母の後世を とぶらひ給ふ㊟ あはれなる。有王は俊寛僧都の 遺骨を	【巻三 僧都死去】 奈良の法華寺に 勤すまして、父母の後世を 訪ひ給ふ㊟ 哀なる。有王は俊寛僧都の 遺骨を	
「化 詞在外 助顕例 格をた	【巻二第六章】 三位入道殿 げにもと言うて（中略） 高声に念仏を申された 最後の様体が あはれにござる。	【三八句 頼政最後】 入道 誠ニモトテ（中略） 高声ニ念仏シ玉ヒテ 最後ノコト㊟ 哀ナレ	【三八句 頼政最後】 入道、 「げにも」とて（中略） 高声に念仏し給ひて、 最後の言㊟ あはれなれ。	【巻四 宮御最期】 「まことに」とて（中略） 高声に十念となへ、 最後の詞㊟ あはれなる。	

中川氏が指摘する㊦㊩㊪の類に該当しない例外					5 例
【巻二第七章】 いま五十町ばかりを待ちつけ させられいで討たれさせられた 宮の御運のほどが うたてい。	【三九句 高倉宮最後】 今五十町ハカリヲ待ツケ サセ玉ハテ討レサセ玉ヘル 宮ノ御運ノ程コソ 憂ケレ	【三九句 高倉の宮最後】 いま五十町ばかりを待ちつけ させ給はで討たれさせ給へる 宮の御運のほどこそ うたてけれ。	【巻四 宮御最期】 いま五十町ばかりまちつけ 給はで、うたれさせ給けん 宮の御運のほどこそ うたてけれ。	【巻四第二〇章】 介錯の女房さへ 身を投げたは ありがたいことぢや。	
【巻四第二一章】 夷が住む千島なりともと おほせられたは、 口惜しいことぢや。	【二一一句 大臣殿之最後】 夷スカ棲ムナル千嶋ナリトモト 宣ケルコソ 慈キ	【二一一句 大臣殿最後】 えびすが住むる夷が千島なりともと のたまひけるぞ、 いとほしき。	【巻一一 腰越】 「たとひゑぞが千嶋なりとも、 甲斐なき命だにあらば」と の給ひけるこそ 口惜けれ。	身ヲ投ケルコソ 有ガタケレ	
大臣殿あなほつて畏まつて 聞かれたは 口惜しいことぢや。	大臣殿居直テ畏テ 聞レケルコソ 口惜ケレ	大臣殿、居直りて、かしこまつて 聞かれけるこそ 口惜しけれ。	【巻一一 大臣殿被斬】 あなをり畏り 給ひけるこそ うたてけれ。	【二一〇句 副将】 解釈ノ女房サヘ 身ヲ投ケルコソ	
【巻四第二六章】 平家の子孫 たづね出さう人は何ごとも 望みのままにあらうずると 披露したれば（中略） たづね求むることは うたてい	【二一八句 六代】 平家ノ子孫 尋出タラン人ハ何事モ 望ノ俣タルヘシト 披露シケレハ（中略） 尋求ケルコソ 憂ケレ	【二一八句 六代】 「平家の子孫 尋ね出したらん人は、何ごとも 望みのままたるべし」と、 披露しければ（中略） 尋ねもとめけるこそ うたてけれ。	【巻一二 六代】 「平家の子孫といはん人 尋出したらん輩にをいては、 所望こふによるべし」と 披露せらる。（中略） 尋もとむるぞ うたてき。	【二一〇句 副将】 介錯の女房さへ 身を投げけるこそ ありがたけれ。	
【巻一第九章】 さても千本までつくった 卒塔婆ぢやほどに（中略） はるばると都まで 伝はったことは、 不思議ぢや。	【二一八句 鬼海島】 サテモ千本ニ及ヒ作タル 卒都婆ナレハ（中略） 遑ト 伝ケルコソ 不思議ナレ	【二一八句 三人鬼界が島に流さるる事】 千本におよび作りたる 卒都婆なれば（中略） はるばると 伝はりけるこそ 不思議なれ。	【巻二 蘇武】 さても千本まで作りたりける 卒都婆なれば（中略） はるばると都まで つたはりけるこそ ふしぎなれ。	【二一〇句 副将】 かいしやくの女房さへ 身をなげけるこそ ありがたけれ。	

【表13】〈天草本〉が採録した「前兆」、經典の文句、天孫の記述（3例）

※【表13】～【表16】の凡例

・「前兆」、經典の文句、天孫の記述の箇所には傍線を、また考察する上で注目したい箇所には波線を付した。
 ・【表13】と【表16】の凡例
 ・「前兆」と「拔書」が章段全体を省略する場合、「前兆」等を含む一つのエピソード全体を省略する場合（ex鹿谷事件の前兆等を含む左大将をめぐる貴族たちの動きの省略）、また「天草本」が主要人物以外（※撰政）にまつわる記事を省略する場合は、それが物語の展開上不要とされたとも考え得るため、考察の対象から外した。

内容	例 1	「関係前関」	① 神	例 1	「兆他前のそ」	句文の典経
「天草本」	熊野参詣の時（中略） 浄衣の下に浅黄の帷子をき、 この川で水を戯れたに、 われらがきた浄衣が みな色の姿に見えたを （中略）重盛御覧ぜられて （中略）同じ五月二十八日から 悪瘡をわづらはせられて、 同じ八月のついたちに おかくれあつたが	熊野参詣ノ時（中略） 浄衣ノ下ニ浅黄ノ帷ヲ着 此川ニテ水ヲ戯シニ 我等力着タリシ浄衣 皆ナ色ノ姿ニテ見ヘシヲ （中略）大臣殿御覧メ （中略）同五月廿八日ヨリ 悪瘡煩セ玉ヒテ 同八月一日 隠サセ玉ヒヌ	熊野参詣のとき（中略） 浄衣の下に浅葱の帷子を着、 この川にて水をたはぶれしに、 われらが着たりし浄衣、 みな色のすがたにて見えしを （中略）大臣、御覧じて （中略）同じく五月二十八日より、 悪瘡わづらはせ給ひて、 同じき八月一日 かくれさせ給ひぬ。	【巻一〇 熊野参詣】 ※該当箇所なし	【巻一第六章】 重盛涙をおさへて 申さるるは… このおほせを承るに御運は はや末になつたと存ずる… 人の運命の傾かうとは、 かならず悪事を思ひたつ ものでござる。	【巻四第二章】 帝王の怨敵を滅ぼした者には 半国をくださると 無量義経に見えた…されども わが朝にはその例ないに
新道文庫蔵百二十句本	熊野参詣ノ時（中略） 浄衣ノ下ニ浅黄ノ帷ヲ着 此川ニテ水ヲ戯シニ 我等力着タリシ浄衣 皆ナ色ノ姿ニテ見ヘシヲ （中略）大臣殿御覧メ （中略）同五月廿八日ヨリ 悪瘡煩セ玉ヒテ 同八月一日 隠サセ玉ヒヌ	熊野参詣のとき（中略） 浄衣の下に浅葱の帷子を着、 この川にて水をたはぶれしに、 われらが着たりし浄衣、 みな色のすがたにて見えしを （中略）大臣、御覧じて （中略）同じく五月二十八日より、 悪瘡わづらはせ給ひて、 同じき八月一日 かくれさせ給ひぬ。	【巻一〇 熊野参詣】 ※該当箇所なし	【一六句 大教訓】 大臣ナミタヲ押拭ヒテ 申サレケルハ、 此ノ仰ヲ承候ニ御運ハ 早ヤ末ニナリヌト覺ヘ候 人ノ運命ノ傾ントテハ 必悪事ヲ思立 候也	【一六句 大教訓】 大臣涙をおしのごひて 申されけるは、 「この仰せを承り候ふに、御運は はや末になりぬとおぼえ候。 人の運命のかたぶかんとては、 かならず悪事を思ひたち 候ふなり。」	【一七七句 義経都落】 帝皇怨敵ヲ亡ツル者ハ 半国ヲ賜フト云コト 無量義経ニ見ヘタリ去レトモ 未吾朝ニハ其例ナシ
平仮名百二十句本	熊野参詣のとき（中略） 浄衣の下に浅葱の帷子を着、 この川にて水をたはぶれしに、 われらが着たりし浄衣、 みな色のすがたにて見えしを （中略）大臣、御覧じて （中略）同じく五月二十八日より、 悪瘡わづらはせ給ひて、 同じき八月一日 かくれさせ給ひぬ。	熊野参詣のとき（中略） 浄衣の下に浅葱の帷子を着、 この川にて水をたはぶれしに、 われらが着たりし浄衣、 みな色のすがたにて見えしを （中略）大臣、御覧じて （中略）同じく五月二十八日より、 悪瘡わづらはせ給ひて、 同じき八月一日 かくれさせ給ひぬ。	【巻一〇 熊野参詣】 ※該当箇所なし	【一六句 大教訓】 大臣涙をおしのごひて 申されけるは、 「この仰せを承り候ふに、御運は はや末になりぬとおぼえ候。 人の運命のかたぶかんとては、 かならず悪事を思ひたち 候ふなり。」	【一六句 大教訓】 大臣涙をおしのごひて 申されけるは、 「この仰せを承り候ふに、御運は はや末になりぬとおぼえ候。 人の運命のかたぶかんとては、 かならず悪事を思ひたち 候ふなり。」	【一七七句 義経都落ち】 『帝王の怨敵を滅ぼしつる者は 半国を賜ふ』といふこと、 無量義経に見えたり。されども、 いまだわが朝にその例なし。
寛一本	【巻一〇 熊野参詣】 ※該当箇所なし	【巻一〇 熊野参詣】 ※該当箇所なし	【巻一〇 熊野参詣】 ※該当箇所なし	【巻二 教訓状】 おとゝ涙をおさへて 申されけるは、 「此仰承候に、御運は はや末に成ぬと覺候。 人の運命の傾かんとては、 必悪事を思ひ立 候也。」	【巻二 教訓状】 おとゝ涙をおさへて 申されけるは、 「此仰承候に、御運は はや末に成ぬと覺候。 人の運命の傾かんとては、 必悪事を思ひ立 候也。」	【巻一二 吉田大納言の沙汰】 朝の怨敵をほろぼしたるものは、 半国を給はるといふ事、 無量義経に見えたり。され共 我朝にはいまだ其例なし。

【表14】「天草本」が省略した「前兆」、經典の文句、天孫の記述（16例）

内容	「天草本」	斯道文庫蔵百二十句本	平仮名百二十句本	寛一本
「前兆」①神仏関係 7例	【巻一第一章】 清盛 家督を受けとられてより、 右に申したごとく、威勢、位も 肩をならぶる人もござなかつた。	【二句 参内上縁】 清盛嫡男タルニ依テ 其跡ヲ継ク（中略） 一天四海ヲ掌ノ中ニ 奉リ給シ上ハ子細ニヤ及フ 此様平家ノ 繁昌シケルコトハ 熊野権現ノ御利生トソ聞シ 其故ハ清盛公未 為レ安芸守時（中略） 乗レ船熊野ヘ詣ラレケルニ 海中ニテ大ナル鱸ノ舟ニ 飛イリタリケルヲ先達申ケルハ 昔周武王ノ船ニコソ 白魚ハ踊入タレ 是只事ニ非スマイルヘシト申 （中略）自調味シ 我身食 家子郎従トモニモ 食セラレタリケル故ニコソ 吉事ノミ打続テ 子孫官トモ龍ノ雲ニノホルヨリモ ナラスミヤカナリ 九代ノ先蹤ヲ越給コソ 目出度ケレ	【二句 三台上縁】 清盛嫡男たるによつて、 そのあとを継ぐ。（中略） 一天四海をたなごころに にぎり給ふうへは、子細におよばず。 そもそも、平家かやうに 繁昌せられけることを、いかにといふに 熊野権現の御利生にてぞありける。 そのゆゑは、清盛いまだ 安芸守にておはせしとき（中略） 船にて熊野へ参られけるに、 大きな鱸の、船にをどり 入りたりけるを、先達申しけるは、 「むかし、周の武王の船にこそ 白魚はをどり入りて候ひしか。 これをば参るべし」と申されければ （中略）みづから調味して、 わが身食ひ、 家の子、郎等どもにも 食はせられけるゆゑにや、 子孫官途も龍の雲にのぼるよりも なほすみやかなり。 九代の先蹤越え給ふこそ めでたけれ。	【巻一 鱸】 清盛嫡男たるによつて、 其跡をつぐ。（中略） 一天四海を掌の内に にぎられしうへは、子細に及ばず。 平家か様に 繁昌せられけるも、 熊野権現の御利生とぞきこへし。 其故は、古へ清盛公いまだ 安芸守たりし時（中略） 船にて熊野へまいられけるに、 おほきなる鱸の船に踊 入たりけるを、先達申けるは、 「（中略）昔、周の武王の船にこそ 白魚は躍入たりけるなれ。 是吉事なり」とて （中略）調味して 家子侍共に くはせられけり。其故にや、 吉事のみうちつゞいて、 太政大臣まできはめ給へり。 子孫の官途も龍の雲に昇るよりは 猶すみやかなり。 九代の先蹤をこえ給ふこそ 目出けれ。 【巻一 禿髪】

「前兆」① 神仏関係 7 例

さて清盛	此テ仁安三年 ※行間に書き込まれている。	かくて清盛、	かくて清盛公
【巻一 第九章】 都へ帰るやうにと祈られた。	【一八句 鬼海島】 帰落ノコトヲソ祈ラレケル (中略) 夢トモナク幻トモナキニ (中略) 女房ノ五六人御前ニ 詣テ世ニモ面白キ声ニテ 万ノ仏ノ願ヨリモ 千手ノ誓ソ憑モシキ 枯タル草木モ忽ニ 花咲実トコソ聞ケ ト二三返歌ヒ澄メ 搔消スヤウニ失ニケリ (中略) 千手ノ廿八部衆ノ中ニ 海竜神其ノ一ツ也 サレハ竜女ノ化現シテモヤ有ラン 或時 (中略) 二人カ袖ニ 木ノ葉ヲ一ツ充吹キ懸タリ (中略) 憑ヲ懸ル御熊野ノ 南木葉ニテソ有ケル ムシクイ (注、御十虫) アリ 是ヲ一首ノ歌ニソ読ナシタル チハヤフル神ニ祈ノシゲ、レハ ナドカ都ヘカヘラサルヘキ 返タモ目出カリケル 事共ナリ 判官入道	【一八句 三人鬼界が島に流さるる事】 帰落のことをぞ祈られける。 (中略) 夢ともなく現ともなきに (中略) 女房の五六人、御前に 参りて、世にもおもしろき声にて、 よろづの仏の願よりも 千手の誓ぞたのもしき 枯れたる木にもたちまちに 花咲き実なるとは聞け と二三返歌ひすまして、 かき消すやうに失せにけり。 (中略) 千手の二十八部衆のうちに、 海龍神、その一つなり。 されば龍女の化現にてもやあらん あるとき (中略) 二人が袖に 木の葉一つづつ吹きかけたり。 (中略) たのみをかくる御熊野の 南木の葉にてぞありける。 虫くひあり、 これを一首の歌にぞよみなしたる。 ちはやぶる神に祈りのしげければ などか都へかへさざるべき かへすがへすも、めでたかりける 事どもなり。 判官入道	【巻二 康頼祝言】 帰落の事をぞ祈ける (後略)。 【巻二 卒都婆流】 (前略) 康頼入道ちと まどろみたる夢に (中略) 女房達二十三人 あがり、鼓をうち、こゑを調て、 よろづの佛の願よりも 千手の誓ぞたのもしき 枯たる草木も忽に 花さき実なるとこそきけ と三べんうたひすまして、 かきけつやうにぞうせにける。 (中略) 是は龍神の化現とおぼえたり 又或夜 (中略) 二人が袂に 木の葉をふたつふきかけたりけるを (中略) 御熊野の 南木の葉にてぞ有ける。 彼二の南木の葉に、 一首の歌を 虫ぐひにこそしたりけれ。 千はやぶる神にいのりのしげければ などか都へ帰らざるべき 康頼入道

「前兆」① 神仏関係 7 例

【巻三第三章】 兵がこれを見て、文武ともに 達者ぢやと言うてほめた。		さうして源氏も、平家も 【巻三第九章】 さても四の宮をも つれまらして 下らうずるものと 後悔をしたれども、益もなかった。
【六三句 木曾願書】 数千ノ兵是ヲ見文武共ノ 達者カナトソ讃タリケル (中略) 八幡大菩薩 真実志ノ二ツ無キヲヤ 遙ニ照覽シ玉ヒケン 雲中ヨリ鳩二ツ飛来テ 源氏ノ白旗ノ上ニ翻翻ス (中略) 昔シ神功皇后新羅ヲ 攻玉ヒシニ	源平 靈鳩 明天ニ顯レ 軍ニ勝コトヲ得玉ヘリ(中略) 靈鳩ヲ拝シ玉ヒケン 心ノ中コソ憑シケレ	※欠巻
【六三句 木曾の願書】 数千の兵これを見て、「文武の 達者かな」とぞほめたりける。 (中略) 八幡大菩薩、 真実の心ざしの二つなきをや、 はるかに照覽し給ひけん、 雲のうちより山鳩二つ飛び来たつて、 源氏の白旗のうへに翻翻す。 (中略) 昔、神功皇后、新羅を 攻め給ひしに、	源平 靈鳩 明天にあらはれ、 軍に勝つことを得給へり。(中略) 靈鳩を拝し給ひけん、 心のうちこそたのもしけれ。	【七二句 宇佐詣で】 三の宮をも 取りたてまつりて 下りまぬらすべきものを」と 後悔せられければ(中略) まづ宇佐の宮へ 行幸なる。(中略) 七日御参籠の あかつき、大臣殿 御夢想の告げありける。 御宝殿の御戸押し開き、
【巻七 願書】 あゞばれ文武二道の 達者かなとぞ見えたりける。 (中略) 大菩薩 真実の志ふたつなきをや 遙に照覽し給ひけん。 雲のなかより山鳩三飛来して、 源氏の白旗の上に翻翻す。 昔神功皇后新羅を 攻させ給ひしに(中略) 皇后天に御祈誓ありしかば、 靈鳩三飛来て、 楯の面にあらはれて、 異国のいくさ破にけり。(中略) いま靈鳩を拝し給ひけん 心のうちこそたのもしけれ。	【巻七 俱梨迦羅落】 さる程に、源平両方 【巻八 名虎】 三の宮をも四の宮をも とりまいらせて、 落くだるべかりし物を」と 後悔せられければ(後略)。	【巻八 緒環】 (前略) まづ宇佐宮へ 行幸なる。(中略) 七日参籠の あけがたに、大臣殿の御ために 夢想の告ぞありける。 御宝殿の御戸をしひらき

「前兆」① 神仏関係 7 例

さうしてあなたこなたとあかし暮さるところに	【巻四第十八章】 六日の菖蒲会にはあはぬ、花ののちの葵かななどと申した。 さて義経は 周防の地におし渡つて（中略） はじめは平家 そつと勝色にあつたれども
※欠巻	【一〇三句 讒言梶原】 六日ノ菖蒲会ニアハヌ花ノ後ノ葵カナンド、ソ申シケル其比 住吉ノ神主長守（中略） 去十六日又剋二 当社第三ノ神殿ヨリ鐺ノ音出テ西ヲ指メ行ヌト奏聞ス（中略） 今又朝ノ怨敵ヲ亡ホシ玉フヘキヤト 憑シカリケルコト共也 判官 周防ノ地ニ推渡テ（後略） 【一〇四句 壇浦】 平家ハ是ヲ見御方既ニ勝ヌトテ
ゆゆしくけだかげなる御声にて、世の中うさには神のなきものをなに祈るらん心づくしに（後略）。 【七三句 緒環】 さるほどに、九月十日あまりにぞなりにける。 【一〇三句 讒言梶原】 「六日の菖蒲、会にはあはぬ花、祭ののちの葵かな」 などとぞ申しける。 そのころ、 住吉の神主長盛、（中略） 「去んぬる十六日丑の刻に、当社第三の神殿より鐺の声出でて、西をさして行きぬ」と奏聞す。（中略） 今また朝の怨敵を滅ぼし給ふべき」と、 たのもしかりける事どもなり。 判官、 周防の地におし渡つて（後略）。 【一〇四句 壇の浦】 （前略）平家はこれを見、「御方すでに勝ちぬ」とて	【一〇三句 讒言梶原】 六日ノ菖蒲、会にはあはぬ花、いさかひはててのちぎりきかな」とぞわらひける。 判官都をたち給ひて後、 住吉の神主長盛（中略） 「去十六日丑剋に、当社第三の神殿より鐺矢の声いでて、西をさして罷候ぬ」と申ければ（中略） いまも朝の怨敵をほろぼし給べきにやと、 君も臣も たのもしうぞおぼしめされける。 【巻一一 鶏合壇浦合戦】 さる程に、九郎大夫判官義経、周防の地におしわたつて（中略） 平家 みかた勝ぬとて 【巻一一 遠矢】
ゆゑしくけだかげなる御声にて、世のなかのうさには神のなきものをなにいのらん心づくしに（中略） さる程に九月も十日あまりになりにけり。 【巻一一 志度合戦】 六日の菖蒲、いさかひはててのちぎりきかな」とぞわらひける。 判官都をたち給ひて後、 住吉の神主長盛（中略） 「去十六日丑剋に、当社第三の神殿より鐺矢の声いでて、西をさして罷候ぬ」と申ければ（中略） いまも朝の怨敵をほろぼし給べきにやと、 君も臣も たのもしうぞおぼしめされける。 【巻一一 鶏合壇浦合戦】 さる程に、九郎大夫判官義経、周防の地におしわたつて（中略） 平家 みかた勝ぬとて 【巻一一 遠矢】	【巻一一 志度合戦】 六日ノ菖蒲、いさかひはててのちぎりきかな」とぞわらひける。 判官都をたち給ひて後、 住吉の神主長盛（中略） 「去十六日丑剋に、当社第三の神殿より鐺矢の声いでて、西をさして罷候ぬ」と申ければ（中略） いまも朝の怨敵をほろぼし給べきにやと、 君も臣も たのもしうぞおぼしめされける。 【巻一一 鶏合壇浦合戦】 さる程に、九郎大夫判官義経、周防の地におしわたつて（中略） 平家 みかた勝ぬとて 【巻一一 遠矢】

「前兆」 ② 夢・不思議 「前兆」 ① 神例	関係
阿波の民部 【巻四第一章】 はじめは平家 そつと勝色にあつたれども、	
阿波民部成能ハ 【一〇四句 壇浦】 平家ハ是ヲ見 御方既ニ勝ヌトテ（中略） 鮪ト云魚 一二千平家ノ船ニ 向テ喰ケレハ （中略）此イルカ（注、魚偏十妻 喰通り候ハ、 御方ノ軍危フ候ヘシ （中略）ト申モ終ネハ 鮪平家ノ船ノ下ヲ 喰テソ透リケル	白雲一群 源氏ノ船ノ陣ノ上ニ 靡垂布テミエケルカ雲ニテハ ナカリケリ 主ナキ白旗一流レ 舞下テ源氏ノ 船ノ舳先棹付ノ緒付 程ニミヘテ 又天ヘソ上リケル （中略） 是ホトニ八幡大菩薩ノ 守護セサセ給ンスルニ 争力軍ニ勝サルヘキ トソ勇合ケル（中略）
阿波の民部成能ハ 【一〇四句 壇の浦】 平家はこれを見、 「御方すでに勝ちぬ」とて（中略） 鮪といふ魚 一二千、平家の船に 向かうてはみければ （中略）「この鮪、 はみ通り候はば、 御方のいくさ危う候ふべし。 （中略）」と申しもはてねば、 鮪平家の船の下を はうでぞ通りける。	白雲一むら、 源氏の船の陣の上に たなびいて見ゆるが、雲にては なかりけり。 主なき旗一流れ 舞ひくだつて、源氏の 船の舳先、棹付の緒つくる ほどに見えて、 また空へぞのぼりける。 （中略） 「これほどに八幡大菩薩の 守護せさせ給はんずるに、 いかでかいくさに勝たざるべき」 とぞいさみあひける。（中略）
平家 【巻一一 鶏合壇浦合戦】 みかた勝ぬとて（後略）。 【巻一一 遠矢】 （前略）阿波民部重能は 一二千はうて、平家の方へ むかひける。 （中略）「このいるか（中略） はうてとをり候はば、 みかたの御いくさあやう候」 と申もはてねば、 平家の船のしたをすぐに はうてとをりけり。	（前略）白雲かとおぼしくて、 虚空に たゞよひけるが、雲にては なかりけり、 主もなき白旗ひとながれ まいさが、て、源氏の 船のへに棹づけのおのさはる 程にぞ見えたりける。 （中略） 「是は八幡大菩薩の 現じ給へるにこそ」 とよろこびで（後略）。

「前兆」③天変地異関係 2例				
建礼門院はたまたま	【巻一第一〇章】 VM その鬼界が島の流人どもを清盛の許された様をお語りあれ。 阿波の民部	【二二句 大赦】 其比大政入道ノ第二ノ御子ムスメ 建礼門院（中略） 御懷妊トソ聞サセ玉ヒケル 【二二句 大赦】 そのころ、太政入道第一の御むすめ、建礼門院（中略） 「御懷妊」とぞ聞こえし。 【巻一二 大地震】 去程に、入道相国の御むすめ建礼門院（中略） 御懷妊とぞ聞えし。	【二二句 大赦】 同七月九日の午の刻ばかりに、大地おびたしくうごいて良久し。（中略） おさなきもの共も是をきいて、泣かなしむ事限りなし。（中略） 今度の事は是より後もたぐひあるべしとおぼえず。（中略） 怨霊はおそろしき事なれば、世もいかゞあらんずらむとて、心ある人の歎かなしめはなかりけり。 【巻一二 紺搔之沙汰】 【灌頂巻 女院出家】 さる程に、七月九日の大地震に	阿波の民部重能は
建礼門院ハ適マ	【二二句 大赦】 同正月七日ニ 彗星東方ニ出ルトモ申ス 又赤輝トモ申ス 十八日ニ光リヲ増ス（後略） ※行間に書き込まれている。 阿波民部成能ハ	【二二句 大赦】 同七月九日ノ午刻ハカリニ 大地震動ヒテ 稍久シ（中略） 少キ者共モ 泣悲ム（中略） 開關ヨリ以来カハルコト 有ヘシトモ覚ヘス 平家ノ怨霊ニテ 代ノ失セヘキカトソ 申ケル 阿波の民部成能は	【二二句 大赦】 同七月九日の午の刻ばかり、大地おびたしく動いて、ややひさし。（中略） 幼き者どもも泣きかなしむ。（中略） 開關よりこのかた「かかることあるべし」ともおぼえず、 「平家の怨霊にて、世の失せべきか」とぞ申しける。	阿波の民部成能は
建礼門院は、たまたま	【二二句 大赦】 同七月九日の午の刻ばかり、大地おびたしく動いて、ややひさし。（中略） 泣き悲しうでござった。 阿波の民部成能は	【二二句 大赦】 同七月九日の午の刻ばかり、大地おびたしく動いて、ややひさし。（中略） 泣き悲しうでござった。 阿波の民部成能は	【二二句 大赦】 同七月九日の午の刻ばかり、大地おびたしく動いて、ややひさし。（中略） 泣き悲しうでござった。 阿波の民部成能は	阿波の民部成能は

例 外 2 例			
忠度はどこから	【巻二第二章】 高倉の宮は御謀叛をおこさせられて、失せさせられたといふほどこそあれ、都のうちは騒動することはおびたしなかった。 法皇 三日ノ内ノ御悦ヒ 并ニ御歎ト泰親カ 勘カヘ申タリシハ是ヲ 申ケルニコソトテ 御涙ニ咽ハセヲワシマス 【巻二第三章】 VM 三位入道の謀叛の由来をもお語りあれ。 QI. かしこまった.. さても年来日ごろも 【巻三第六章】 あまりあわてて取り落さるるものも多うござったと、きこえた。	【三四句 競】 高倉ノ宮ノ御謀叛起テ失サセ玉ヌト 申程コソ有ケレ都ノ騒動震シ 法皇 三日ノ内ノ御悦ヒ 并ニ御歎ト泰親カ 勘カヘ申タリシハ是ヲ 申ケルニコソトテ 御涙ニ咽ハセヲワシマス	
薩摩守忠度は、いづくよりか	抑 年来日比モ 【六八句 法皇鞍馬落】 余リニ周章テ取落ス 者トモ多カリケリ（中略） 一年都遷リトテ俄ニ 喧立カリシハ 懸ルヘカリケル前表トモ 今コソ思ヒアハセケレ	【三四句 競】 「高倉の宮の、御謀叛おこして失せさせ給ひぬ」と申すほどこそありけれ、都の騒動おびたし。 法皇、 「『三日のうちの御よろこび、ならびに御嘆き』と、泰親が勘へ申したりしは、これを申しけるにこそ」と、 御涙にむせびおはします。	
薩摩守忠度は、いづくよりや	抑 源三位入道、年ごろ日比も 【巻七 主上都落】 あまりにあはてさはいでとりおとす物ぞおほかりける。（中略） 一とせ都うつりとして俄に あはたゝしかりしは、 かゝる先表共 今こそおもひしられけれ（後略）。 【巻七 維盛都落】 〜 【巻七 忠度都落】	【巻四 競】 高倉の宮の御謀叛おこさせ給て、うせさせ給ぬと申すほどこそありけれ、京中の騒動なのめならず。（中略） 法皇これをきこしめして、 「鳥羽殿を御いであるは御悦なり。ならびに御歎と泰親が勘状をまいらせたるは、これを申けり」とぞ仰ける。	

經典の文句 4 例

【巻一第二章】 あまたの乞匄人を見たれども、 このやうな者をば まだ見たことがない…	もし餓鬼道にたづねて来たか	【巻三第六章】 どこの浦、山の奥にも 身を隠れられうずる所がなかった。	それによつて夜ふけてから	【巻四第四章】 中将いよいよ心細うおぼしめして、 お涙をとどめあへさせられなんだ。 さてあらうずることではなければ、	おん身の髪を剃りくださせらるるにも	【巻四第二章】 樂しみは必ず悲しみのもとゐなれば、 生はまた死の因でござる
【二六句 有王島下】 多ノ乞害人ヲミツレトモ カ、ル者コソ 未タミネ	地獄餓鬼畜生三惡趣ハ 深山大海ノ辺ニ有リト 仏ノ説置玉ヘル事ナレハ 知ラス我レ餓鬼道ニ尋来カ	【六八句 法皇鞍馬落】 何レノ浦カ 穩カナルヘ□ 三界無安猶如火宅ト 如来ノ金言十乗ノ妙文ナレハ ナシカハ少モ違ヘキ 同廿四日小夜深ルホトニ	【九七句 維盛出家】 中将イヨ／＼心細フ思召メ 御涙イト、関アエ玉ハス サテモ有ヘキコトナラネハ 流転三界中恩愛不能斷 棄恩入無為眞実報恩者 ト三反唱ヘテ 剃下シ玉ヒケルニモ	【二二一句 大臣殿之最後】 樂ハ必悲ノ基ナレハ 生ハ又死ノ因也	サレハ仏ハ我心自空 罪福無至觀心無心 法無住法ト説カレタリ	
【二六句 有王島下り】 おほくの乞匄人を見しかども、 か様の者は いまだ見ず。	諸阿修羅等、居在的大海辺とて、 修羅の三惡四趣は 深山大海の辺にあると、 仏説き給へることなれば、 知らず、餓鬼道にたづね来たるか	【六八句 法皇鞍馬落ち】 いづれの浦か おだやかなるべき。 「三界無安猶如火宅」と、 如来の金言、一乗の妙文なれば、 なじかは少しもちがふべき。 同じき二十四日、小夜ふくるほどに	【九七句 維盛出家】 中将いよいよ心ほそうおぼしめして、 御涙いとどせきあへ給はず。 さてもあるべきことならねば、 流転三界中 恩愛不能斷 棄恩入無為 眞実報恩者 と三返となへて、 剃りおろし給ひけるにも	【二二一句 大臣殿最後】 樂しみは必ず悲しみのもとゐなれば、 生はまた死の因なり。	されば、仏は『我心自空、 罪福無主、觀心無心、 法無住法』と説かれたり。	
【巻三 有王】 多くの乞匄人みしか共、 かゝる者をば いまだみず。	「諸阿修羅等居在的大海辺」とて、 修羅の三惡四趣は 深山大海のほとりにありと、 佛の解をき給ひたれば、 しらず、われ餓鬼道に尋来るか」	【巻七 主上都落】 いづれの浦か おだしかるべき。 三界無安猶如火宅とて、 如来の金言一乗の妙文なれば、 なじかはすこしもたがふべき。 同七月廿四日のさ夜ふけがたに	【巻一〇 維盛出家】 いとゞ心ほそうぞおぼしめす。 さてもあるべきならねば、 「流転三界中、恩愛不能斷、 棄恩入無為、眞実報恩者」 と三反唱へ給ひて、 つゐにそりおろし給てしげり。	【巻一一 大臣殿被斬】 樂尽て悲来る。 天人尚五衰の日にあへり」とこそ うけ給はれ。	されば仏も「我心自空、 罪福無主、觀心無心、 法不住〔法〕とて、」	

天孫の記述2例			
と申して	【巻一第六章】 またおん有様 さらに現とも覚えず、	太政大臣の官にいたる人の 【巻三第一〇章】 時忠卿出やうて、 いろいろにすかいて、	頼朝や、木曾に 一味したならば、国をあづけう、 郡をくれうなどと 言ふを
善も悪も只空也ト 観シツルガ正シク仏ノ 御心ニハ相叶コト ニテ候ナルソ(中略) 努々余念ヲコサセ玉フナ トテ	【一六句 大教訓】 旁御有様ヲ見奉ルニ 終ニ幻トモ覚ヘ候ハス 有聲吾朝ハ粟散辺地トハ 申シナカラ 天照太神ノ御子孫国ノ主 トメ天津兒屋根尊ノ御末 朝政ヲ司リ玉ヒテ ヨリ以来 太政大臣ノ官ニ至ル程ノ人ノ	※欠巻	
『善も、悪も、ただ空なり』と 観じつるが、まさしく仏の 御心には、あひかなふこと にて候ふなるぞ。(中略) ゆめゆめ、余念をおこさせたまふな とて	【一六句 大教訓】 かたがた御ありさまを見たてまつるに、 さらに現ともおぼえ候はず。 さすが、わが朝は、粟散辺地とは 申しながら、 天照大神の御子孫、国の主 として、天の兒屋根の命の御末、 朝の政をつかさどり給ひて よりこのかた、 太政大臣の官にいたるほどの人の	【七三句 緒環】 平大納言時忠の卿、 維村にいで向かひ、 のたまひけるは、 「わが君は天孫四十九世の 正統、人皇八十一代の帝にて わたらせ給ふ。 (中略) 当国の者ども、 頼朝、義仲にかたらはれて、 『しおほせたらば、国を預けん』 『庄をとらせん』などと いふことを	
善も悪も空なりと 観ずるが、まさしく仏の 御心にあひかなふ事 にて候也。(中略) ゆめ／＼余念をおぼしめすべからず とて	【巻二 教訓状】 又御ありさま、 更にうつゝ共覚え候はず。 さすが我朝は辺地粟散の境と 申ながら、 天照大神の御子孫、国のあるじ として、天兒屋根尊の御末、 朝の政をつかさどり給ひし より以来、 太政大臣の官に至る人の	【巻八 太宰府落】 平大納言時忠卿(中略) 維村にいでむかひて の給ひけるは、 「それ我君は天孫四十九世の 正統、仁王八十一代の御門 なり。 (中略) 東国・北国の凶徒等が 頼朝・義仲等にかたらはされて、 しおほせたらば国をあづけう、 庄をたばんと いふことを	

【表15】〈拔書〉が採録した「前兆」、經典の文句、天孫の記述（46例）

内容	へ抜書	慶長八年古活字版本『太平記』
【卷一 第一章 天下怪異事】 嘉暦二年の春の比、南都大乘院禪師房と、六方の大衆と確執の事有て、合戦に及ぶ。 金堂、講堂、南円堂、西金堂、忽に兵火の余煙に焼失す。 又元弘元年四月十三日、山門東塔の北谷より兵火出来て、四王院、延命院、大講堂、法花堂、常行堂、一時に灰燼と成ぬ。是等をこそ、天下の災難を兼て知する処の前相かと、人皆魂を冷しけるに		【卷二 天下怪異事】 嘉暦二年ノ春ノ比、南都大乘院禪師房ト六方ノ大衆ト、確執ノ事有テ合戦ニ及ブ。 金堂、講堂、南円堂、西金堂、忽ニ兵火ノ余煙ニ焼失ス。 又元弘元年、山門東塔ノ北谷ヨリ兵火出来テ、四王院、延命院、大講堂、法華堂、常行堂、一時ニ灰燼ト成ヌ。是等ヲコソ、天下ノ災難ヲ兼テ知スル処ノ前相カト 人皆魂ヲ冷シケルニ
【卷一 第十九章 主上御夢事付楠事】 主上思食煩はせ給ひて、少し御まところみ有ける御夢に、所は紫宸殿の庭前と覺えたる地に、大なる常盤木あり。緑の陰茂て、南へ指たる枝、殊に榮へ蔓れり。其下に、三公百官位に依て列座す。南へ向たる上座に御座の暈を高く敷、未座したる人はなし。（中略）鬢結たる童子二人忽然として来て、主上の御前に跪き、涙を袖に掛けて、一天下の間に、暫も御身を隠さるへき所なし。但あの樹の陰に南へ向へる座席あり。是御為に設たる玉宸にて候へは、暫く此に御座候へと申て、童子は遙の天に上り去ぬと御覽して、御夢はやかて覺にけり。 主上は天の朕に告る処の夢也と思食て、文字に付て御料簡あるに（中略）朕再び南面の徳を治て、天下の士を朝せしめんする処を、日光月光の示されけるよ		【卷三 主上御夢事付楠事】 主上思食煩ハセ給テ、少シ御マドロミ有ケル御夢ニ、所ハ紫宸殿ノ庭前ト覺ヘタル地ニ、大ナル常盤木アリ。緑ノ陰茂テ、南ヘ指タル枝殊ニ榮ヘ蔓レリ。其下ニ三公百官位ニ依テ列坐ス。南ヘ向タル上座ニ御坐ノ暈ヲ高く敷、未坐シタル人ハナシ。（中略）鬢結タル童子二人忽然トシテ来て、主上ノ御前ニ跪キ、涙ヲ袖ニ掛テ、「一天下ノ間ニ、暫モ御身ヲ可レ被レ隠所ナシ。但シアノ樹ノ陰ニ南ヘ向ヘル座席アリ。是御為ニ設タル玉宸ニテ候ヘバ、暫ク此ニ御座候ヘ。」ト申テ、童子ハ遙ノ天ニ上リ去ヌト御覽ジテ、御夢ハヤガテ覺ニケリ。 主上はハ天ノ朕ニ告ル所ノ夢也ト思食テ、文字ニ付テ御料簡アルニ（中略）朕再び南面ノ徳ヲ治テ、天下ノ士ヲ朝セシメズル処ヲ、日光月光ノ被レ示ケルヨ
【卷二 第九章 中堂新常燈消事】 其此、都鄙の間に、希代の不思議共多かりけり。 山門の根本中堂の内陣へ山鳩一番飛来て、新常燈の油錠の中に飛入て、ふためきける間、燈明忽に消にけり。此山鳩、堂中の闇さに行方に迷ふて、仏壇の上に翅を低て居たりける処に、承塵の方より、其色朱を指たる如くなる鼠狼一つ走り出て、此鳩を二つながら喰殺してそ失にけり。（中略）是偏皇統の		【卷五 中堂新常燈消事】 其比都鄙ノ間ニ、希代ノ不思議共多カリケリ。 山門ノ根本中堂ノ内陣ヘ山鳩一番飛来テ、新常燈ノ油錠ノ中ニ飛入テ、フタメキケル間、燈明忽ニ消ニケリ。此山鳩、堂中ノ闇サニ行方ニ迷フテ、仏壇ノ上ニ翅ヲ低テ居タリケル処ニ、承塵ノ方ヨリ、其色朱ヲ指タル如クナル鼠狼一ツ走り出デ、此鳩ヲ二ツナガラ食殺テゾ失ニケリ。（中略）是偏ニ皇統ノ

無窮を曜さん為の御願、兼ては六趣の群類の瞑闇を照す、慧光法燈の明なるに、思食准へて始置れし常燈なれば、未来永劫に至まで消る事なるへきに、鵲鳩の飛来て打消けるこそ不思議なれ。其を玄癩の食殺しけるも不思議也。	無窮ヲ耀サン為ノ御願、兼テハ六趣ノ群類ノ瞑闇ヲ照ス、慧光法燈ノ明ナルニ、思食準ヘテ被_レ始置_ニシ常燈ナレバ、未来永劫ニ至迄消ル事ナカルベキニ、鵲鳩ノ飛来テ打消ケルコソ不思議ナレ。其ヲ玄癩ノ食殺シケルモ不思議也。
【巻二第二章 民部卿三位局御夢想事】 忘すは神も哀れと思ひしれ心つくしの古への旅と遊て、少し御目睡有ける其夜の御夢に、衣冠正くしたる老翁の、年八十有余なるか、左の手に梅の花を一枝持、右の手に鳩の杖をつき、最苦しけなる体にて、御局の臥給ひたる枕の辺に立給へり。(中略) 此老翁世に哀なる気色にて、云ひ出せる詞は無て、持たる梅花を御前に指置て立帰けり。不思議やと思召て御覧すれば、一首の歌を短冊にかけり。 廻りきて遂にすむへき月影のしはし陰を何歎くらん 御夢覺て、歌の心を案し給ふに、 君遂に還幸成て、雲の上に住ませ給ふへき瑞夢也	【巻六 民部卿三位局御夢想事】 忘スハ神モ哀レト思シレ心ヅクシノ古ヘノ旅ト遊テ、少シ御目睡有ケル其夜ノ御夢ニ、衣冠正シクシタル老翁ノ、年八十有余ナルガ、左ノ手ニ梅ノ花ヲ一枝持、右ノ手ニ鳩ノ杖ヲツキ、最苦シゲナル体ニテ、御局ノ臥給タル枕ノ辺ニ立給ヘリ。(中略) 此老翁世ニ哀ナル気色ニテ、云ヒ出セル詞ハ無テ、持タル梅花ヲ御前ニ指置テ立帰ケリ。不思議ヤト思召テ御覧ズレバ、一首ノ歌ヲ短冊ニカケリ。 廻リキテ遂ニスムベキ月影ノシバシ陰ヲ何歎クラン 御夢覺テ歌ノ心ヲ案ジ給ニ、 君遂ニ還幸成テ雲ノ上ニ住マセ可_レ給瑞夢也
【巻四第二章 天下妖怪事付清水寺炎上事】 明る二十七日午刻に、清水坂より俄に失火出来て、清水寺の本堂、阿弥陀堂、楼門、舞台、鎮守まで一字も不_レ残炎滅す。火災は尋常の事なれとも、風不_レ吹大なる炎遙に飛去て、嚴重の御祈禱所一時に焼失する事直事に非ず。	【巻二七 天下妖怪事付清水寺炎上事】 明ル二十七日午刻ニ、清水坂ヨリ俄ニ失火出来テ、清水寺ノ本堂・阿弥陀堂・楼門・舞台・鎮守マデ一字モ不_レ残炎滅ス。火災ハ尋常ノ事ナレ共、風不_レ吹大ナル炎遙ニ飛去テ、嚴重ノ御祈禱所一時ニ焼失スル事非_ニ直事_一。
又同六月三日、八幡の御神殿、辰刻より酉時まで鳴動す。神鐺声を添て、王城を差て鳴て行。	又同六月三日八幡ノ御殿、辰刻ヨリ酉時マデ鳴動ス。神鐺声ヲ添テ、王城ヲ差テ鳴テ行。
【巻五第七章 吉野殿与相公羽林御和陸事付住吉松折事】 住吉に臨幸成て三日に当りける日、社頭に一の不思議あり。勅使神馬を献て奉幣を捧けたりける時、風も吹さるに、瑞籬の前なる大松一本中より折て、南に向て倒れにけり。(中略) 穴浅猿や、此度の臨幸成せ給はん事は艱有。	【巻三〇 吉野殿与相公羽林御和陸事付住吉松折事】 住吉ニ臨幸成テ三日ニ当リケル日、社頭ニ一ノ不思議アリ。勅使神馬ヲ献テ奉幣ヲ捧ゲタリケル時、風モ不_レ吹ニ、瑞籬ノ前ナル大松一本中ヨリ折テ、南ニ向テ倒レニケリ。(中略) 一穴浅猿ヤ、此度ノ臨幸成セ給ハン事ハ難_レ有。
【巻五第二章 崇徳院御事】 病付て七日に当りける卯の刻に、黄なる旗一流差て、混甲の	【巻三三 崇徳院御事】 病付テ七日ニ当リケル卯ノ刻ニ黄ナル旗一流差テ、混タ甲ノ

兵千騎計、三方より同時に時の声を揚て押寄たり。(中略) 紅の母衣掛たる兵十余騎、大将細川伊予守か頸と、家人行吉掃部助か首とを取て鋒に貫き、悪しと思ふ者をは皆とりたるぞ。是見よや、兵共とて、二の首を差上たれば、大手の敵七百余騎、勝時を三声とつと作て帰るを見れば、此寄手天に上り雲に乗して、白峯の方へぞ飛去ける。変化の兵帰去れば、是を防きつる者共、討れぬと見えつる人も不死、手負と見えつるも恙かなし。こは如何なる不思議ぞと、互に語り互に問て暫あれば、伊予守も行吉も同時に無墓成にけり。	兵千騎計、三方より同時に二時ノ声ヲ揚テ押寄タリ。(中略) 紅ノ母衣掛タル兵十余騎、大将細川伊予守ガ頸ト家人行吉掃部助ガ頸トヲ取テ鋒ニ貫キ、「悪シト思フ者ヲバ皆打取タルゾ。是看ヨヤ兵共。」トテ、二ノ頸ヲ差上タレバ、大手ノ敵七百余騎、勝時ヲ三声ドツト作テ帰ルヲ見レバ、此寄手天ニ上リ雲ニ乗ジテ、白峯ノ方ヘゾ飛去ケル。変化ノ兵帰去レバ、是ヲ防ツル者共、討レヌト見ヘツル人モ不レ死、手負ト見ツルモ恙ナシ。コハイカナル不思議ゾト、互ニ語り互ニ問テ、暫クアレバ、伊予守モ行吉モ同時ニ無墓成ニケリ。
【卷六第一章 大地震并夏雪之事】 八月廿四日の大地震に、雨荒く降り、風烈く吹て、虚空暫く搔くれて見えけるか、難波浦の沖より、大龍二浮出て、天王寺の金堂の中へ入ると見えけるか、雲の中に鎬矢鳴響ひて、戈の光四方にひらめきて、大龍と四天と戦ふ体に見えたりける。二の龍去る時、又大地おひたしく動て、金堂微塵に碎にけり。 洛中辺土には、傾かぬ塔の九輪もなく、熊野参詣の道には、地のさけぬ所も無りけり。旧記の載る所、開闢以来、斯る不思議なれば、此上に又何様なる世の乱や出来らんすらんと、懼恐れぬ人は更になし。	【卷三六 大地震并夏雪事】 八月廿四日ノ大地震ニ、雨荒ク降り風烈ク吹テ、虚空暫ク搔クレテ見ケルガ、難波浦ノ澳ヨリ、大龍二浮出テ、天王寺ノ金堂ノ中ヘ入ルト見ヘケルガ、雲ノ中ニ鎬矢鳴響テ、戈ノ光四方ニヒラメキテ、大龍ト四天ト戦フ体ニゾ見ヘタリケル。二ノ龍去ル時、又大地震ク動テ、金堂微塵ニ碎ニケリ。サレ共四天ハ少シモ損ゼサセ給ハズ。是ハ何様聖徳太子御安置ノ仏舍利、此堂ニ御坐バ、龍王是ヲ取奉ラントスルヲ、仏法護持ノ四天王、惜マセ給ケルカト覺ヘタリ。 洛中辺土ニハ、傾又塔ノ九輪モ無ク、熊野参詣ノ道ニハ、地ノ裂ヌ所モ無リケリ。旧記ノ載ル所、開闢以来斯ル不思議ナケレバ、此上ニ又何様ナル世ノ乱ヤ出来ランズラント、懼恐レヌ人ハ更ニナシ。
【卷六第一章 中殿御会事】 中殿の御会と云事は、吾朝不相応宸宴たるに依て、毎度天下に重事起ると人皆申慣せる上、近臣悉眉を顰て諫言を上たりしかとも、一切無御承引、終に被遂行けり。さるに合せて、同三月廿八日丑刻に、夥敷天変西より東を差て飛行と見えしか、翌日廿九日申刻に、天龍寺新造の大廈、土木の功未終、失火忽に燃出て一時の灰燼と成にけり(後略)。	【卷四〇 中殿御会事】 中殿ノ御会ト云事ハ、吾朝不ニ相応ニ宸宴タルニ依テ、毎度天下ニ重事起ルト人皆申慣セル上、近臣悉眉ヲ顰テ諫言ヲ上タリシカ共、一切無御承引ニ終ニ被遂行ケリ。サルニ合セテ、同三月廿八日丑刻ニ、夥敷天変西ヨリ東ヲ差テ飛行ト見ヘシガ、翌日廿九日申刻ニ、天龍寺新造ノ大廈、土木ノ功未レ終、失火忽ニ燃出テ一時ノ灰燼ト成ニケリ(後略)。

【巻六第一章 左馬頭基氏逝去事】 角ては天下も如何と危ふめる処に、(中略) 鎌倉左馬頭基氏(中略)忽に逝去し給ひけり。	【巻四〇 左馬頭基氏逝去事】 角テハ天下モ如何ント危ブメル処ニ(中略) 鎌倉左馬頭基氏(中略)忽ニ逝去シ給ケリ。
【巻二第一〇章(a) 相模入道弄田楽并闕犬事】 或夜(中略)いつくより来とも知ぬ、 新座、本座の田楽共十余人、忽然として座席に列てそ舞歌ひける。 (中略)天王寺のやよればしを見はやとそ拍子ける。或官女 此声を聞て、余の面白さに障子の隙よりは是を見るに(中略) 異類、異形の媚者共か質を人に変したるにてそ有ける。(中略) 天下将乱時、妖霊星と云悪星下て災を成すといへり。	【巻五 相模入道弄田楽并闕犬事】 或夜(中略)何クヨリ来トモ知ヌ 新座・本座ノ田楽共十余人、忽然トシテ坐席ニ列テゾ舞歌ヒケル。 (中略)「天王寺ノヤヨウレボシヲ見バヤ。」トゾ拍子ケル。或官女 此声ヲ聞テ、余ノ面白サニ障子ノ隙ヨリ是ヲ見ルニ(中略) 異類異形ノ媚者共ガ姿ヲ人ニ変ジタルニテゾ有ケル。(中略) 「天下将レ乱時、妖霊星ト云悪星下テ災ヲ成ストイヘリ。 而モ天王寺ハ是仏法最初ノ霊地ニテ、聖徳太子自日本一州ノ未 来記ヲ留給ヘリ。サレバ彼媚者ガ天王寺ノ妖霊星ト歌ヒケルコ ソ怪シケレ。」
如何様、天王寺辺より天下の動乱出来て、国家敗亡しぬと覚ゆ。 【巻三第一章 龍馬進奏事】 我朝に天馬の来る事を未聞す。然るに朕か代に当て、此馬不求 出来る。吉凶如何と御尋ありけるに、相国申されけるは、 是聖明の徳に因すんは、天豈此嘉瑞を降候はんや。(中略) 藤房卿申されけるは(中略) 是静謐の朝に出て、兼て大乱の備を設く。豈不吉の表事に候はずや。	如何様天王寺辺ヨリ天下ノ動乱出来テ、国家敗亡シヌト覚ユ。 【巻一三 龍馬進奏事】 我朝ニ天馬ノ来ル事ヲ未ダ聞ズ。然ニ朕ガ代ニ当テ此馬不レ求 出来ル。吉凶如何。」ト御尋アリケルニ、相国被レ申ケルハ、 「是聖明ノ徳ニ不レ因バ、天豈此嘉瑞ヲ降候ハンヤ。(中略) 藤房卿被レ申ケルハ(中略) 是静謐ノ朝ニ出テ、兼テ大乱ノ備ヲ設ク。豈不吉ノ表事ニ候ハズヤ。」
【巻三第二章 金崎船遊事付白魚入船事】 誠に心なき鱗までも、是を感ずる事や有けん、 水中に魚踊り御船の中へそ飛入ける。実世卿是を見給ひて、 昔周武王八百の諸侯を率し、殷の紂を討ん為に孟津を渡りし時、 白魚踊て武王の船に入りけり。武王是を取て天に祭る。果して 戦ひに勝事を得しかば、殷の世を遂に亡して、周八百の祚を 保てり。今の奇瑞古に同じ。	【巻一七 金崎船遊事付白魚入船事】 誠ニ心ナキ鱗マデモ、是ヲ感ズル事ヤ有ケン、 水中ニ魚跳御舟ノ中ヘ飛入ケル。実世卿是ヲ見給テ、 「昔周武王八百ノ諸侯ヲ率シ、殷ノ紂ヲ討ン為ニ孟津ヲ渡リシ時、 白魚跳テ武王ノ舟ニ入ケリ。武王是ヲ取テ天ニ祭ル。果シテ 戦ニ勝事ヲ得シカバ、殷ノ世ヲ遂ニ亡シテ、周八百ノ祚ヲ 保リ。今ノ奇瑞古ニ同じ。」
【巻四第六章 義貞夢想事付諸葛孔明事】 義貞の朝臣不思議の夢をそ見給ひける。所は今の足羽辺と 覚えたる河の辺にて、義貞と高経と相對して陣を張る。(中略) 義貞俄に高さ三十丈計なる大蛇に成て、地上に臥給へり。	【巻二〇 義貞夢想事付諸葛孔明事】 義貞ノ朝臣不思議ノ夢ヲゾ見給ケル。所ハ今ノ足羽辺ト 覚タル河ノ辺ニテ、義貞ト高経ト相對シテ陣ヲ張ル。(中略) 義貞俄ニタカサ三十丈計ナル大蛇ニ成テ、地上ニ臥給ヘリ。

高経是を見て、陣をひき楯を捨て逃る事、数十里にして止りぬと見給ひて、夢は則覺にけり。(中略) 斎藤七郎入道道猷(中略)眉をひそめて潜に云けるは、 是全く目出き御夢にあらず。則天の凶を告るにて有へし。	【巻四第八章 奥州下向勢逢難風事】 宮の召されたる御船一艘、漫々たる大洋に放たれて、已に覆らんとしける処に、	風俄に取て返し、	伊勢国へふきもとされ給ひぬる事たゞ事に非ず。何様此宮繼体の君として、九五の天位を踐せ給ふへき	者也とて(中略)則又吉野へ返し入れ進せらけるに、果して先帝崩御の後、南方の天子の御位をつかせ給ひし	吉野の新帝と申奉りしは、則此宮の御事也。	【巻四第十七章 官方怨靈会六本杉事付医師評定事】 峯の僧正春雅(中略)さても此世中を如何して、又騒動せさすへきと宣へは、忠円僧正末座より進出て、其こそ最安き事にて候へ。(中略)大塔宮、直義か内室の腹に、男子と成て生れさせ給ひ候べし。又、夢窓の法眷に妙吉侍者と云僧あり。(中略)峯の僧正、御房其心に入替り給ひて、政道を輔佐し邪法を説破させ給ふへし。智教上人は、上杉伊豆守重能、畠山大蔵少輔か心に依託して、師直、師泰を失はんと計らはれ候べし。忠円は、武蔵守、越後守(か)心に入替て、上杉、畠山を亡ほし候へし。依之、直義兄弟の中悪く成り、師直主従の礼に背かは、天下に又大なる合戦出来て、暫く見物は絶候はし(中略)四、五日有て後、足利左兵衛督の北方、相勞る事有て(中略)六月八日の朝、生産容易して、而も男子にてそ座しける。
高経是ヲ見テ、兵ヲヒキ楯ヲ捨テ逃ル事数十里ニシテ止ト見給テ、夢ハ則覺ニケリ。(中略) 齊藤七郎入道々猷(中略)眉ヲヒソメテ潜ニ云ケルハ、 「是全く目出キ御夢ニアラズ。則天ノ凶ヲ告ルニテ有ベシ。」	【巻二〇 奥州下向勢逢難風事】 宮ノ召レタル御舟一艘、漫々タル大洋ニ放タレテ、已ニ覆ラントシケル処ニ、	光明赫奕タル日輪、御舟ノ舳前ニ現ジテ見ヘケルガ、	伊勢国神風濱へ吹モドシ奉ル。若干ノ舟共行方モシラズ成ヌルニ、此御舟計日輪ノ擁護ニ依テ、	伊勢国へ吹モドサレ給ヌル事タゞ事ニアラズ。何様此宮繼体ノ君トシテ、九五ノ天位ヲ踐セ給フベキ	所ヲ、忝モ天照太神ノ示サレケル者也トテ(中略)又吉野へ返し入れ進セラレケルニ、果シテ先帝崩御の後、南方ノ天子ノ御位ヲツガセ給シ	吉野ノ新帝ト申奉シハ、則此宮ノ御事也。 【巻二五 官方怨靈会六本杉事付医師評定事】 峯僧正春雅(中略)「サテモ此世中ヲ如何シテ又騒動セサスベキ。」ト宣ヘバ、忠円僧正末座ヨリ進出テ、「其コソ最安キ事ニテ候ヘ。(中略)大塔宮、直義ガ内室ノ腹ニ、男子ト成テ生レサセ給ヒ候ベシ。又夢窓ノ法眷ニ妙吉侍者ト云僧アリ。(中略)峯ノ僧正御房其心ニ入替リ給テ、政道ヲ輔佐シ邪法ヲ説破サセ給ベシ。智教上人ハ上杉伊豆守重能・畠山大蔵少輔ガ心ニ依託シテ、師直・師泰ヲ失ハント計ラハレ候ベシ。忠円ハ武蔵守・越後守ガ心ニ入替テ、上杉畠山ヲ亡ボシ候ベシ。依之直義兄弟ノ中悪ク成リ、師直主従ノ礼ニ背カバ、天下ニ又大ナル合戦出来テ、暫ク見物ハ絶候ハジ。」(中略)四、五日有テ後、足利左兵衛督ノ北方、相勞ル事有テ(中略)六月八日ノ朝、生産容易シテ、而モ男子ニテゾ坐シケル。

【巻四第二章 天下妖怪事付清水寺炎上事】 同二月二十六日夜半計に、將軍塚夥しく鳴動して、虚空に兵馬の馳過る音半時計しければ	又閏六月五日戌刻に、巽方と乾方より、雷光耀き出て、両方の光寄合て如戦して、砕け散ては寄合て、風の猛火を吹上るか如く、余光天地に満て光る中に、異類異形の者見えて、乾の光退き行き、たつみの光進み行て、互の光消失ぬ。此天怪、如何様天下穩ならしと申合にけり。	【巻四第四章 雲景未来記之事】 さて將軍御兄弟、執事の間の不和は、何れか道理にて始終通り候へきと問へば、三条殿と執事の不快は、一兩月を不可過、大なる珍事なるべし。理非の事は、是非を難弁。(中略)さては早乱悪の世にて、下も上に逆ひ、	師直、師泰我まゝにしすまして天下を持つへき歟と問へば、いやさは不可有(中略)地口天心を吞と云變あれば、何にも下刻上の謂にて、師直先勝へし。自是天下大に乱て父子兄弟怨讎を結び、政道聊も有ましければ、世上も無左右難静とそ申ける。	【巻五第四章 鬼丸鬼切事】 頼光是を秘して、朱の唐櫃に収て置れける後、夜々おそろしき夢を見給ひける間、占夢の博士に夢を問ひ給ひければ、七日か間の重き御慎とそ占ひ申ける。(中略)物忌已に七日に満しける夜、河内国高安の里より、頼光の母義おはして門をそ敲かせける。(中略)ひとつの中より件の手を取出して、老母の前にそ聞ける。	母是を取て(中略)是は我手にて候けると云て差合、忽に長二丈計なる牛鬼と成て、酌に立たりける綱を左の手に提ながら、頼光に走かゝりける。	【巻六第一章 大地震并夏雪之事】 又阿波の鳴戸、俄潮去て陸と成る。高く峙たる岩の上に、
【巻二七 天下妖怪事付清水寺炎上事】 同二月二十六日夜半許ニ將軍塚夥シク鳴動シテ、虚空ニ兵馬ノ馳過ル音半時計シケレバ	又潤六月五日戌刻ニ、巽方ト乾方ヨリ、雷光耀キ出テ、両方ノ光寄合テ如レ戦シテ、砕ケ散テハ寄合テ、風ノ猛火ヲ吹上ルガ如ク、余光天地ニ満テ光ル中ニ、異類異形ノ者見ヘテ、乾ノ光退キ行、巽ノ光進ミ行テ互ノ光消失ヌ。此天怪、如何様天下穩ナラジト申合ニケリ。	【巻二七 雲景未来記之事】 「サテ將軍御兄弟執事ノ間ノ不和ハ、何レカ道理ニテ始終通り候ベキ。」ト問ヘバ、「三條殿ト執事ノ不快ハ一兩月ヲ不可過、大ナル珍事ナルベシ。理非ノ事ハ是非ヲ難弁。(中略)「サテハ早乱悪ノ世ニテ下上ニ逆ヒ、	師直・師泰我儘ニシスマシテ天下ヲ持ツベキ歟。」ト問ヘバ、「イヤサハ不可有。(中略)地口天心ヲ吞ト云變アレバ、何ニモ下刻上ノ謂ニテ師直先可勝。自是天下大ニ乱テ父子兄弟怨讎ヲ結び、政道聊モ有マジケレバ、世上モ無左右難静。」トゾ申ケル。	【巻三二 直冬上洛事付鬼丸鬼切事】 頼光是ヲ秘シテ、朱ノ唐櫃ニ収テ置レケル後、夜々ヲソロシキ夢ヲ見給ケル間、占夢ノ博士ニ夢ヲ問給ケレバ、七日ガ間ノ重キ御慎トゾ占ヒ申ケル。(中略)物忌已ニ七日ニ満ジケル夜、河内国高安ノ里ヨリ、頼光ノ母義ヲハシテ門ヲノ敲セケル。(中略)櫃ノ中ヨリ件ノ手ヲ取出シテ老母ノ前ニゾ聞ケル。	母是ヲ取テ(中略)「是ハ我手ニテ候ケル。」ト云テ差合、忽ニ長二丈計ナル牛鬼ト成テ、酌ニ立タルケル綱ヲ左ノ手ニ提、頼光ニ走蒐リケル。	【巻三六 大地震并夏雪之事】 又阿波鳴戸俄ニ潮去テ陸ト成ル。高く峙タル岩ノ上ニ、

見て、七日か中に天下の人傑を失ふへき星也。孔明必死すへきに当れり。魏必蜀を并せて取ん事、余日有へからずと悦へり。果して其朝より孔明病に臥事七日にして、油幕の裡に死にけり。	見て、「七日ガ中ニ天下ノ人傑ヲ失ベキ星也。孔明必死スベキニ当レリ。魏必蜀ヲ并セテ取ン事余日アルベカラズ。」ト悦ベリ。果シテ其朝ヨリ孔明病ニ臥事七日ニシテ、油幕ノ裏ニ死ニケリ。
【巻四第二二章 天下妖怪事付清水寺炎上事】 貞和五年正月の比より、 犯星、客星無隙現しければ、旁其慎不軽。 王位の愁、天下の変、兵乱、疫病有べしと、陰陽寮頻に密奏す。	【巻二七 天下妖怪事付清水寺炎上事】 貞和五年正月ノ比ヨリ、 犯星客星無隙無現ジケレバ、旁其慎不軽。 王位ノ愁天下ノ変、兵乱疫病有ベシト、陰陽寮頻ニ密奏ス。
又同六月十日より、太白、辰星、歳星の三星合て打続きしかは、不経月日大乱出来して、天子失位、大臣受災、子殺父、臣殺君、飢饉、疫病、兵革相続、餓莩満巷へしと、天文博士注説す。	又同六月十日ヨリ太白・辰星・歳星ノ三星合テ打続キシカバ、不経月日大乱出来シテ、天子失位、大臣受災、子殺父、臣殺君、飢饉疫病兵革相続、餓莩満巷ベシト天文博士注説ス。
【巻六第一章 大地震并夏雪之事】 同年六月十八日の巳刻より同十月に至るまで、 大地おひたゝ敷動ひて、日々夜々に止時なし。	【巻三六 大地震并夏雪事】 同年ノ六月十八日ノ巳刻ヨリ同十月ニ至ルマデ、 大地ヲビタゝ敷動テ、日々夜々ニ止時ナシ。
中にも阿波の雪の湊と云浦には、俄に太山の如なる潮漲来て、在家一千七百余宇、悉引塩に連て海底に沈しかは、家々に有所の僧俗、男女、牛馬、鶏犬、一つも残らず底の藻屑と成にけり。 同六月二十二日、俄に天搔曇り、雪降て、氷寒の甚き事、冬至の前後の如し。	中ニモ阿波ノ雪ノ湊ト云浦ニハ、俄ニ太山ノ如ナル潮漲来テ、在家一千七百余宇、悉ク引塩ニ連テ海底ニ沈シカバ、家々ニ所有ノ僧俗・男女、牛馬・鶏犬、一モ不残底ノ藻屑ト成ニケリ。 同六月二十二日、俄ニ天搔曇雪降テ、氷寒ノ甚キ事 冬至ノ前後ノ如シ。
七月二十四日には、摂津国難波浦の澳数百町、半時計乾あかりて（中略）又俄に如大山なる潮満来て、まん／＼たる海に成にければ、数百人の海人共、独も生て帰るは無りけり。	七月二十四日ニハ、摂津国難波浦ノ澳数百町、半時計乾アガリテ（中略）又俄ニ如大山ナル潮満来テ、漫々タル海ニ成ニケレバ、数百人ノ海人共、独モ生キテ帰ハ無リケリ。
【巻六第六章 彗星客星事付湖水乾事】 康安二年二月に、都には彗星、客星同時に出たり（中略） 尤天下の御慎にて候べしと、博士一同に勘申ければ、諸臣皆色を失て、されはよ、此乱世の上には、けにも世界国土か金輪際的底へ落入か、不然是異国の蒙古寄来て、日本国を	【巻三八 彗星客星事付湖水乾事】 康安二年二月ニ、都ニハ彗星・客星同時ニ出タリ（中略） 尤天下ノ御慎ニテ候ベシト、博士一同ニ勘申ケレバ諸臣皆色ヲ失テ、「サレバヨ、此乱世ノ上ニハ、ゲニモ世界国土ガ金輪際ノ底ヘ落入カ、不然ハ異国ノ蒙古寄来テ、日本国ヲ

関係 兆異例 前地11 天変③	例5 他④ 兆前「
打取かにてこそあらめ。さる事有ましき世共覚えすと、面々に申合れけり。 誠に天地人の三災同時に出来ぬと覚えて、 去年の七月より日々に二、三度の地震も未休。 又今年の六月より同十一月の始まで早魃して（中略）人民共の飢死ぬる事、所々に数を知らず。	天地の変は既に如此。人事の変又さこそあらんすらめと思ふ所に、国々より早馬を打て、宮方蜂起したりと、告る事曾て休時なし。 【巻二第一〇章(b) 時政参籠ゑしませ事】 時已に澆季に及て、武家天下の権を執る事、源平両家の間に落て度々に及へり。然とも、天道必盈を虧く故に、或は一一代にして滅び、或は一世をも待すして失ぬ。 今の高時禅門、已に七代を過、九代に及へり。 されは亡へき時刻到来して、斯る不思議の振舞をもせられけるかとぞ覚えける。 【巻二第一六章 千劍破城軍事】 其初日の発句をは、長崎九郎左衛門師宗、さき懸てかつ色見せよ山桜としたりけるを、脇の句、工藤二郎右衛門尉、嵐や花のかたきなるらんとそ付たりける。誠に両句ともに、詞の縁巧にして、句の体は
打取カニテコソアラメ。サル事有マジキ世共不_レ覚。」ト、面々ニ申合レケリ。 誠ニ天地人ノ三災同時ニ出来ヌト覺テ、 去年ノ七月ヨリ日々ニ二三度ノ地震モ未_レ止 又今年ノ六月ヨリ同十一月ノ始マデ早魃シテ（中略）人民共ノ飢死ヌル事、所々ニ数ヲ不_レ知知。 琵琶湖の水が干上がり、白髭明神前に橋が見える。また竹生島から箕浦まで、水の上に道が現れる。	天地ノ変ハ既に如此、人事ノ変又サコソアランスラメト思処ニ、国々ヨリ早馬ヲ打テ、宮方蜂起シタリト、告ル事曾テ休時ナシ。 【巻五 時政参籠榎嶋事】 時已ニ澆季ニ及デ、武家天下ノ権ヲ執ル事、源平両家ノ間ニ落テ度々ニ及ベリ。然ドモ天道必盈ヲ虧故ニ、或ハ一代ニシテ滅ビ、或ハ一世ヲモ不_レ待シテ失ヌ。 北条高時一家が九代も栄えている理由について、時政が榎島弁財天から前世の善根による栄華と、道理に背く振舞をすれば栄華は七代以上は続かないと告げられたことを挙げる。 今ノ高時禅門、已ニ七代ヲ過、九代ニ及ベリ。 サレバ可_レ亡_レ時刻到来シテ、斯ル不思議ノ振舞ヲモセラレケル歟トゾ覺ケル。 【巻七 千劍破城軍事】 其初日ノ発句ヲバ長崎九郎左衛門師宗、サキ懸テカツ色ミセヨ山櫻トシタリケルヲ、脇ノ句、工藤二郎右衛門尉嵐ヤ花ノカタキナルラントゾ付タリケル。誠ニ両句トモニ、詞ノ縁巧ニシテ句ノ体ハ

句 文 例 の 5 典 經		「前兆」④その他 5 例			
住捨る山を浮世の人とは嵐や庭の松にこたへん 棄恩入無為、真実報恩者と云文の下に、		【卷二第二一章 谷堂炎上事】 京中の軍勢（中略）在家に火をかけたれば、時節魔風烈く吹て、淨住寺、最福寺、葉室、衣笠、三尊院、總して堂舎三百余箇所、在家五千余宇、一時に灰燼と成て、仏像、神体、經論、聖教、忽に寂滅の煙と立上る。（中略） かゝる異瑞奇特の大伽藍を、咎無して滅されけるは、遍に武運の尽へき前表哉と、人皆唇を翻けるか、果して幾程も非ざるに、六波羅、皆番場にて亡ひ、一類悉く鎌倉にて失せける事こそ不思議なれ。			
【卷三第一四章 藤房卿遁世事】 住捨る山を浮世の人とは嵐や庭の松にこたへん 棄恩入無為、真実報恩者と云文の下に、		【卷三第一六章 主上都落事付勅使河原自害】 山崎・大渡の陣破れぬと聞えければ、京中の貴賤上下（中略）周章ふためき、倒れ迷て、車馬東西に馳違ふ。（中略） 此二、三年の間、天下僅に一統にして、朝恩に誇りし月卿雲客、指たる事もなきに、武具を嗜み、弓馬を好みて、朝義道に違ひ、礼法則に背しも、早かゝる不思議出来るべき前表也と、今こそ思ひ知られたれ。			
【卷二第二四章 主上々皇為五宮被囚給ふ事付資名卿御出家事】 資名卿聖に向て、出家の時は、何とやらん四句の偈を唱る事の有けに候者をと仰られければ、此聖其文をや知らさりけん、汝は畜生發菩提心とぞ唱へたりける。		【卷六第一六章 最勝講之時及闘諍事】 講演論場の砌には、学海智水を湧し、慧劍を令闘事なるに、南都、北嶺の衆徒等、於南庭不慮に喧嘩を引出して、散々の合戦にそ及ける。（中略）是則嚴重の御願、天下の大会たるに、斯る不思議出来ぬれば、就公私不吉の前相哉と、人皆物を待心地そせられける。			
【卷九 主上・々皇為五宮被囚給事付資名卿出家事】 資名卿聖ニ向テ、「出家ノ時ハ、何トヤラン四句ノ偈ヲ唱ル事ノ有ゲニ候者ヲ。」ト被レ仰ケレバ、此聖其文ヲヤ知ザリケン、「汝ハ畜生發菩提心。」トゾ唱タリケル。		【卷八 谷堂炎上事】 京中ノ軍勢（中略）在家ニ火ヲ懸タレバ、時節魔風烈ク吹テ、淨住寺・最福寺・葉室・衣笠・三尊院、摠ジテ堂舎三百余箇所、在家五千余宇、一時ニ灰燼ト成テ、仏像・神体・經論・聖教、忽ニ寂滅ノ煙ト立上ル。（中略） カ、ル異瑞奇特ノ大伽藍ヲ無レ咎シテ被レ滅ケルハ、偏ニ武運ノ可レ尽前表哉ト、人皆唇ヲ翻ケルガ、果シテ幾程モ非ザルニ、六波羅皆番場ニテ亡ビ、一類悉ク鎌倉ニテ失セケル事コソ不思議ナレ。			
【卷一三 藤房卿遁世事】 住捨ル山ヲ浮世ノ人トハ、嵐ヤ庭ノ松ニコタヘン 棄恩入無為、真実報恩者ト云文ノ下ニ、		【卷一四 主上都落事付勅使河原自害事】 山崎・大渡ノ陣破レヌト聞ヘケレバ、京中ノ貴賤上下（中略）周章フタメキ倒レ迷テ、車馬東西ニ馳違フ。（中略） 此二三年ノ間天下僅ニ一統ニシテ、朝恩ニ誇リシ月卿雲客、指タル事モナキニ、武具ヲ嗜ミ弓馬ヲ好ミテ、朝義道ニ違ヒ、礼法則ニ背シモ、早カ、ル不思議出来ルベキ前表也ト、今コソ思ヒ知ラレタレ。			
【卷四〇 最勝講之時及闘諍事】 講演論場ノ砌ニハ、学海智水ヲ湧シ、慧劍ヲ令レ闘事ナルニ、南都・北嶺ノ衆徒等、於ニ南庭ニ不慮ニ喧嘩ヲ引出シテ、散々ノ合戦ニゾ及ケル。（中略）是即嚴重ノ御願、天下ノ大会タルニ、斯ル不思議出来ヌレバ、就ニ公私ニ不吉ノ前相哉ト、人皆物ヲ待心地ゾセラレケル。		【卷九 主上・々皇為五宮被囚給事付資名卿出家事】 資名卿聖ニ向テ、「出家ノ時ハ、何トヤラン四句ノ偈ヲ唱ル事ノ有ゲニ候者ヲ。」ト被レ仰ケレバ、此聖其文ヲヤ知ザリケン、「汝ハ畜生發菩提心。」トゾ唱タリケル。			

天孫の2記述例	5 例 經典の文句
【巻二第一章 吉野城軍事】 大音声をあけて名乗けるは、 天照大神の御子孫、神武天王より九十五代の帝、後醍醐天皇 第二の皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣の為に亡され 【巻四第二章 雲景未来記之事】 さしきの顛倒は、惣して天狗の態計にも非ず。故を如何と云に、 当関白殿は、忝も天津児屋根尊の御末、天子輔佐の臣として	白頭望断万重山 曠劫恩波尽底乾 不是胸中藏五逆 出家端的報親難と、黄檗の大義渡を題せし古き頌を書れたり。 【巻四第一〇章 先帝崩御事】 今は偏に十善の天位を捨て、三明の覺路に趣せ給ふへき御事を のみ、思召被定候へし。さても最期の一念に依て、三界に生を引と 候へば、万歳の後の御事、万叡慮に懸り候はん事をは 主上苦ける御息を吐せ給ひて、 妻子珍宝及王位、臨命終時不隨者、是如来の金言にして、 平生朕が心に有し事なれば 【巻五第二章 北野通夜物語事付青砥左衛門事】 且は御意の通りも歎入て存候。物の定相なき喻にも、 如夢幻泡影如露亦如電とこそ、金剛經にも説れて候へば、 若某が首を刎よと云夢を御覽せられ候は、
【巻七 吉野城軍事】 大音声ヲ揚テ名乗ケルハ、 「天照太神御子孫、神武天王ヨリ九十五代ノ帝、後醍醐天皇 第二ノ皇子一品兵部卿親王尊仁、逆臣ノ為ニ亡サレ 【巻二七 雲景未来記事】 棧敷ノ顛倒ハ惣ジテ天狗ノ態許ニモ非ズ。故ヲイカニト云ニ、 当関白殿ハ忝モ天津児屋根尊ノ御末、天子輔佐ノ臣トシテ	白頭望断万重山。 曠劫恩波尽_レ底乾。 不_三是_三胸中藏_二五逆_一。 出家端的報親難。ト、黄檗ノ大義渡ヲ題セシ古キ頌ヲ被_レ書タリ。 【巻二一 先帝崩御事】 今ハ偏ニ十善ノ天位ヲ捨テ、三明ノ覺路ニ趣セ給フベキ御事ヲ ノミ、思召被_レ定候ベシ。サテモ最期ノ一念ニ依テ三界ニ生ヲ引ト、 經文ニ説レテ 候へば、万歳ノ後ノ御事、萬_ツ叡慮ニ懸リ候ハン事ヲバ 主上苦ゲナル御息ヲ吐セ給テ、 「妻子珍宝及王位、臨命終時不隨者、是如来ノ金言ニシテ、 平生朕ガ心ニ有シ事ナレバ 【巻三五 北野通夜物語事付青砥左衛門事】 且ハ御意ノ通モ歎入テ存候。物ノ定相ナキ喻ニモ、 如夢幻泡影如露亦如電トコソ、金剛經ニモ説レテ候へば、 若某ガ首ヲ刎ヨト云夢ヲ被_二御覽_一候ハバ

【表16】〈抜書〉が省略した「前兆」、經典の文句、天孫の記述（7例）

内容	〈抜書〉	慶長八年古活字版本『太平記』
【卷三第一章 藤房卿遁世事】 宣房卿恋慕の涙に咽んで、空く帰り給ひけり。		【卷一三 藤房卿遁世事】 宣房卿恋慕ノ泪ニ咽ンデ、空ク帰り給ヒケリ。 （中略）此人閑官ノ昔、五部ノ大乘経ヲ（中略）子孫ノ繁昌ヲ祈ラン為ニ、春日ノ社ニゾ被ニ奉納ニケル。 其夜ノ夢想ニ、黄衣著タル神人、神ノ枝ニ立文ヲ著テ、宣房卿ノ前ニ差置タリ。何ナル文ヤラント怪テ、急是ヲ披テ見給ヘバ、上書ニ萬里小路一位殿ヘト書テ、中ニハ速証無上大菩提ト、金字ニゾ書タリケル。（中略）果シテ元弘ノ末ニ、父祖代々絶テ久キ従一位ニ成給ケリ。中ニ見ヘシ金字ノ文ハ、子息藤房卿出家得道シ給ベギ、其善縁有ト被示ケル明神ノ御告ナルベシ。
【卷三第二章 多々良浜合戦事】 左馬頭香椎宮を打立給ひけり。		【卷一六 多々良濱合戦事付高駿河守引例事】 左馬頭香椎宮ヲ打立給ヘバ（中略） 社壇ノ前ヲ打過給ヒケル時、鳥一番杉ノ葉ヲ一枝嚙テ甲ノ上ヘゾ落シケル。左馬頭馬ヨリ下テ、「是ハ香椎宮ノ擁護シ給フ瑞相也ト敬礼シテ、射向ノ袖ニ差レケル。
【卷三第二章 將軍自筑紫御上洛事】 兵船七千五百余艘を漕双へて、海上をそ上られける。		【卷一六 將軍自筑紫御上洛事付瑞夢事】 兵船七千五百余艘ヲ漕双テ、海上ヲゾ上ラレケル。 同五日備後ノ輅ヲ立給ヒケル時、一ノ不思議アリ。 將軍ノ屋形ノ中ニ少目眠給タリケル夢ニ、南方ヨリ光明赫奕タル觀世音菩薩一尊飛来リマシノヽテ、船ノ舳ニ立給ヘバ、眷属ノ二十八部衆、各弓箭杖ヲ帶シテ擁護シ奉ル体ニゾ見給ケル。 將軍夢覺テ見給ヘバ、山鳩一ツ船ノ屋形ノ上ニアリ。彼此偏ニ円通大士ノ擁護ノ威ヲ加ヘテ、勝軍ノ義ヲ可得夢想ノ告也ト思召ケレバ、杉原ヲ三帖短冊ノ広サニ切セテ、自觀世音菩薩ヲ書セ給テ、船ノ帆柱毎ニゾ推サセラレケル。
角て船路の勢、已備前の吹上に著けは 【卷三第二章 山攻事】 跡に継ける熊野勢五百余人、此矢二筋を見て、前へも不進	【卷一七 山攻事付日吉神託事】 跡ニ継ケル熊野勢五百余人、此矢二筋ヲ見テ、前ヘモ不進	

「前兆」① 神仏関係 6 例		
後へも不帰、皆背をくゝめてそ立たりける。	【巻六第六章 彗星客星事付湖水乾事】 人民共の飢死ぬる事、所々に数を知らず。	天地の変は既に如此。人事の変又さこそあらんすらめと思ふ所に、国々より早馬を打て、<u>官方蜂起</u>したりと
後ロヘモ不帰、皆背ヲク、メテゾ立タリケル。 ・ 南朝方の本間孫四郎と相馬四郎左衛門、扇を射て弓の腕前を披露する。 ・ 山徒金輪院の律師光澄と今木少納言隆賢、北朝方に寝返るも神罰を蒙り非業の死をとげる。	【巻三八 彗星客星事付湖水乾事】 人民共ノ飢死ヌル事、所々ニ数ヲ不知。 此時近江ノ湖モ三丈六尺干タリケルニ、様々ノ不思議アリ。白髭ノ明神ノ前ニテ、奥ニ二人シテ抱許ナル檜木ノ柱ヲ、アハヒ一丈八尺ヅ、立双ベテ、一町余ニ渡セル橋見ヘタリ。 「(中略) 是ハ何様龍宮城ノ道ニテノ有覧。」ト云沙汰シテ、見ル人日々ニ群集セリ。 又竹生島ヨリ箕浦マデ水ノ上三里、如三瑠璃ナル切石ヲ広サ二丈許ニ平ニ疊連ネテ、二河白道モ角ヤト覺タル道一通顯出タリ。是モ如何様龍神ノ通路ニテゾ有ラントテ、蹈デハ渡ル人ナシ。(中略) 此湖七度マデ桑原ニ変ゼシヲ我見タリト、白髭明神 大宮権現ニ向テ被仰ケルト云古ノ物語アレバ、左様ニ桑原ニヤナラズラント見ル人奇ミ思ヘリ。 天地ノ変ハ既ニ如此、人事ノ変又サコソアララズラメト思処ニ、国々ヨリ早馬ヲ打テ、<u>官方蜂起</u>シタリト	【巻六第六章 彗星客星事付湖水乾事】 人民共の飢死ぬる事、所々に数を知らず。

【卷三第二二章 千種殿并文観僧正奢侈事】

此僧正は如此名利の繼に羈されけるも、非直事、何様天魔、外道の其心に依託して、挙動せけるかと覺えたり。以何云之ならは、文治の比洛陽に有一沙門。其名を解脱上人とそ申ける。(中略) 外宮の御前に通夜念誦して、神路山の松風に眠をさまし、御裳濯川の月に心を清して御座ける。

【卷二二 千種殿并文観僧正奢侈事付解脱上人事】

此僧正ハ此レ如名利ノ絆ニ羈レケルモ非直事、何様天魔、外道ノ其心ニ依託シテ、挙動セケルカト覺タリ。以何云之ナラバ、文治ノ比洛陽ニ有ニ一沙門。其名ヲ解脱上人トゾ申ケル。(中略) 外宮ノ御前ニ通夜念誦シテ、神路山ノ松風ニ眠ヲサマシ、御裳濯川ノ月ニ心ヲ清シテ御坐ケル処ニ、

第六天魔王等、仏教を弘める解脱上人を陥れるため、承久の変を起こし、解脱上人を官僧にして驕慢懈怠の心をつさせようと画策する。

角テ三四年ヲ過給ヒケル処ニ承久ノ合戦出来テ(中略)解脱上人在ニ笠置窟聞召テ、為ニ官僧一度々被レ下ニ勅使被レ召ケレ共、是コソ第六天ノ魔王共ガ云シ事ヨト被レ思ケレバ、遂ニ不レ随ニ勅定(中略)以レ彼思レ此、ウタテカリケル文観上人ノ行儀哉ト、迷ニ愚蒙眼。

【表17】〈抜書〉が神仏表現をそのまま採録する場合（49例）

※【表17】～【表19】の凡例

- ・ 神仏表現の箇所には傍線を、考察する上で注目したい箇所には波線を付した。
- ・ 考察の対象とする神仏の名前は、固有名詞（ex「天照大神」「北野天神」・普通名詞（ex「神」「仏」）のほか、「神明（神命）」「三宝」「諸天」「諸菩薩」「龍神」も含めるものとした。ただし「鬼神」と「神霊」は、『邦訳日葡辞書』（昭和五年、岩波書店）によると「悪魔」、「神（Gami）」の精神、あるいは、魂」とあり、神仏とは異なるものと考えられるため、考察の対象から外した。
- ・ 同様に寺社名、地名、経典・護符名、彫像・絵像名、修法名としての神仏や、「鬼か神か」と見えつる熊野人（巻三第五章「山攻事」）のような比喩表現としての神仏等も対象から外した。
- ・ 章段全体を省略する場合、神仏表現を含む一つのエピソード全体を省略する場合（ex不動明王の加護により窮地を脱するという霊験譚、榎島弁財天の利生譚等の省略）は、それらが物語の展開上不要とされたと考え得るため、考察の対象から外した。

① 神仏への信仰を描いたもの 16例		内容
		〈抜書〉
【巻一第四章 儲王御事】 第二宮も同御腹にてそ御座しける。総角の御時より、妙法院の門跡に御入室有て、釈氏の教を受けさせ給ふ。	【巻一 儲王御事】 第二宮モ同御腹ニテゾ御坐シケル。総角ノ御時ヨリ妙法院ノ門跡ニ御入室有テ、釈氏ノ教ヲ受サセ給フ。	慶長八年古活字版本『太平記』
【巻一第九章 南都北嶺行幸事】 契あれは此山もみつ阿耨多羅三藐三菩提の種や植剣 是は、伝教大師当山草創の古、我立杣に冥加あらせ給へと、 三藐三菩提の仏達に祈給ひし故事を思て読る歌なるへし。	【巻二 南都北嶺行幸事】 契アレバ此山モミツ阿耨多羅三藐三菩提ノ種ヤ植剣 是ハ伝教大師当山草創ノ古、「我立杣ニ冥加アラセ給ヘ」ト、 三藐三菩提ノ仏達ニ祈給シ故事ヲ思テ、読ル歌ナルベシ。	
【巻一第一章 三人僧徒閑東下向事】 昔、天竺の波羅奈国に、戒定慧の三学を兼備し給へる独の沙門 おはしけり。（中略）天下の人、帰依渴仰せる事、 恰大聖世尊の出世成道の如也。	【巻二 三人僧徒閑東下向事】 昔天竺ノ波羅奈国ニ、戒定慧ノ三学ヲ兼備シ給ヘル独ノ沙門 ヲハシケリ。（中略）天下ノ人帰依渴仰セル事、 恰大聖世尊ノ出世成道ノ如也。	
【巻一第十八章 主上臨幸依非実事山門変儀事】 やことなき一山の貫首の位を捨て、未習せ給はぬ万里漂泊の旅に 浮れさせ給へは、医王山王の結縁も是や限りと名残惜く	【巻二 主上臨幸依非実事山門変儀事付紀信事】 ヤゴトナキ一山ノ貫首ノ位ヲ捨て、未習セ給ハヌ万里漂泊ノ旅ニ 浮レサセ給ヘバ、医王山王ノ結縁モ是ヤ限リト名残惜ク	
【巻二第二章 民部卿三位局御夢想事】 御念誦を暫く止られて、御涙の内にかくはかり、 忘すは神も哀れと思ひしれ心つくしの古への旅 と遊て、少し御目睡有ける其夜の御夢に	【巻六 民部卿三位局御夢想事】 御念誦ヲ暫被レ止テ、御涙ノ内ニカクバカリ、 忘ズハ神モ哀レト思シレ心ヅクシノ古ヘノ旅 ト遊テ、少シ御目睡有ケル其夜ノ御夢ニ	

① 神仏への信仰を描いたもの 16例

【巻三第一章 聖廟御事】 御涙更に乾く間も無れば、旅泊の思ひを述させ給ひける詩にも、 自二從勅使一駟將去 父子一時五処離 口不能言眼中血 伏仰天神与地祇	【巻二二 大内裏造営事付聖廟御事】 御泪更に乾間モ無レバ、旅泊ノ思ヲ述サセ給ケル詩ニモ、 自二從勅使一駟將去。 父子一時五処離。 口不能言眼中血。 俯仰天神与地祇。
【巻三第三章 一宮御息所事】 昔業平中将、恋せしと御祓せし事も、哀なる様に思召出されて、 祈る共神やはうけん影をのみ御手洗河の深き思ひを と詠せさせ給ふ時しもあれ	【巻一八 春宮還御事付一宮御息所事】 昔業平中将、恋セジト御祓セシ事モ、哀ナル様ニ思召出サレテ、 祈ル共神ヤハウケン影ヲノミ御手洗河ノ深キ思ヲ ト詠ゼサセ給フ時シモアレ
北野天神荒人神に成せ給ひし其古への御悲み、思召知せ給は、 我を都へ帰し御座せと、御心の中に祈せ給ふ。	北野天神荒人神ニ成セ給シ其古ヘノ御悲ミ、思召知セ給ハ、 我ヲ都ヘ帰シ御座セト御心ノ中ニ祈セ給。
つや／＼息を出させ給はす、御心の中に仏の御名許を念し 思召て、早絶入せ給ひぬるかと思えたり。	ツヤ／＼息ヲモ出サセ給ハズ、御心ノ中ニ仏ノ御名許ヲ念ジ 思召テ、早絶入セ給ヌルカト見ヘタリ。
【巻四第一章 先帝崩御事】 南朝の年号延元三年八月九日より、吉野の主上、御不豫の御事 有けるか、次第に重らせ給ふ。医王善逝の誓約も、祈に其験なく	【巻二一 先帝崩御事】 南朝ノ年号延元三年八月九ヨリ、吉野ノ主上御不豫ノ御事 有ケルガ、次第ニ重ラセ給。医王善逝ノ誓約モ、祈ニ其験ナク
【巻四第二章 吉野炎上事】 主上勝手の宮の御前を過させ給ひける時、寮の御馬より 下させ給ひて、御涙の中に一首かくぞ思召つゝさせ給ひける。 頼かひなきに付ても誓ひてし勝手の神の名こそ惜けれ	【巻二六 芳野炎上事】 主上勝手ノ宮ノ御前ヲ過サセ給ヒケル時、寮ノ御馬ヨリ 下サセ給ヒテ、御泪ノ中ニ一首カクゾ思召ツゞケサセ給ヒケル。 憑カヒ無ニ付テモ誓ヒテシ勝手ノ神ノ名こそ惜ケレ
【巻四第四章 雲景未来記之事】 上暗く下諛て諸事に親疎あれば、神明、三宝の冥鑑にも背き、 天下貴賤の人望にも違て、我非をは知らず、人を誇り合ふ心あり。	【巻二七 雲景未来記事】 上暗ク下諛テ諸事ニ親疎アレバ、神明三宝ノ冥鑑ニモ背キ、 天下貴賤ノ人望ニモ違テ、我非ヲバ知ズ、人ヲ誇リ合フ心アリ。
先朝は随分賢王の行をせんとし給ひしか共、真実、仁徳撫育の 叡慮は惣してなし。繼絶興廢、神明、仏陀を御帰依有様に 見えしか共、懦弱のみ有て実儀不御座。	先朝随分賢王ノ行ヲセントシ給シカ共、真実仁徳撫育ノ 叡慮ハ惣ジテナシ。繼絶興廢神明仏陀ヲ御帰依有様ニ 見ヘシカ共、懦弱ノミ有テ実儀不御座。
【巻五第二章 北野通夜物語事付青砥左衛門事】 又飢たる乞食、疲れたる訴訟人などを見ては、分に随ひ 品に依て、米銭、絹布の類を与へければ、	【巻三五 北野通夜物語事付青砥左衛門事】 又飢タル乞食、疲レタル訴訟人ナドヲ見テハ、分ニ随ヒ 品ニ依テ、米銭絹布ノ類ヲ与ヘケレバ、

仰の信も のた例 へい16 神を ①	15 例 ② 神仏の存在を想定して描いたもの
仏菩薩の悲願に均き慈悲にてぞありける。 【巻六第一章 光厳院禪定法皇行脚事】 今より薪を拾ひ、水を汲態にて候とも、三年間常隨宮仕申候て、 仏神三宝の御とかめをも免れ候はん」とぞ申ける。 縦仙院の故宮を棄て釈氏の真門に入せ給ふとも、寛平の昔にも 准へ、花山の旧き跡をこそ追れ候へきに	【巻一第十九章 主上御夢事付楠事】 主上思食煩はせ給ひて、少し御まところみ有ける御夢に（中略） 鬘結たる童子二人忽然として来て（中略）あの樹の陰に南へ 向へる座席あり。是御為に設たる玉宸にて候へは、暫く此に 御座候へと申て、童子は遙の天に上り去ぬと御覽して、御夢は やかて覺にけり。（中略）朕再び南面の徳を治て、天下の土を 朝せしめんする處を、日光月光の示されけるよ 【巻二第二章 谷堂炎上事】 此上人（中略）戒定慧の三学を兼備して、六根清浄の功德を 得給ひしかは、法花読誦の窓の前には、松尾の明神坐列して 耳を傾け、真言秘密の扉の中には 釈尊御入滅の刻（中略）捷疾鬼と云鬼神、潜に双林の下に 近付て、御牙を一つ引欠て是を取る。（中略） 韋駄天追詰奪とり、是を得て、其後漢土の道宣律師に与へらる。 【巻三第三章 一宮御息所事】 是は何様龍神の、財宝に目を懸られたりと覺えたり。 此鳴渡と申は、 何にても候へ、龍神の欲からせ給ふ物を、海へ沈め候はねは、 いつも加様の不思議ある所にて候へは、何様彼上臈を龍神の 思ひ懸申されたりと覺え候。（中略）此上臈を海へ入進せて、 百余人の命を助させ給へとぞ申ける。
【巻三九 光厳院禪定法皇行脚事】 今より薪ヲ拾ヒ、水ヲ汲態ニテ候共、三年ガ間常隨給仕申候テ、 仏神三宝ノ御トガメヲモ免レ候ハン。」トゾ申ケル。 縦仙院ノ故宮ヲ棄テ釈氏ノ真門ニ入セ給フ共、寛平ノ昔ニモ 准へ、花山ノ旧キ跡ヲコソ追レ候ベキニ	【巻三 主上御夢事付楠事】 主上思食煩ハセ給テ、少シ御マドロミ有ケル御夢ニ（中略） 鬘結タル童子二人忽然トシテ来テ（中略）アノ樹ノ陰ニ南へ 向ヘル座席アリ。是御為ニ設タル玉宸ニテ候ヘバ、暫ク此ニ 御座候ヘ。」ト申テ、童子ハ遙ノ天ニ上リ去ヌト御覽ジテ、御夢ハ ヤガテ覺ニケリ。（中略）朕再び南面ノ徳ヲ治テ、天下ノ土ヲ 朝セシメンズル処ヲ、日光月光ノ被レ示ケルヨ 【巻八 谷堂炎上事】 此上人（中略）戒定慧ノ三学ヲ兼備シテ、六根清浄ノ功德ヲ 得給ヒシカバ、法華読誦ノ窓ノ前ニハ、松尾ノ明神坐列シテ 耳ヲ傾ケ、真言秘密ノ扉ノ中ニハ 釈尊御入滅ノ刻（中略）捷疾鬼ト云鬼神、潜ニ双林ノ下ニ 近付テ、御牙ヲ一引欠テ是ヲ取ル。（中略） 韋駄天追攻奪取、是ヲ得テ其後漢土ノ道宣律師ニ被レ与。 【巻一八 春宮還御事付一宮御息所事】 「是ハ何様龍神ノ財宝ニ目懸ラレタリト覺ヘタリ。 「此鳴渡ト申ハ、 龍宮城ノ東門ニ当テ候間、 何ニテモ候へ、龍神ノ欲シガラセ給フ物ヲ、海へ沈メ候ハネバ、 イツモ加様ノ不思議アル所ニテ候ハ、何様彼上臈ヲ龍神ノ 思懸申サレタリト覺ヘ候。（中略）此上臈ヲ海へ入進セテ、 百余人ノ命ヲ助サセ給ヘ。」トゾ申ケル。